

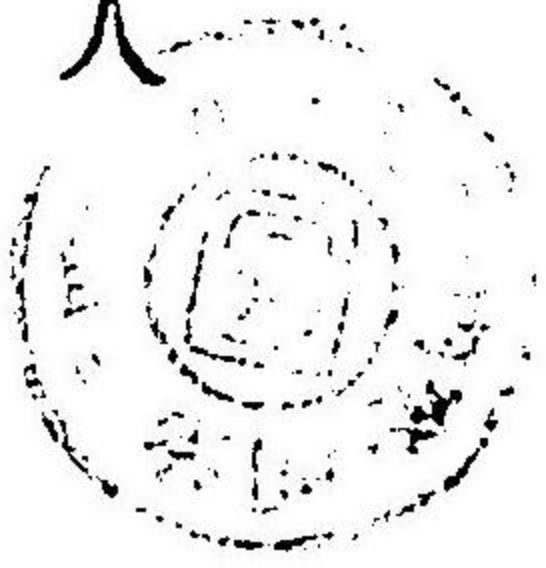
序

去年夏秋之交，余與水哉坪谷君漫遊清韓二國，君晝則携鏡寫城廓市街人物之實景，夜則秉筆錄其所跋涉見聞之情況，千里郵送，揭之新聞雜誌，以報道邦人，率無虛日，余深服其勤勉不倦也。頃日君集曩所筆爲一書，徵余一言，余曰：此書君自以爲其紀行，而以余視之，亦實我紀行也。余性疎懶，當時不手一管，而此文此畫，忽焉爲冊，何其幸也。諺有之曰：行者擇伴，可謂吾明能鑒侶伴也。君笑曰：第記之，乃書以爲序。

明治辛丑二月

鼎軒逸

人



清國を去るに臨みて

外國と思はて我は過きにけり

朝日の御旗なひき渡れは

鼎軒またしるす

拜啓過日は御來訪被下奉謝候其節御差置の
貴著渡清紀行一讀仕候處數旬之短旅行に於
て百般の事實を網羅せられ御同伴の小生に
は猶其旅行中に在る思ひ致され申候實に貴
下御健筆の程感服の外無之右御返却旁御禮
申述候敬具

二月十九日

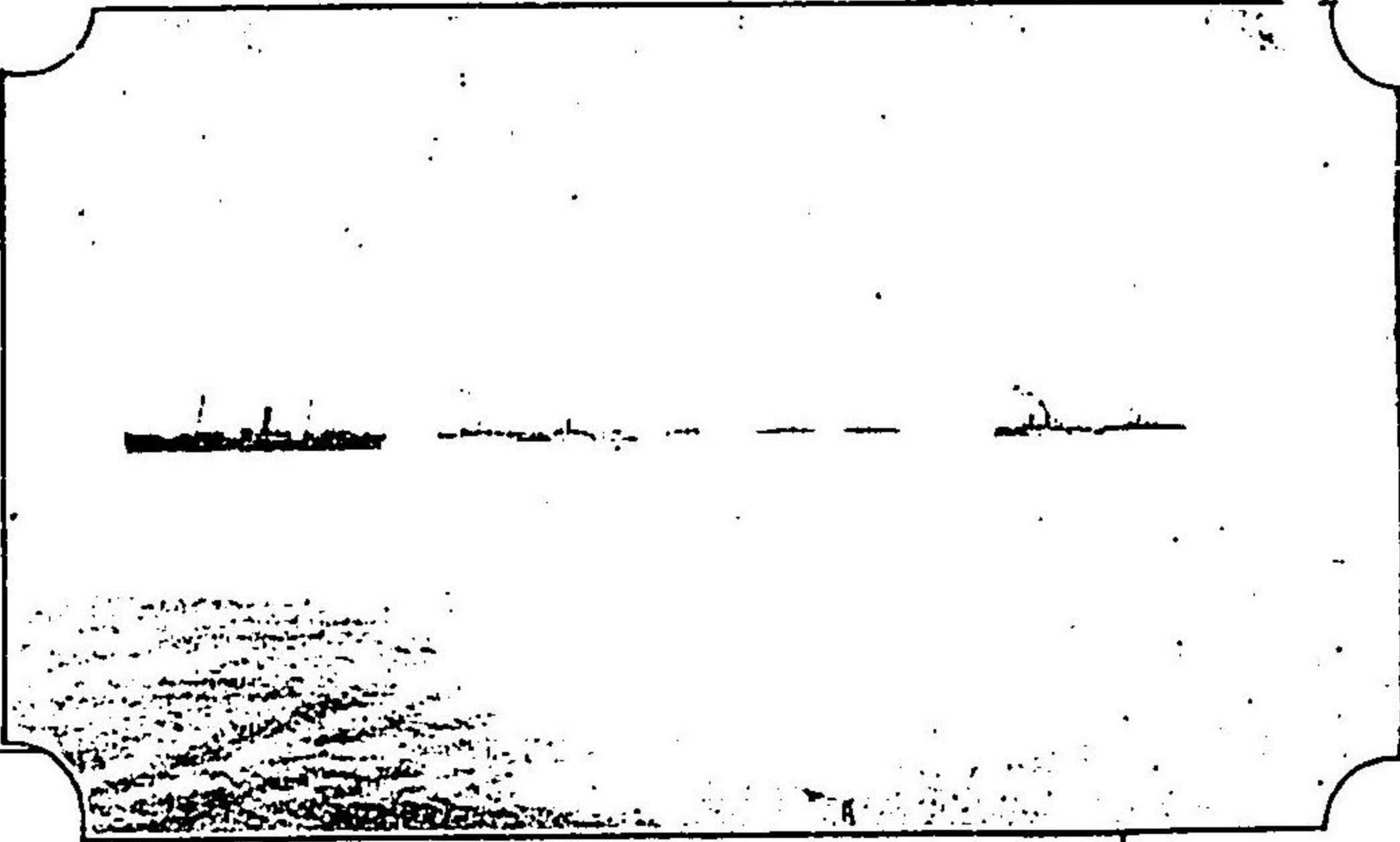
宇佐川一正

坪谷 兄

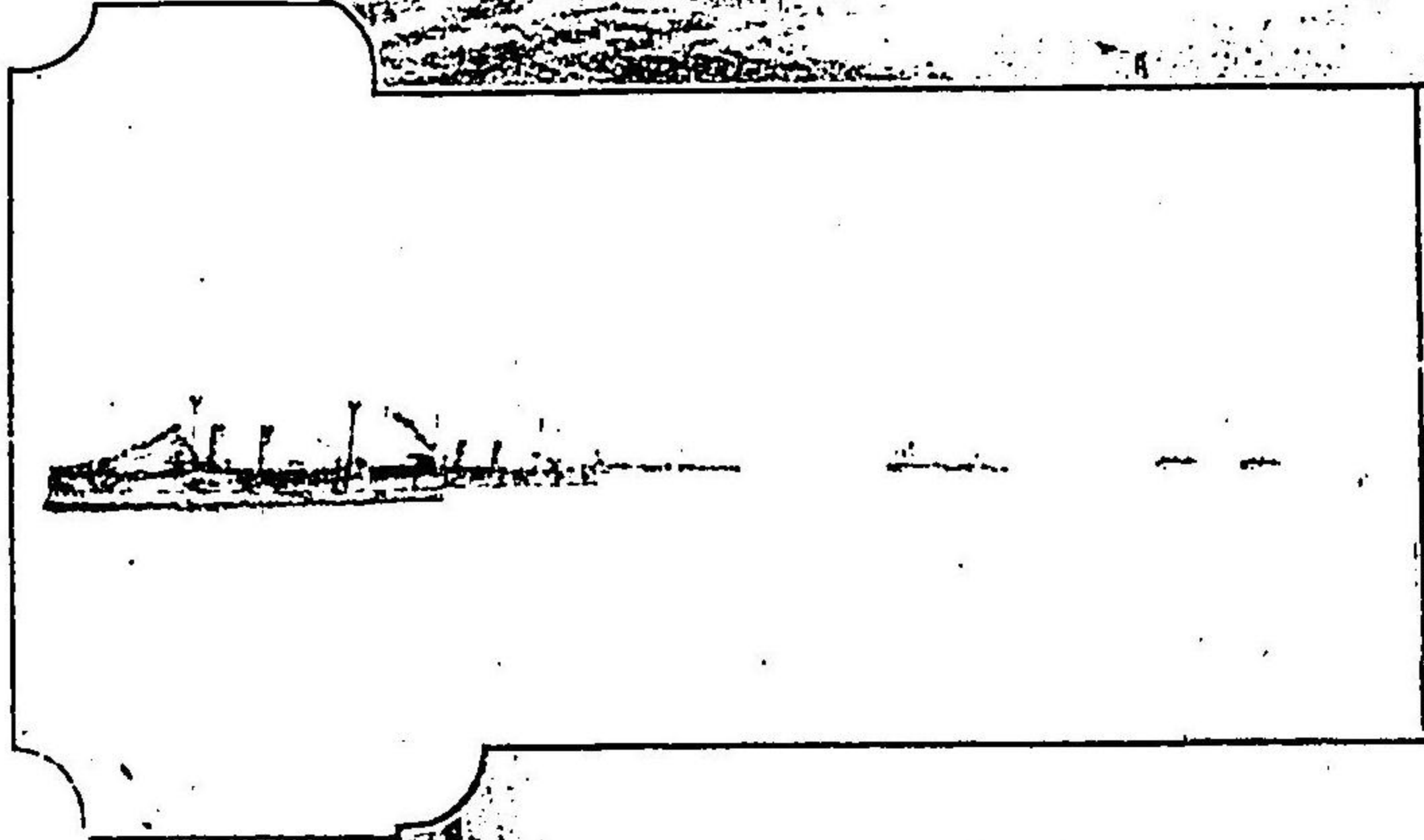
硯右

太 沽 の 光 景

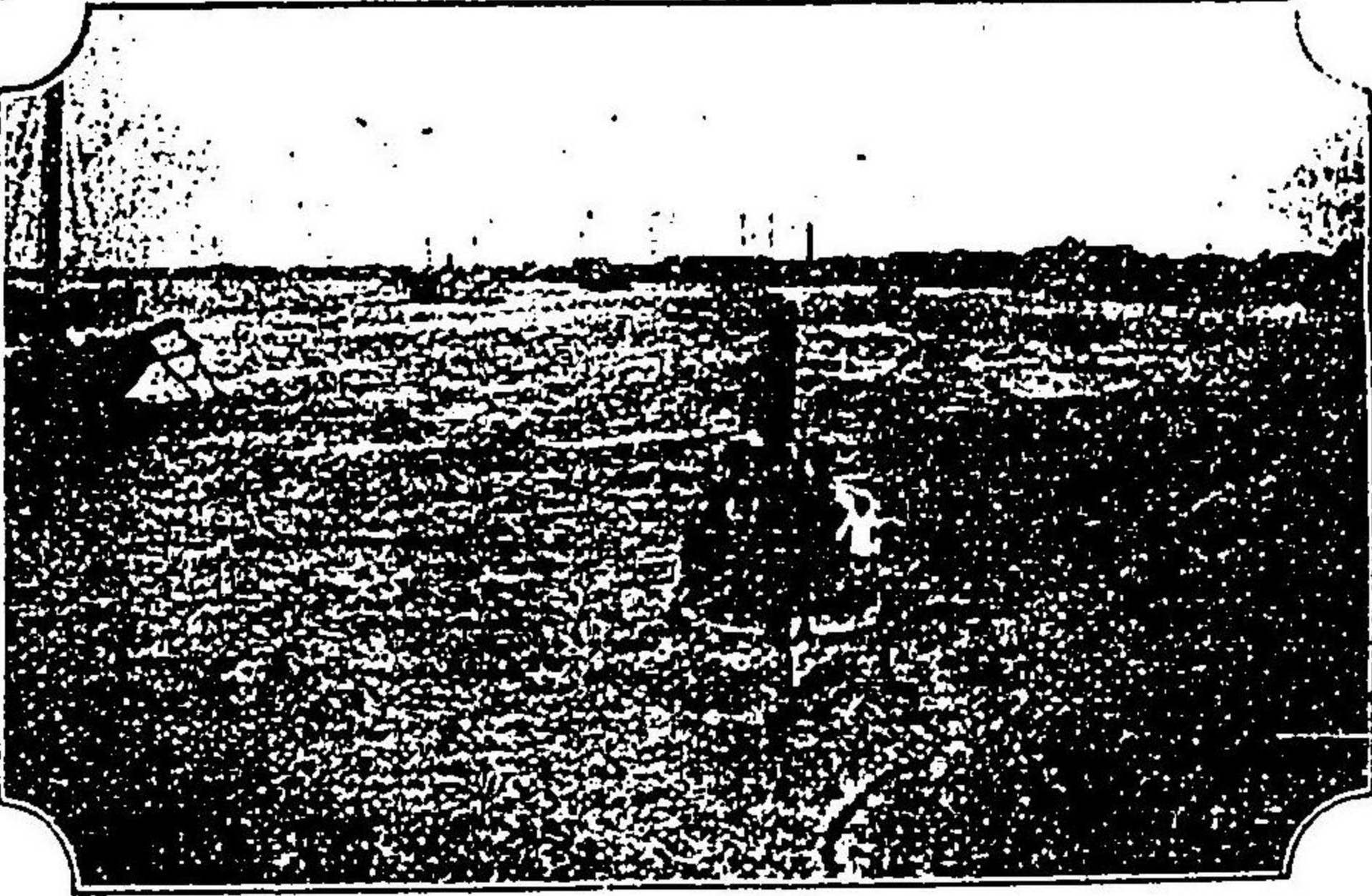
太沽沖各國軍艦



太沽沖各國軍艦



太沽市街と白河々
口の御用小蒸汽船



北京にてよめる三首

坪谷水哉

城の壁うちくたかれてやくら焼けて

残れる血しほなほなまくさき

民くさはふみあらされて九重の

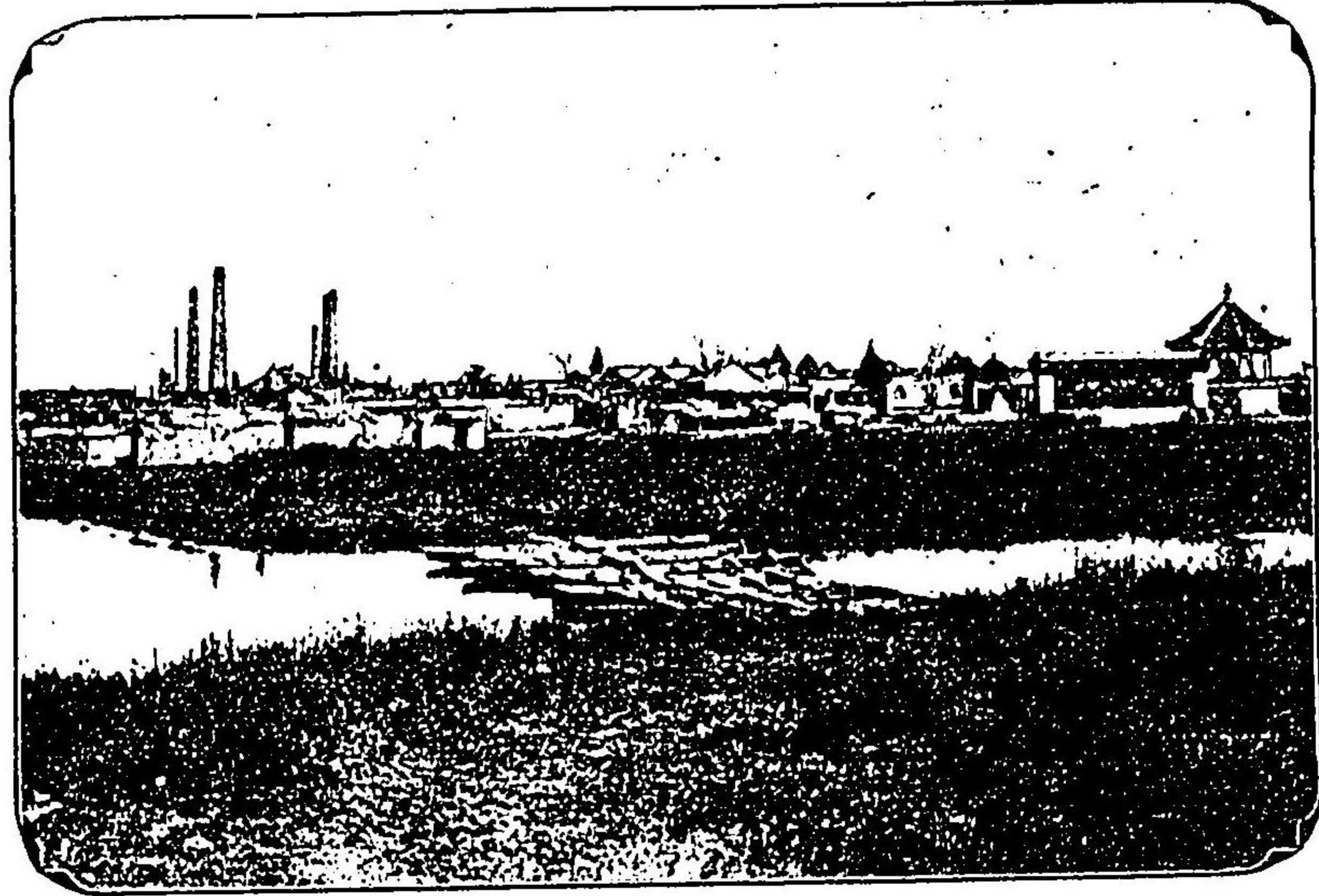
庭にもしげる八重むぐらかな

朝日かけかやく國の旗かせに

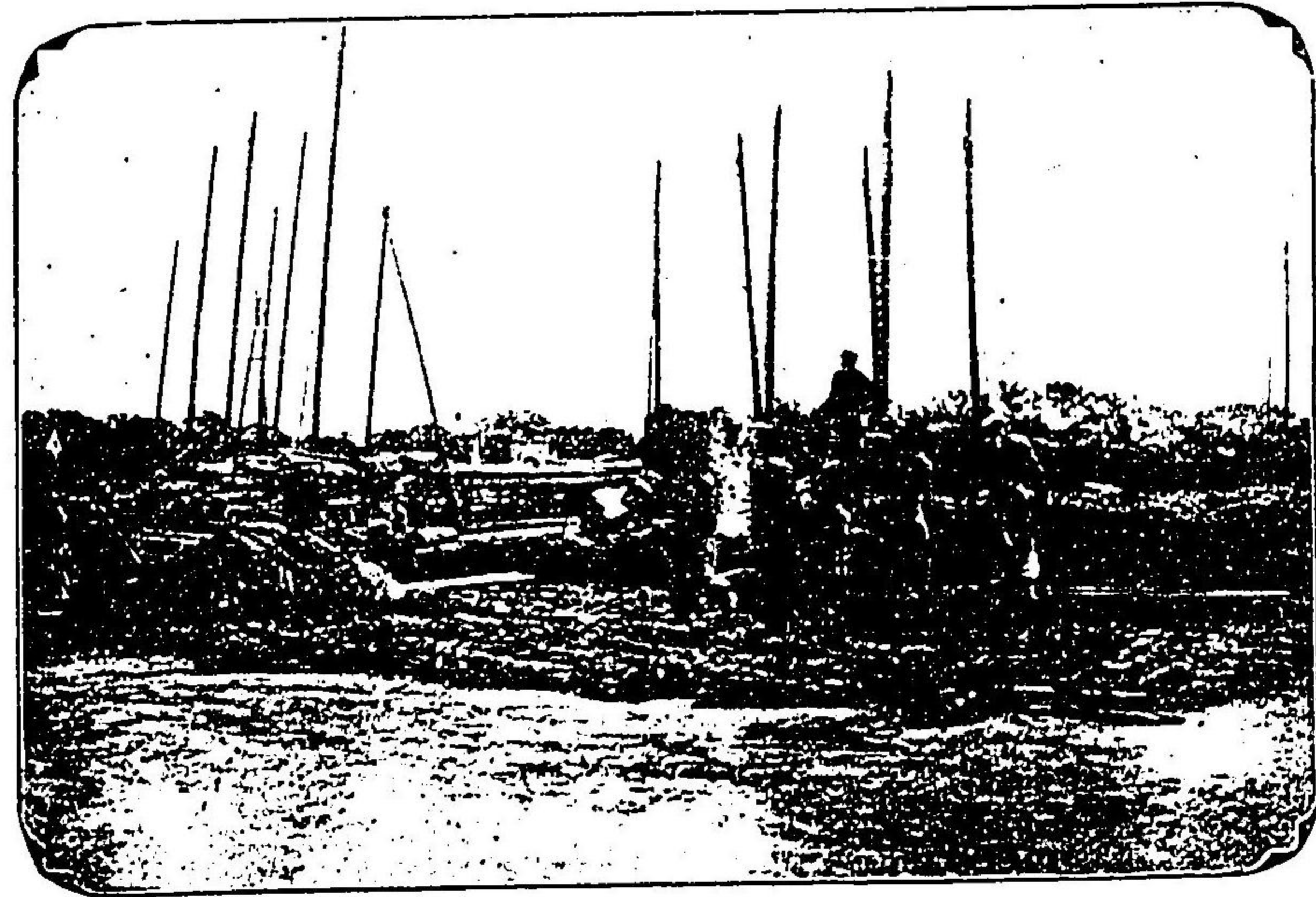
艸も木もなひくもろこしが原

津 天 の 後 戦

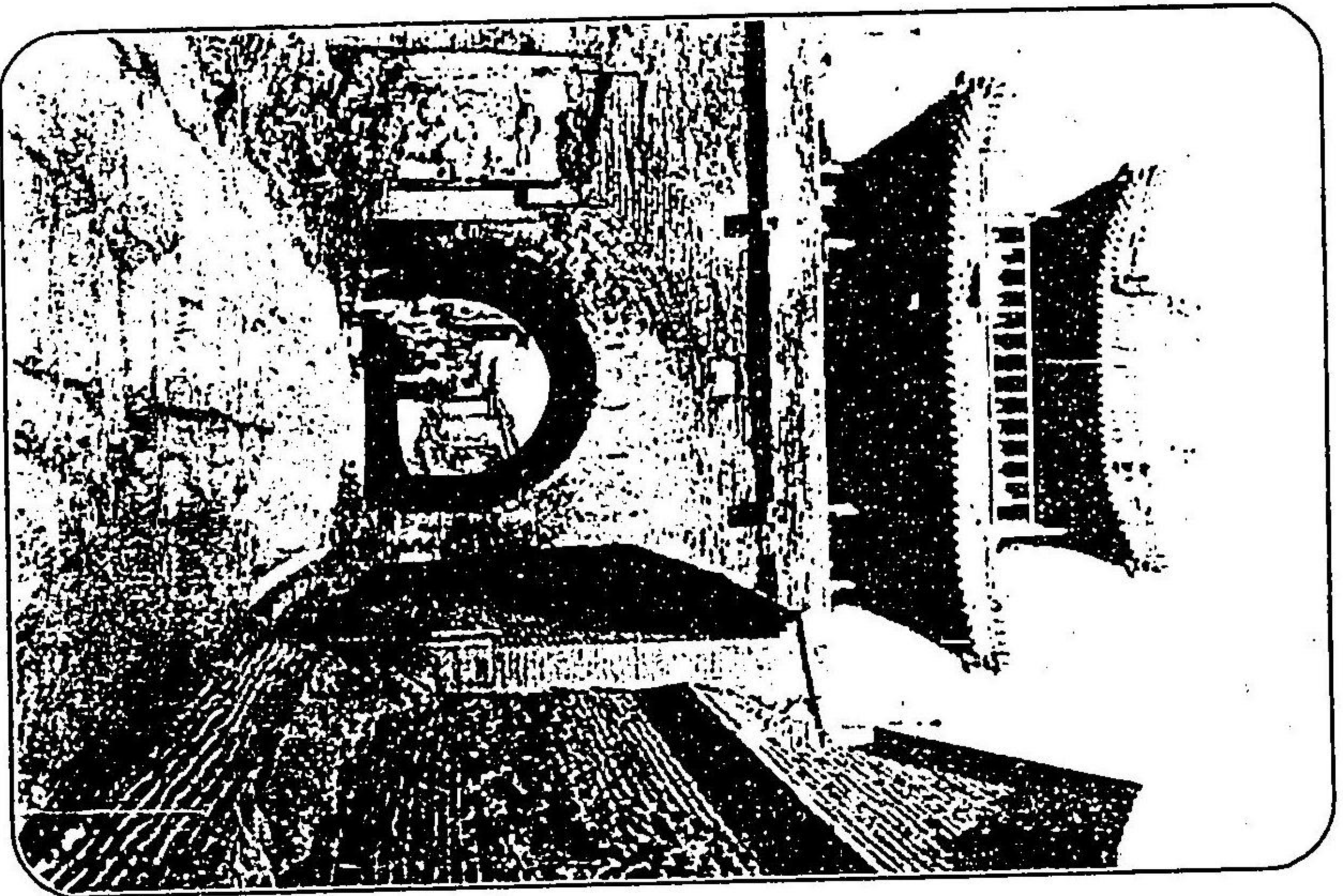
局 機 器 寺 光 海 津 天



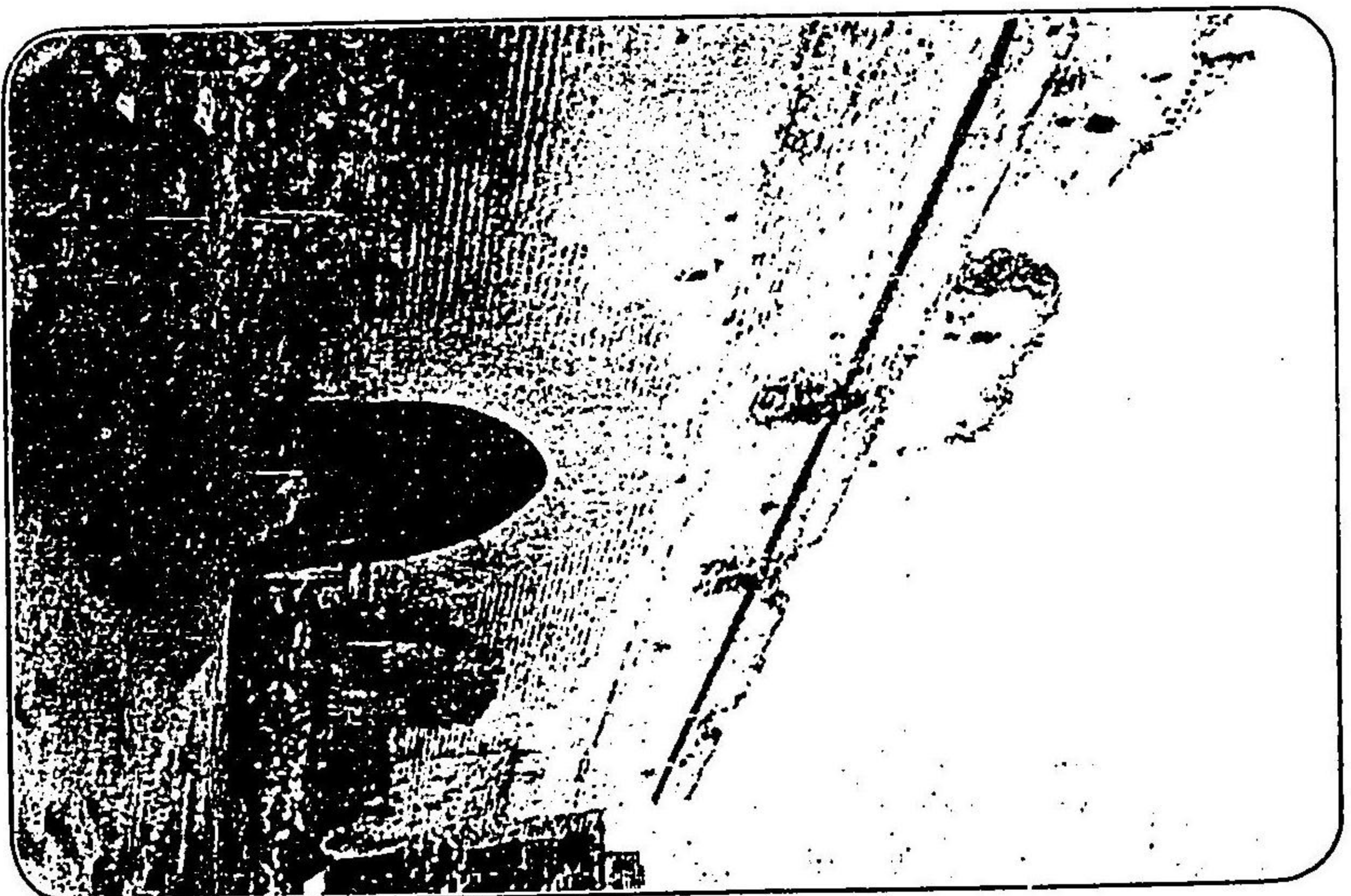
場 止 波 木 日 地 留 居 林 竹 紫 津 天



城 津 天 の 後 戦

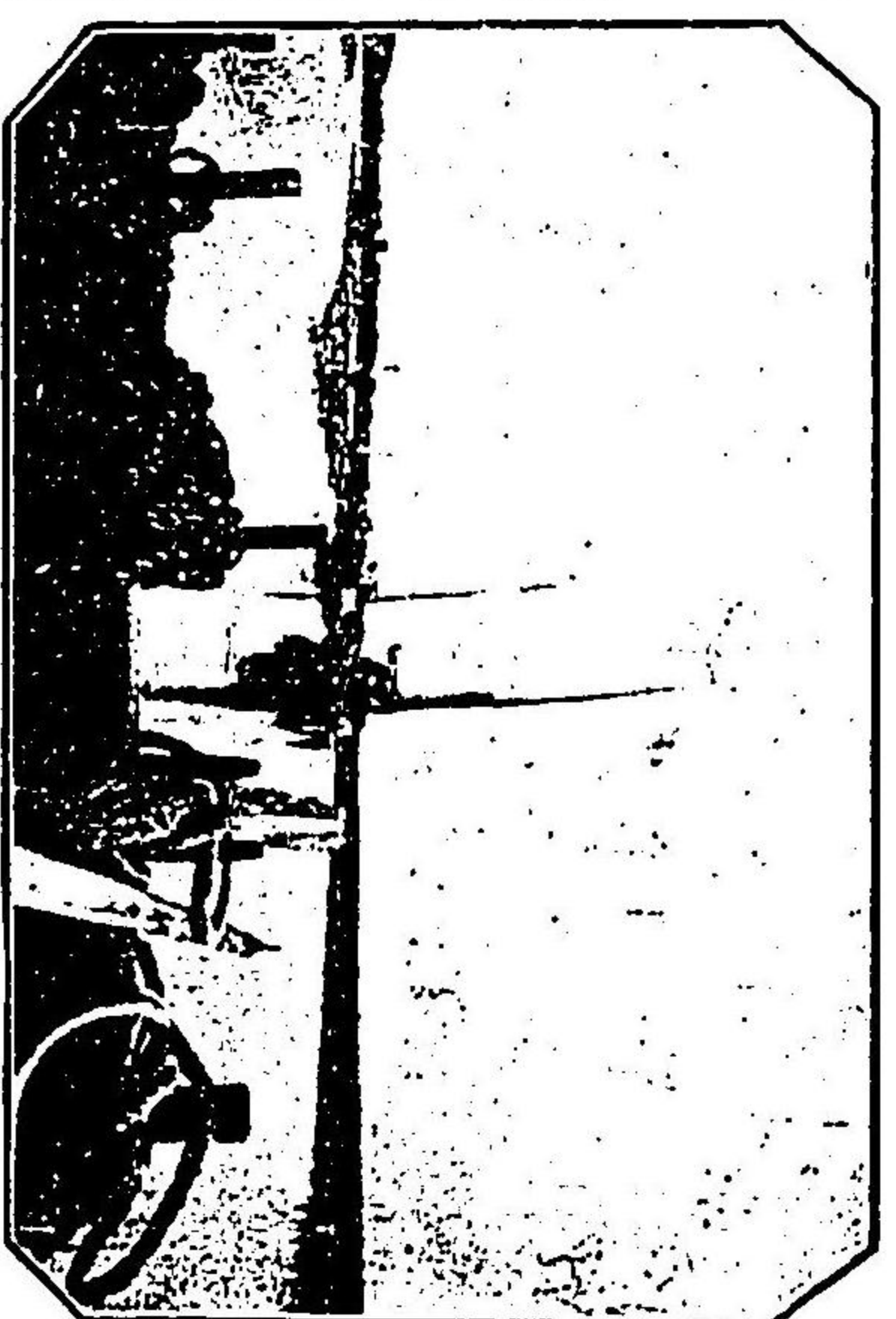


城 内 中 央 鼓 樓



激 戦 後 の 南 門

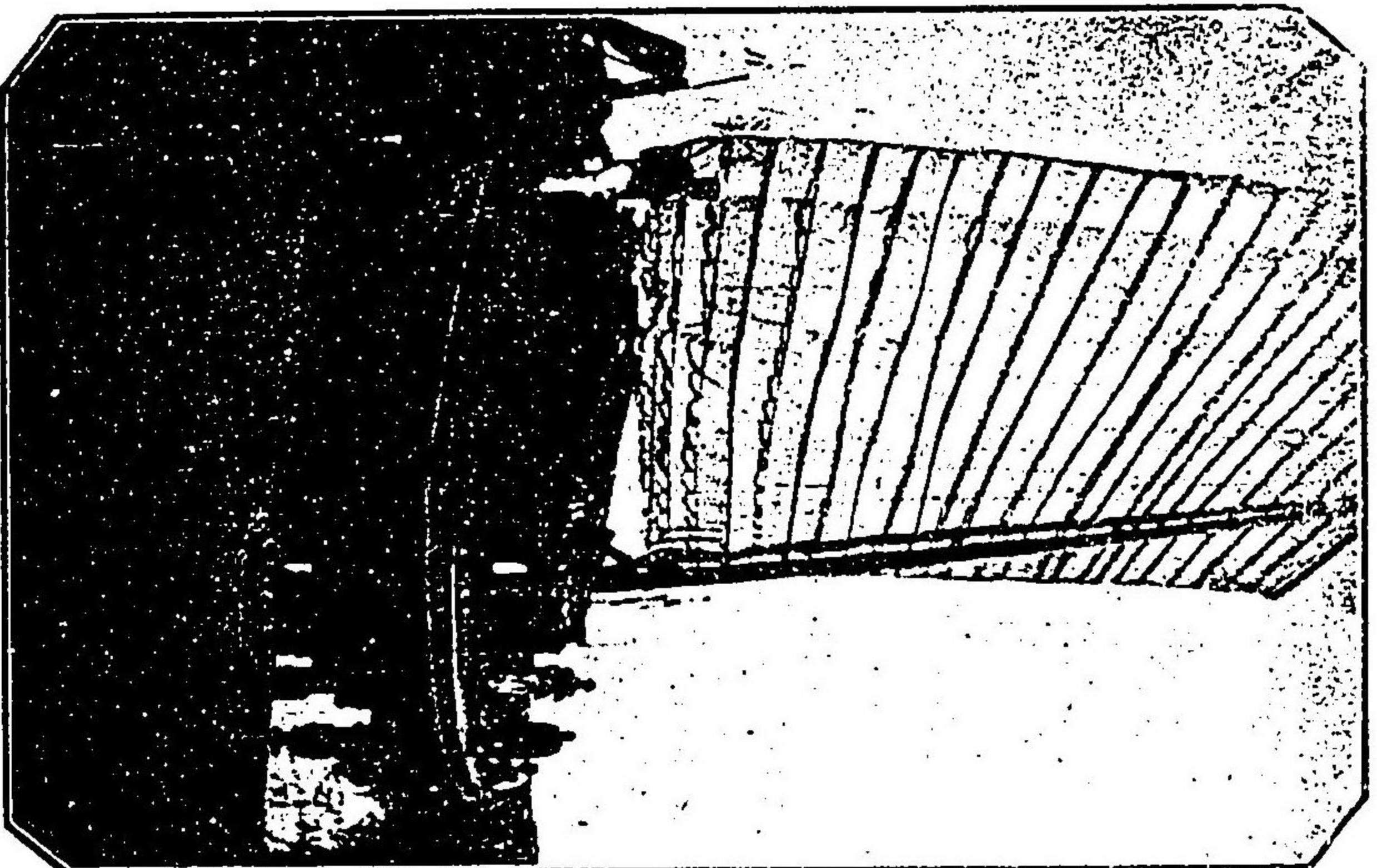
船用御軍本日の上々河白



河西務上流



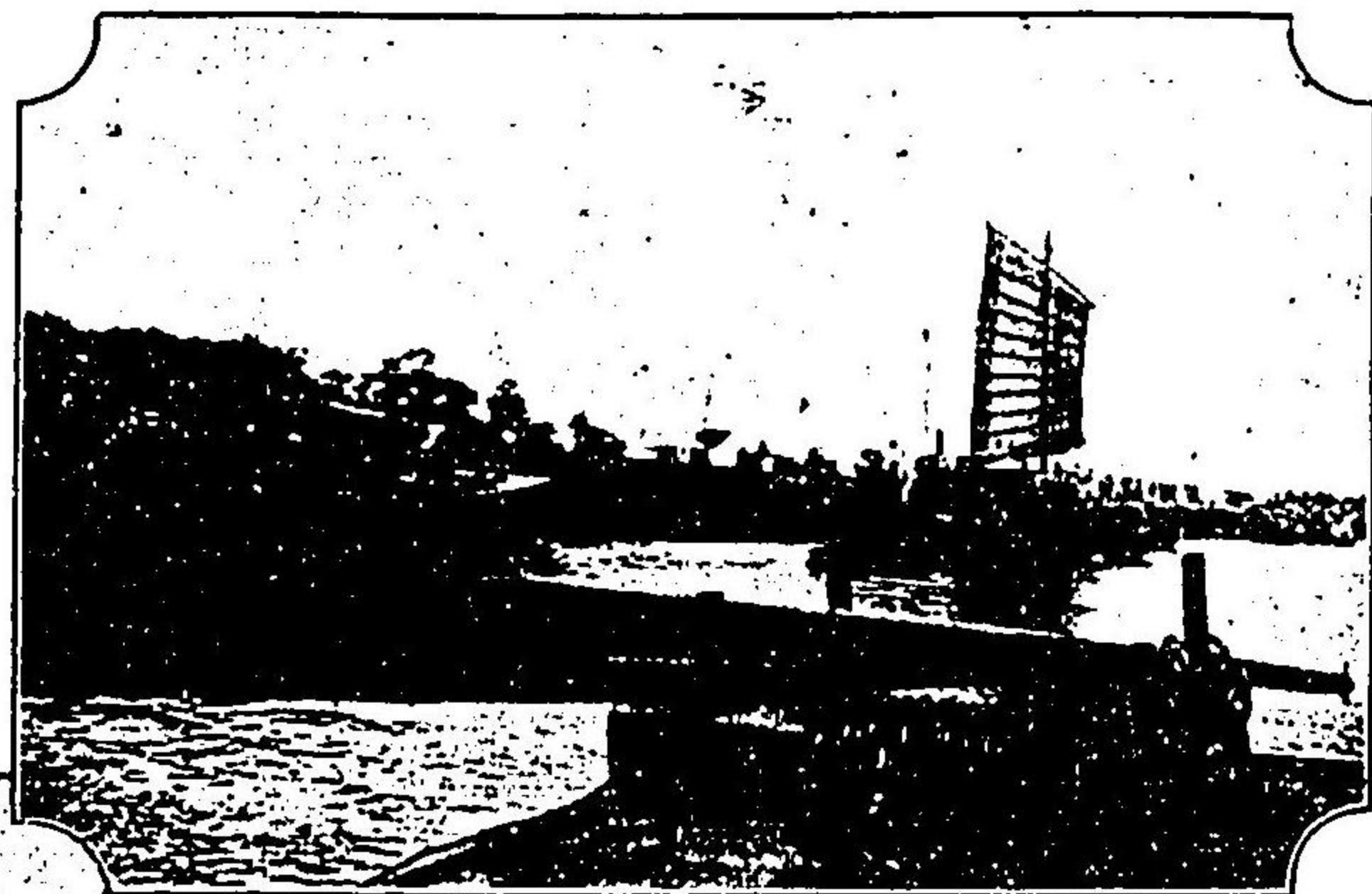
通州下流



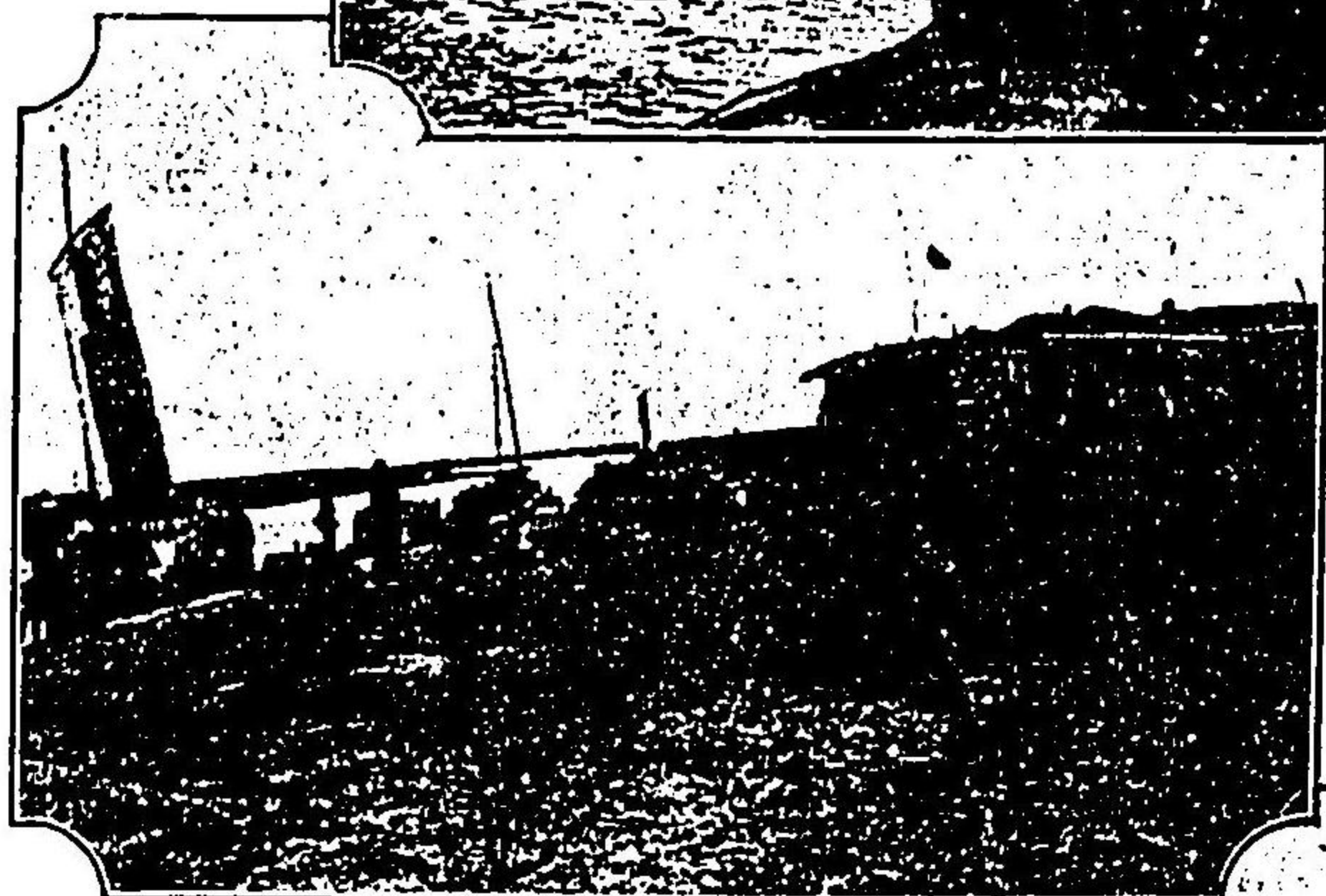
ワヤツク船の全形

白河々岸日本軍守備隊

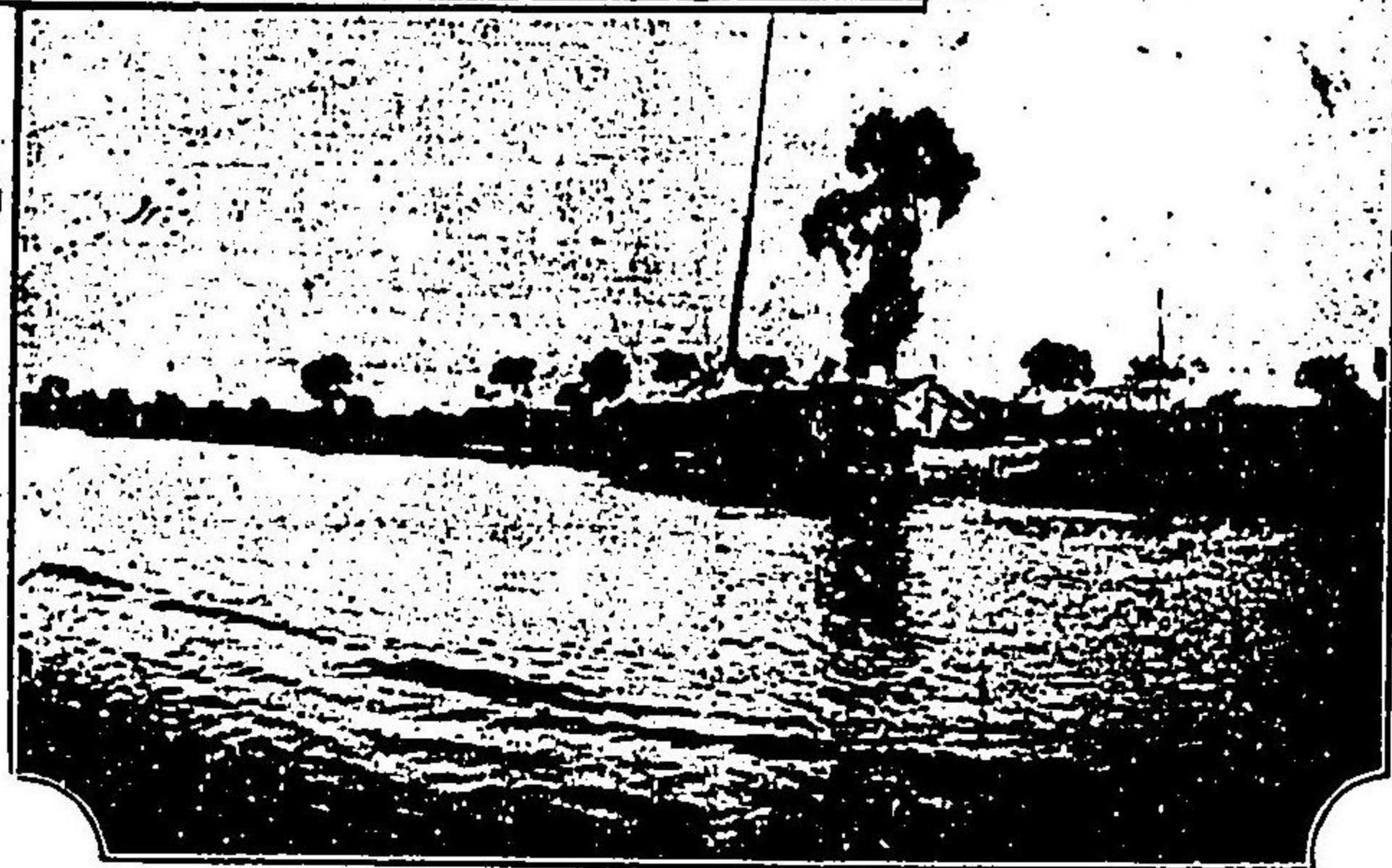
南
蔡
村



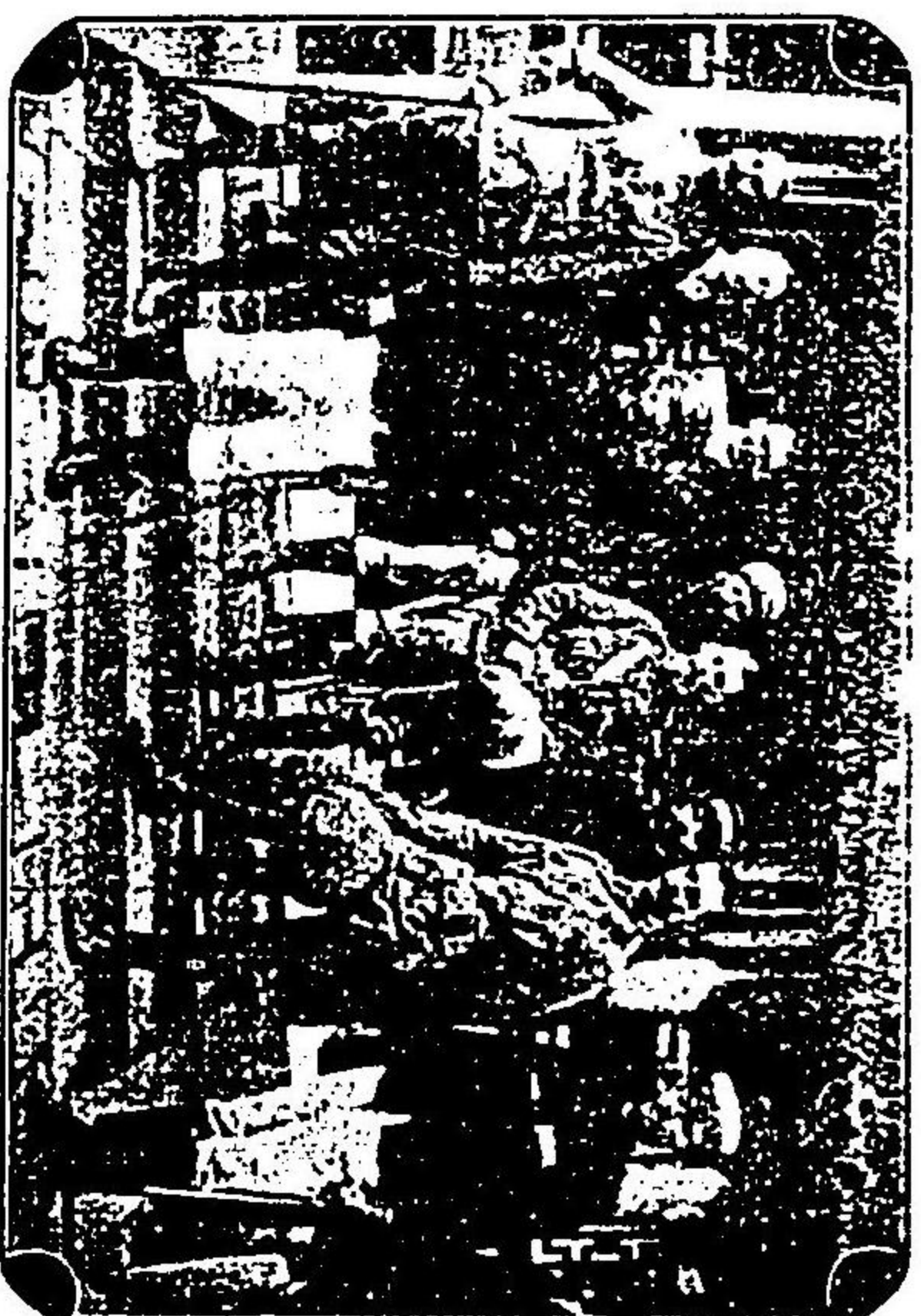
河
西
務



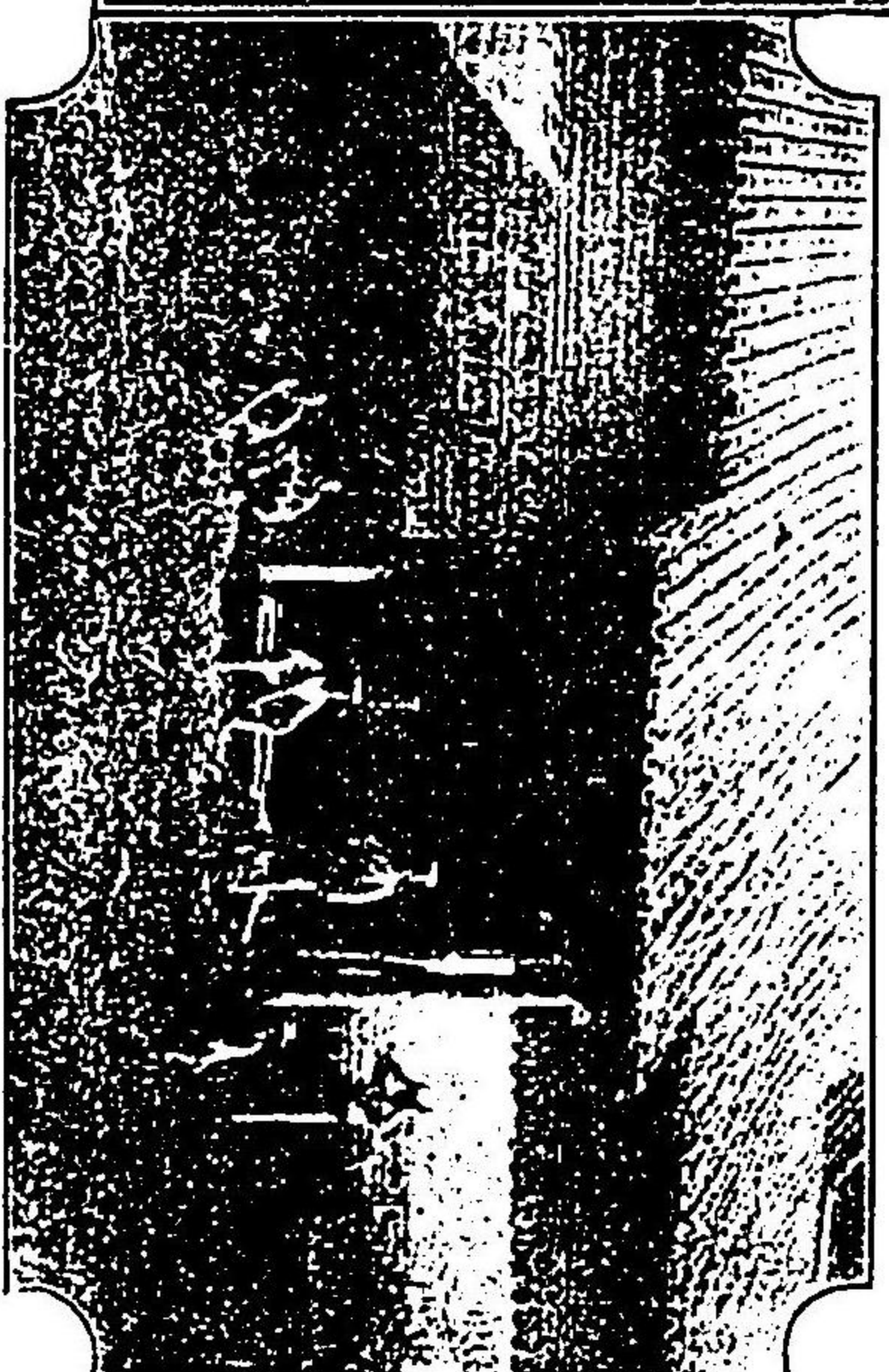
馬
房



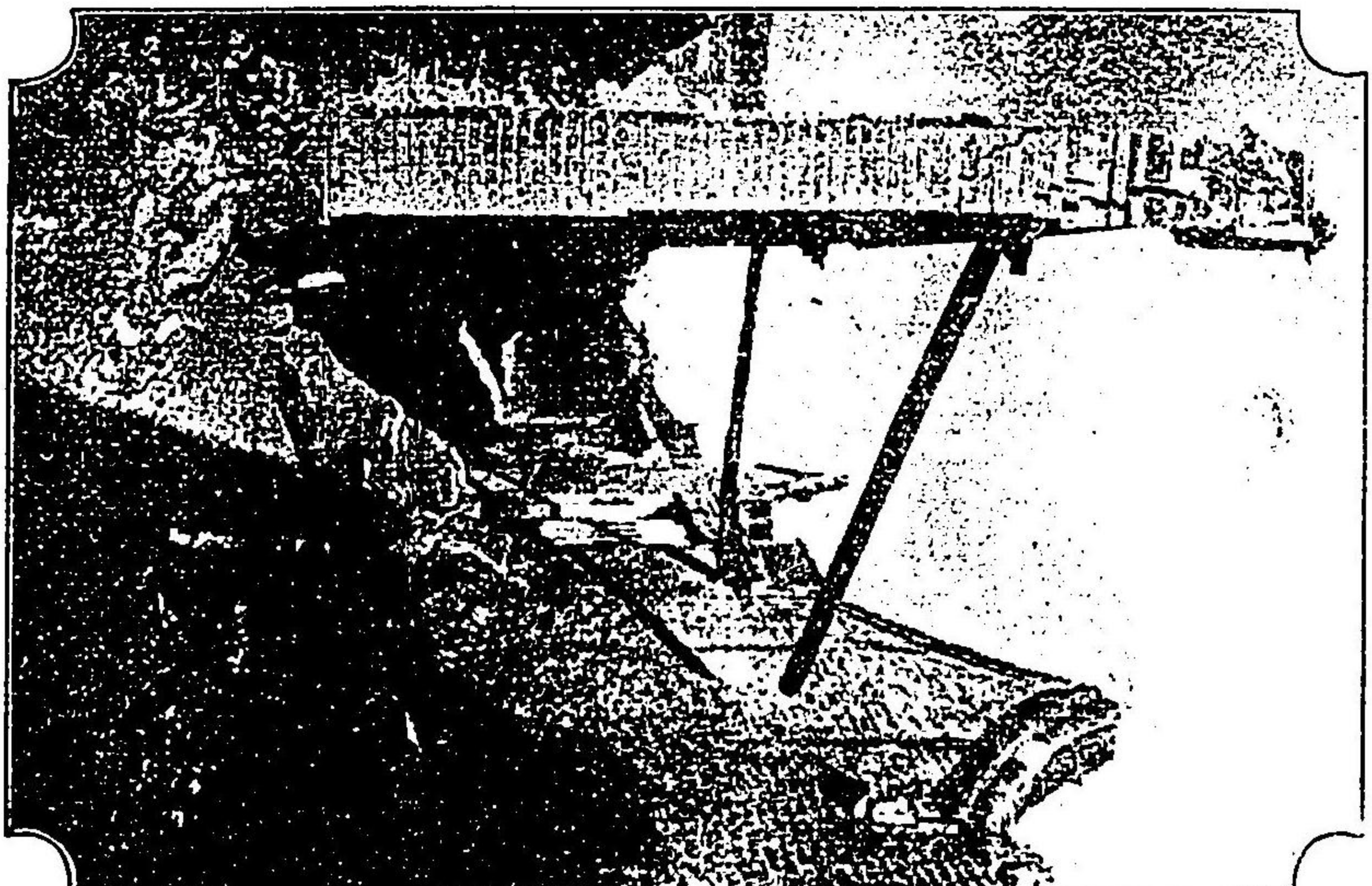
州 通 の 後 戦



日本軍守備隊本部

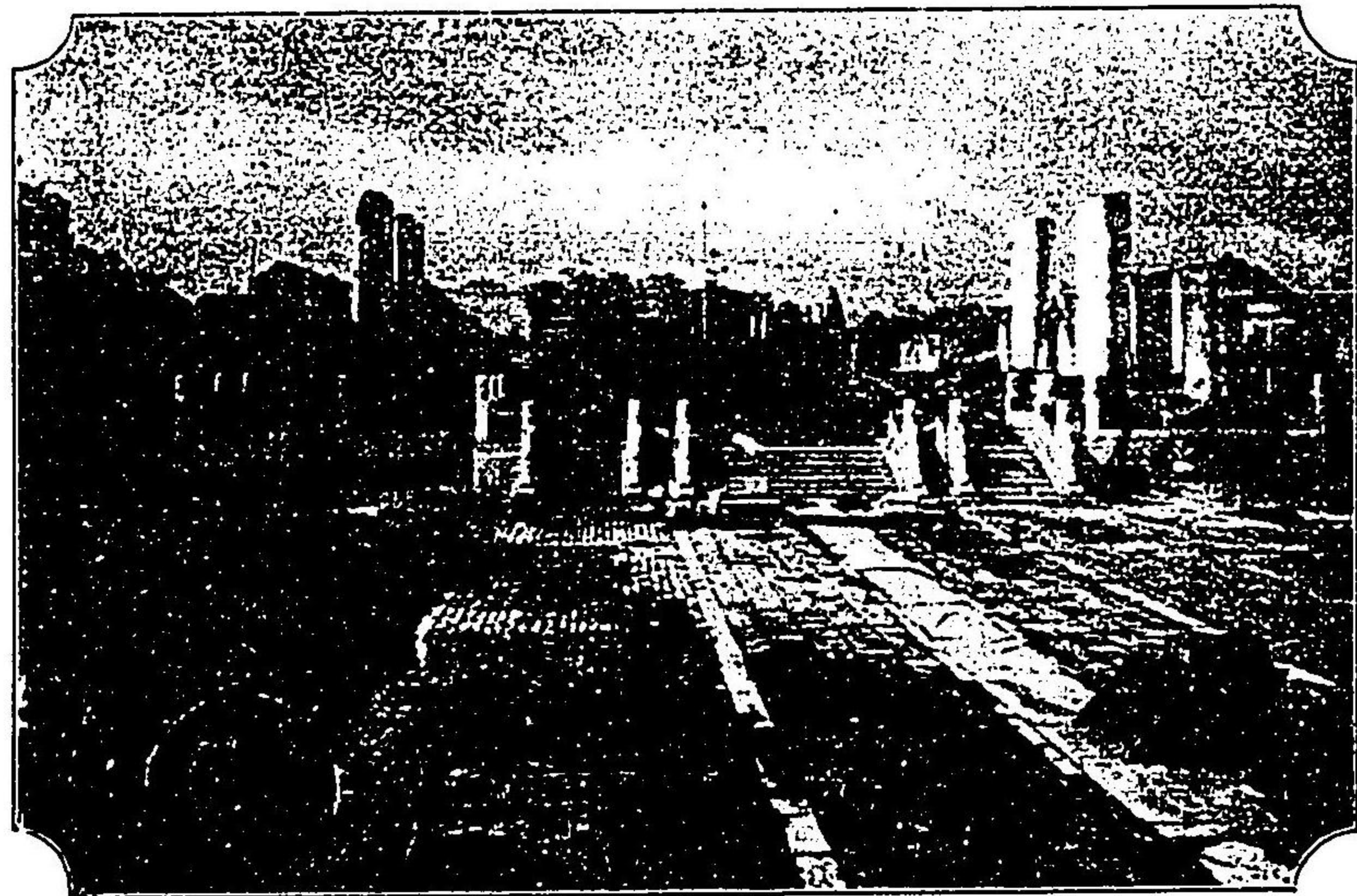


日本軍占領の米倉



市街兵燹後の惨状

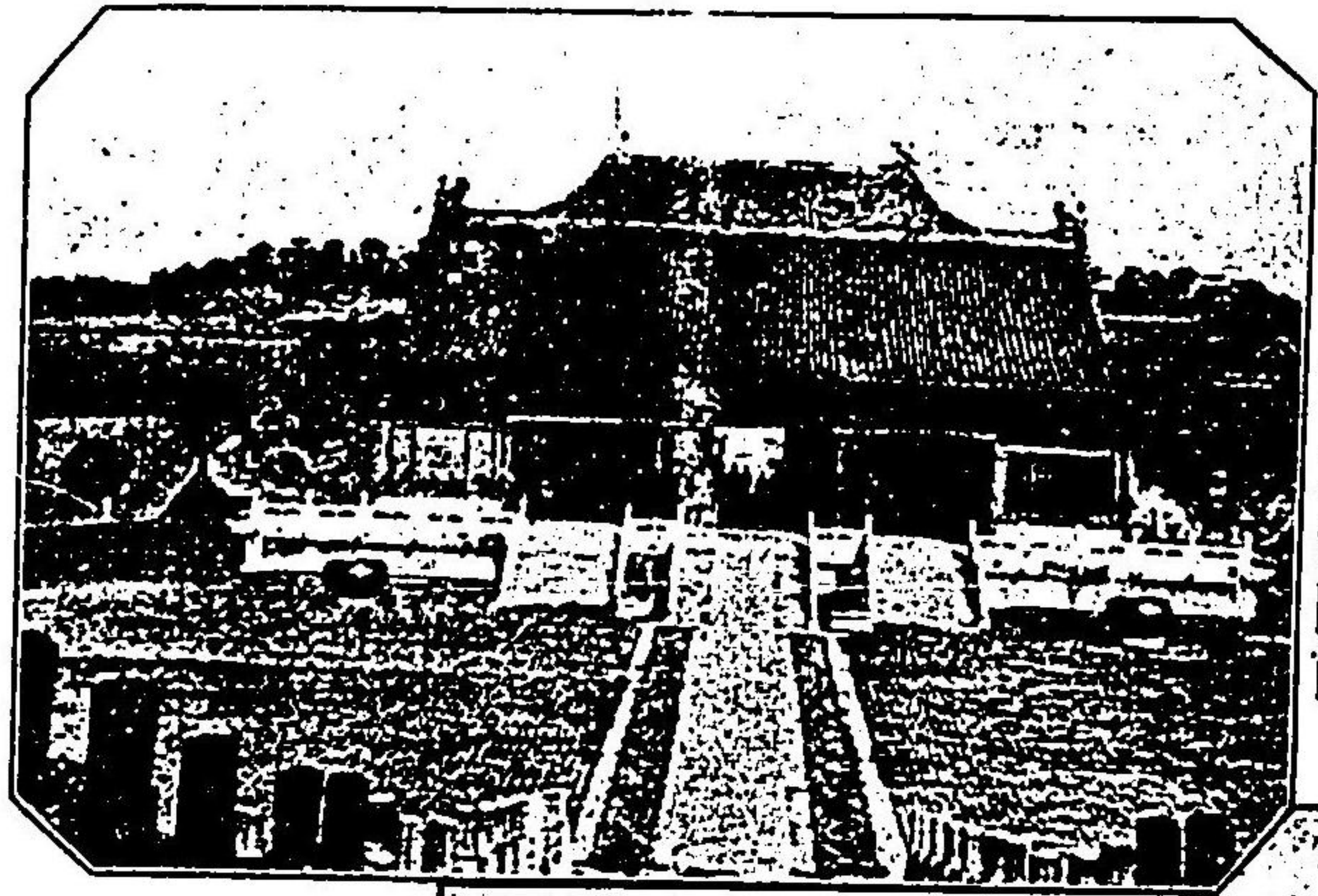
戦後の北
兵燹の後親王府



同上籠城軍の苦戦地



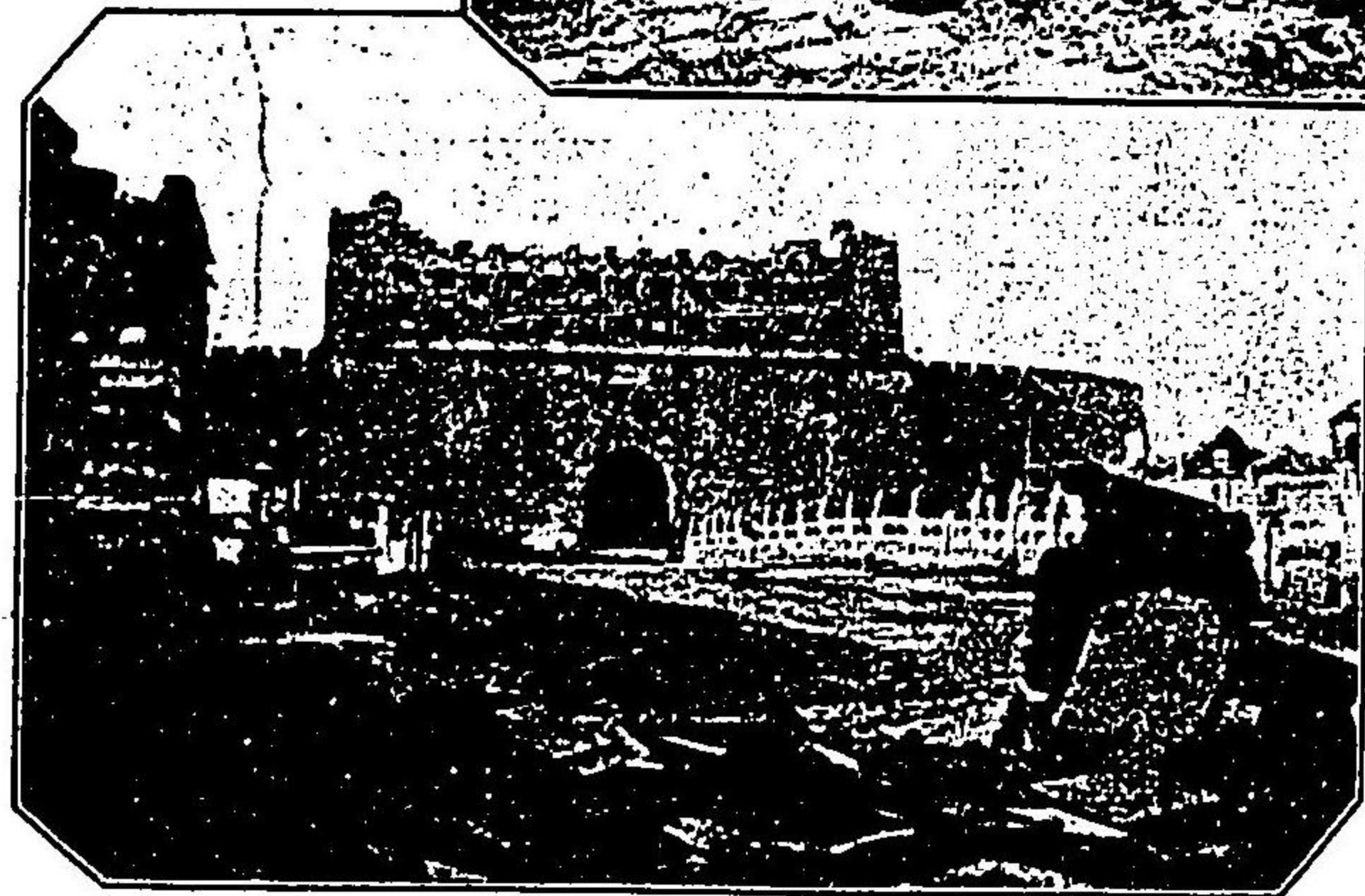
戦後の北の京



前清乾内城皇



内陽門

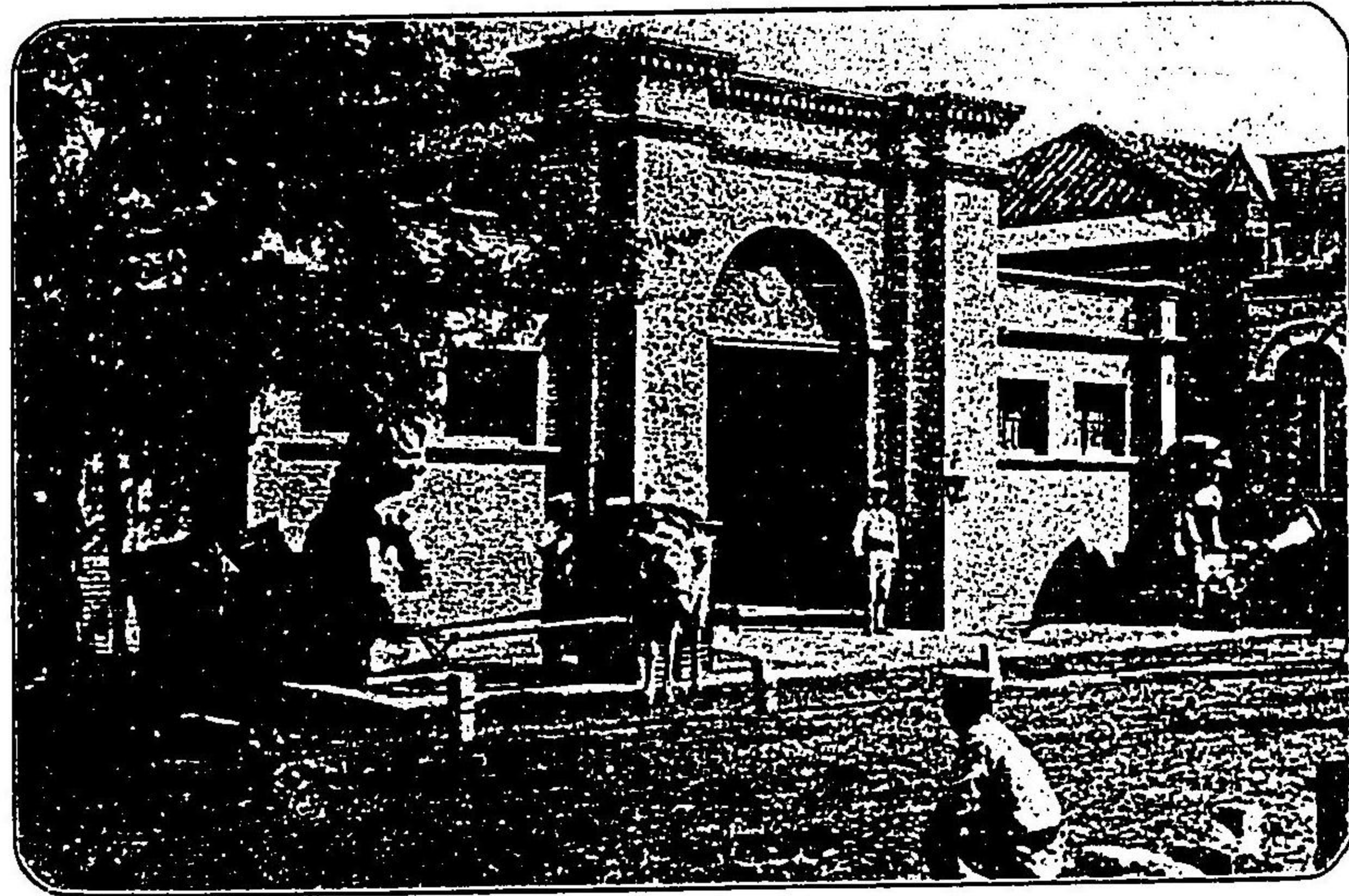


外陽門正

京北の戦後
日本公使館内第五師團司令部



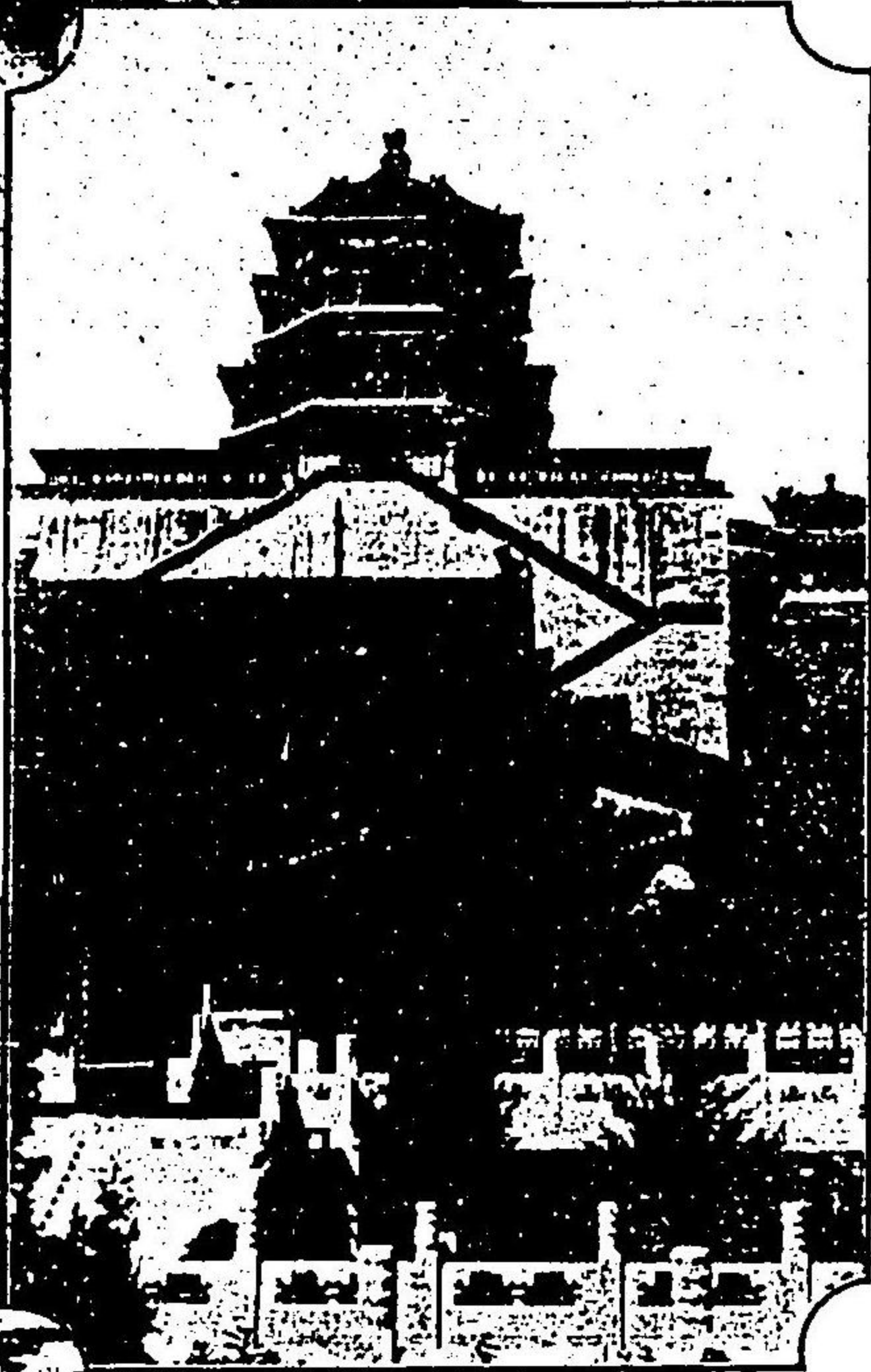
日本公使館前



萬壽山の離宮
昆明湖を隔てて佛香閣を望む



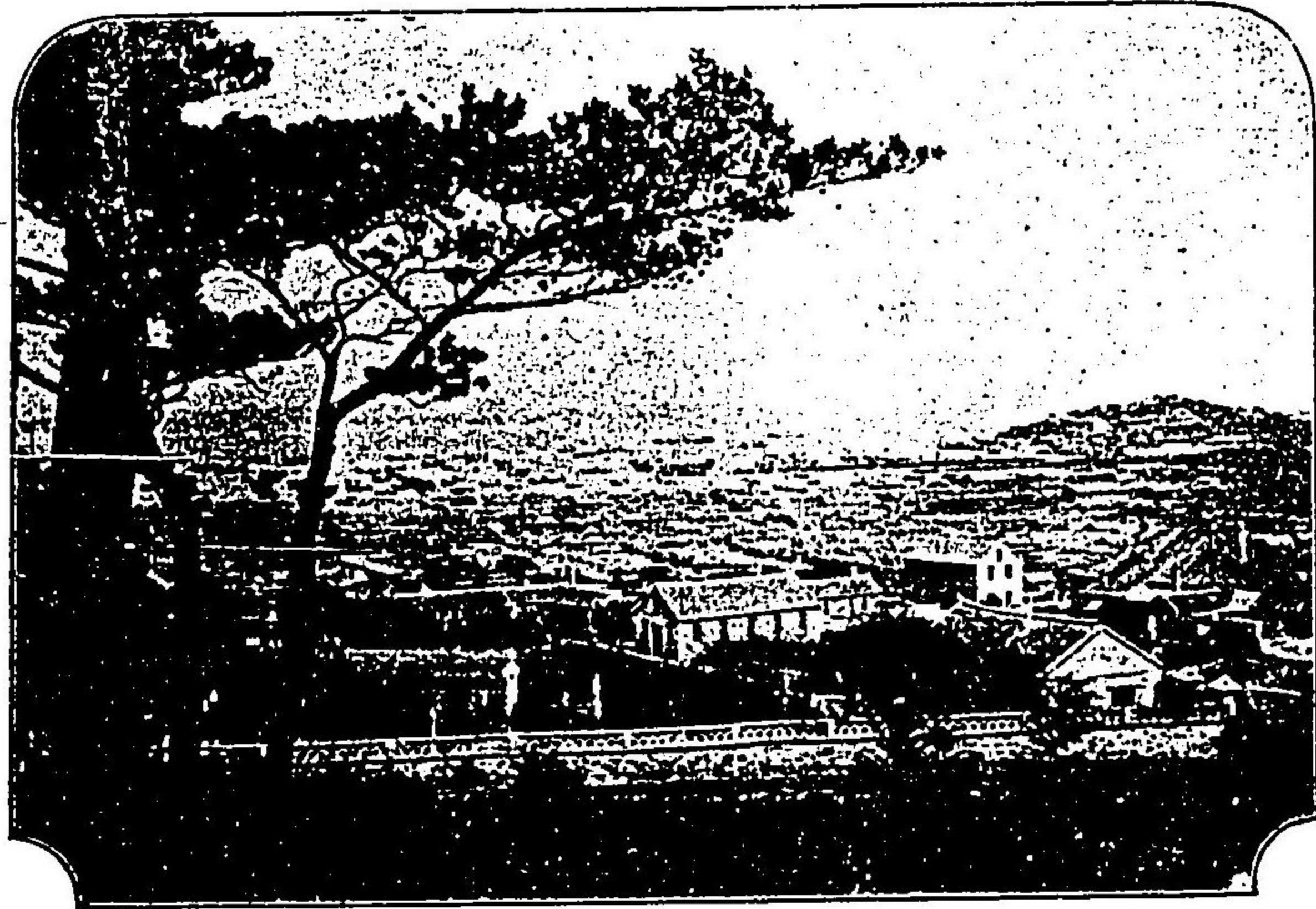
萬壽山の
佛香閣



昆明湖畔の廻廊



清國芝罘港
全景

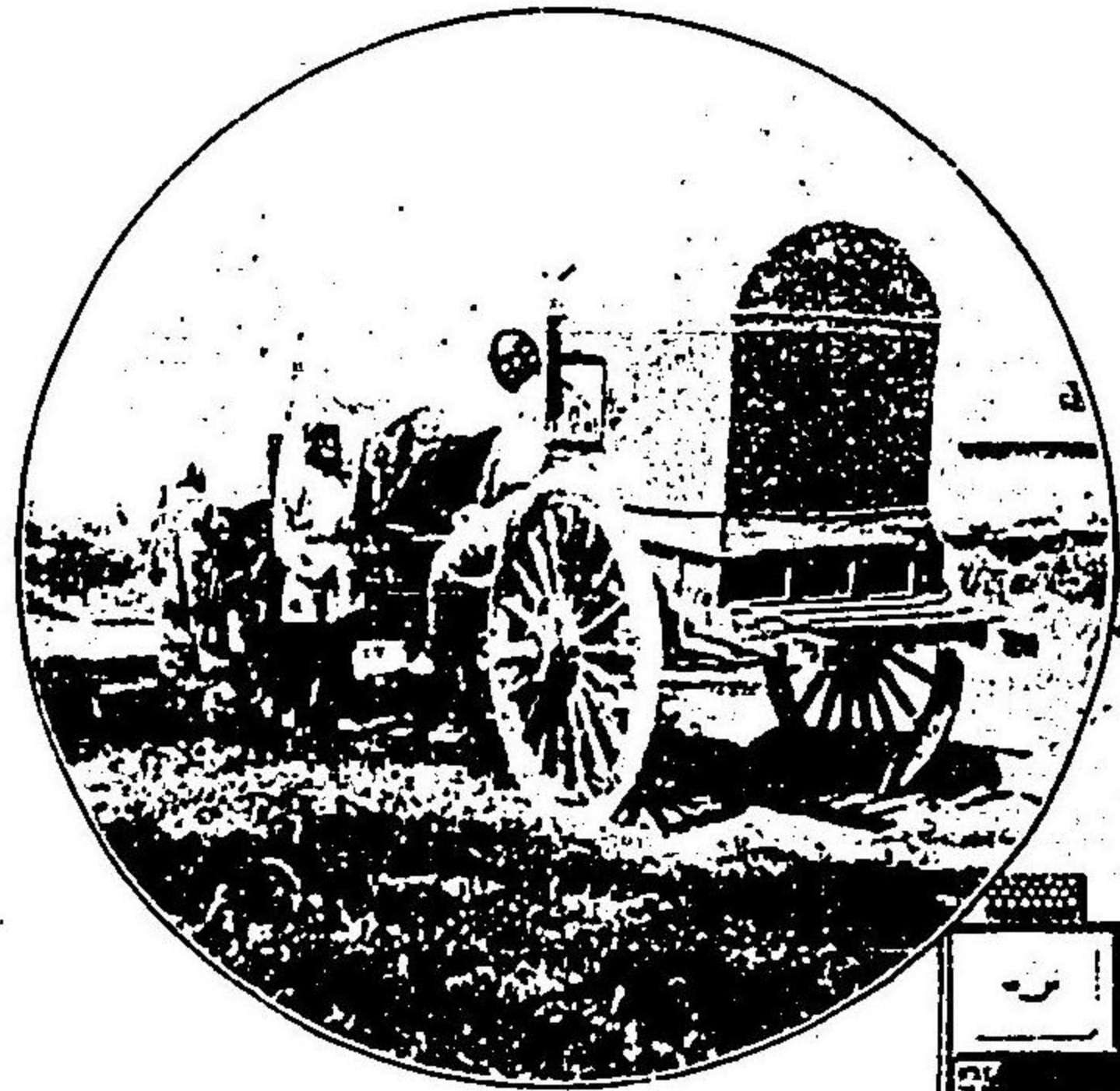


烟 臺



北清風俗

幌馬車



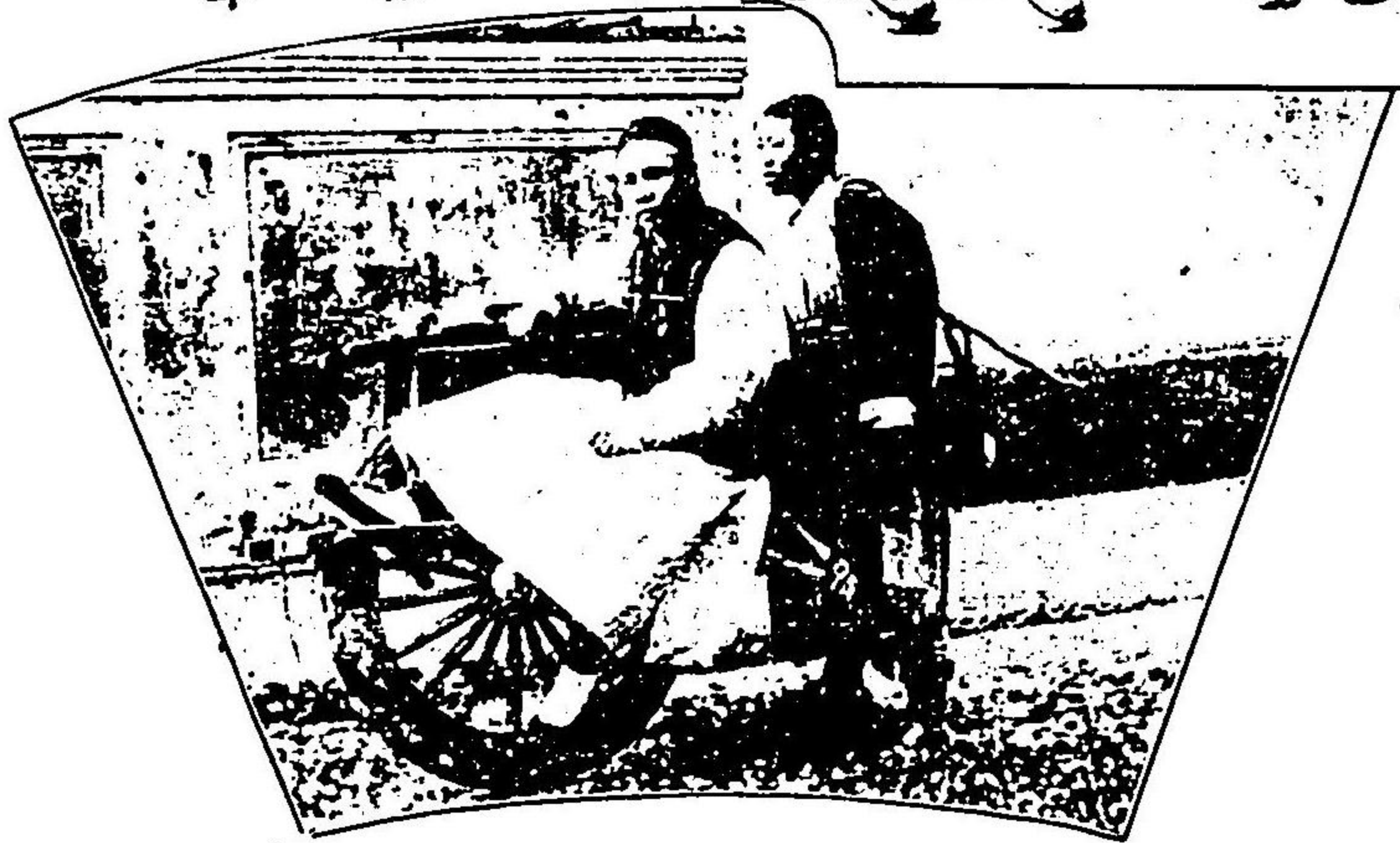
(通北州京間所見)

阿片喫飲

(芝罘所見)

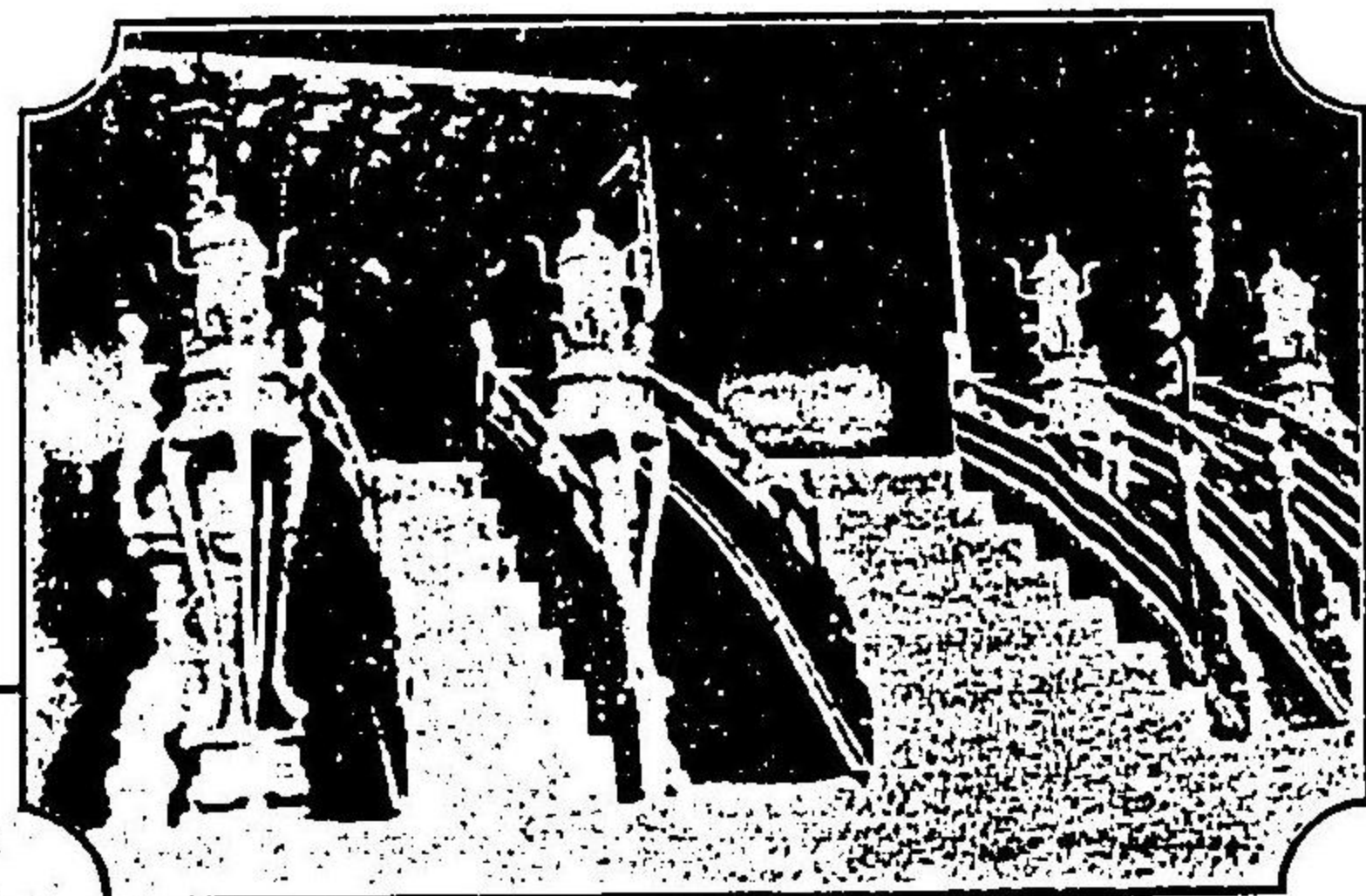


一輪車



(天津所見)

城京國韓



昌德宮



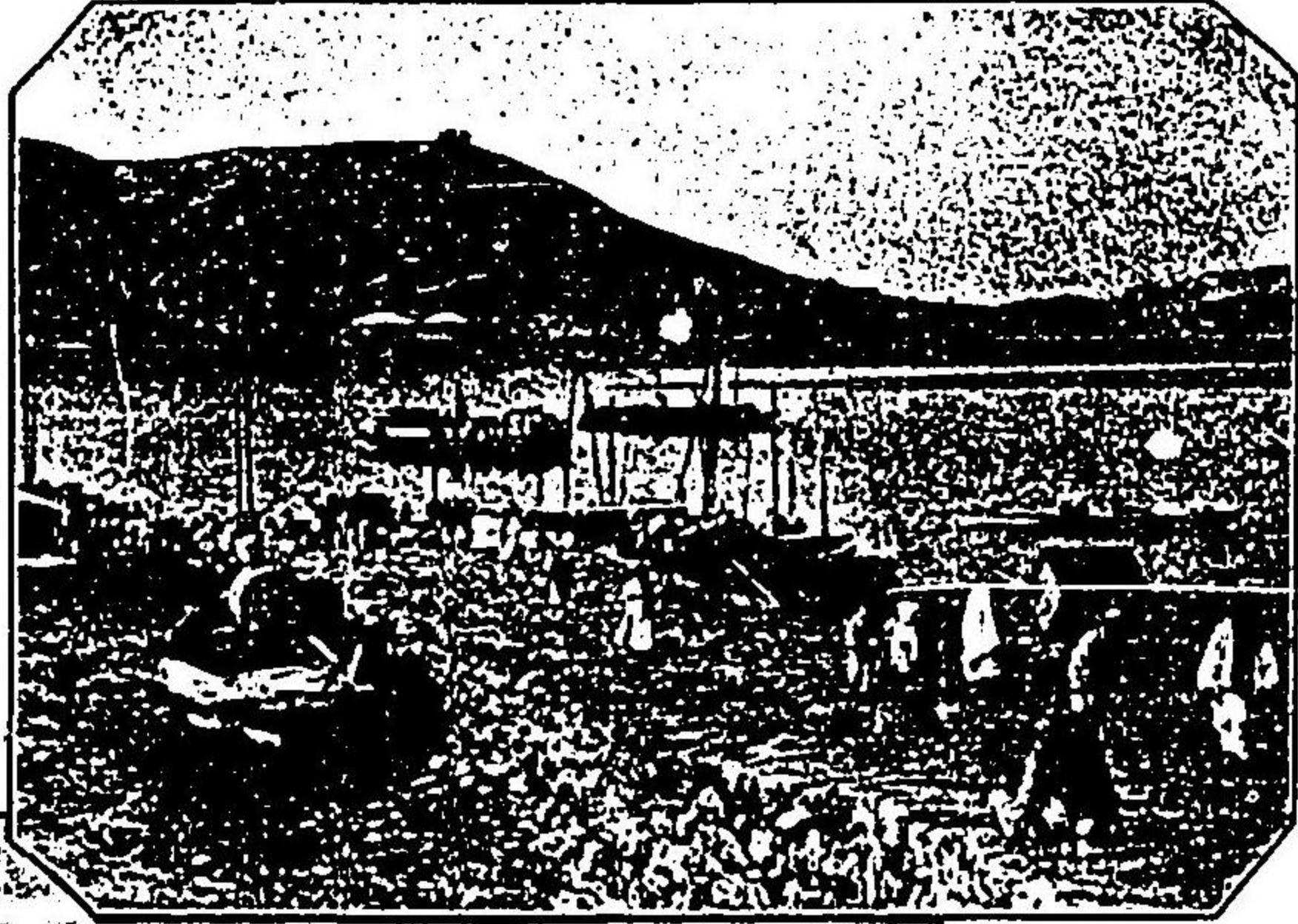
昌德宮の中陛下下玉座

日本公使館



港川仁國韓

波止場より
月尾島を望む



京仁鐵道停車場

乾潮時の仁川港



俗 風 國 韓

良家の夫人の外出風俗

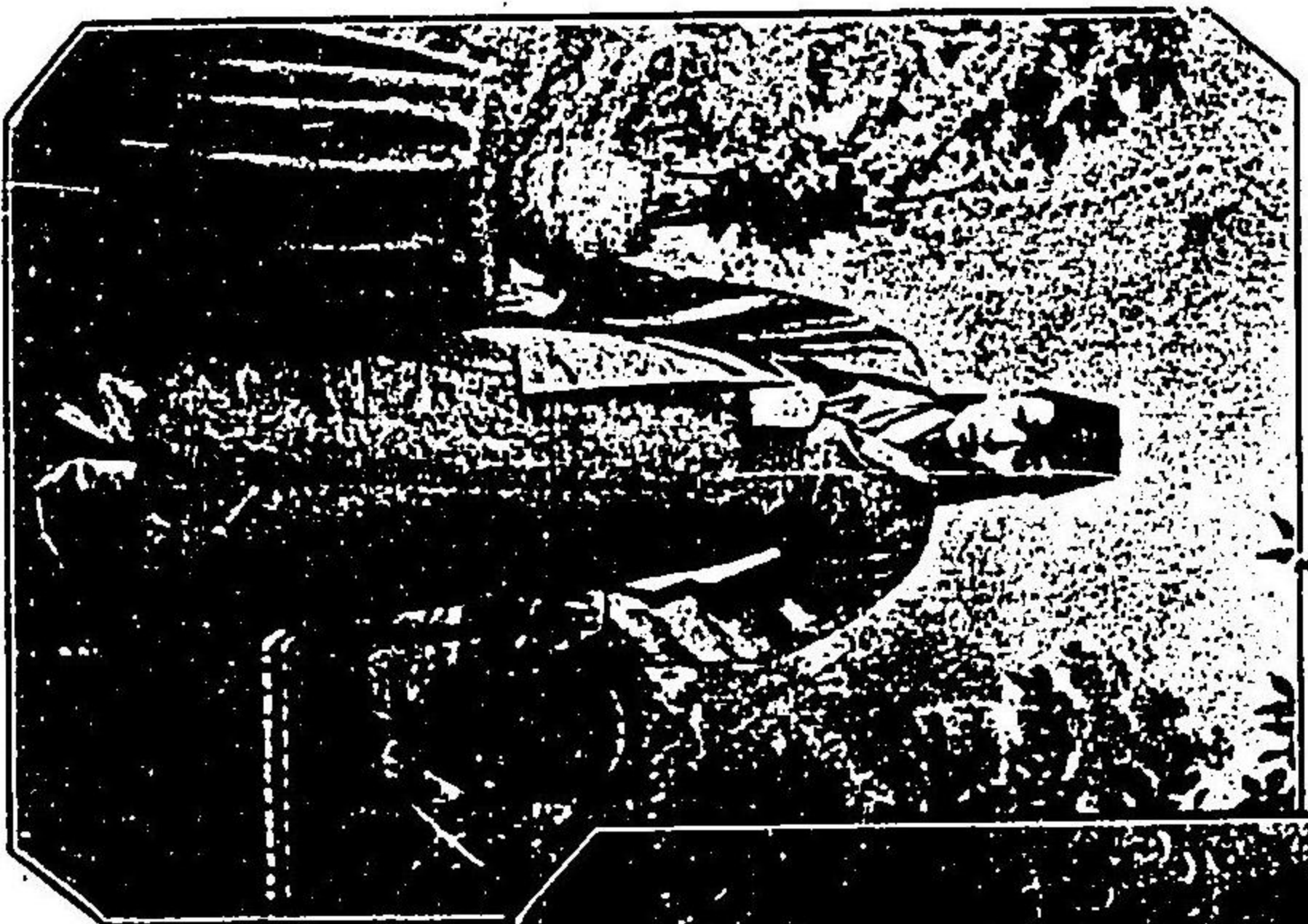


大人 小兒

家 居 飲 食



京 城 官 妓



通 州 歌 妓



天 津 歌 妓



凡 例

凡

一本書は著者が親しく北清戦亂地を跋渉し、戦況、地形、風土、習俗及び各國軍隊の行動等、見聞するに随ひ筆録し、時々、本國へ通信したるものを集めたるなり。元と兵馬倥傯の間に成り、文辭に雅馴を缺くも、漫に潤飾を加へざるは、當時の真相を失はんことを恐るればなり。

一各交戦地の題下には、戦鬪當時の公報を附記せり。是れ戦地の形勢戦後の光景を知るとし、戦争の顛末をも知るに使せんと欲すればなり。

例

一著者は北清戦亂地を跋渉するの歸路、清國芝罘と韓國仁川京城の間にも數日を費やし、かば、兩地に於て見聞する所をも附記せり。また北清戦亂の影響を知るに足るもの多ければなり。

(1)

一著者の此行衆議院議員田口卯吉、陸軍大佐宇佐川一正、同税所篤文、陸軍二等監督辻村補造の諸氏と行を同くし、諸氏に頼て觀察の利便を

得ること甚だ多かりき。往復僅に五旬の短時日間、比較的多くの觀察を了したるは一に諸氏の賜ものなり。特に記して謝悃の意を明かにす。

一卷尾に附記する北清戦地々誌は、著者が各新聞雑誌等に戦地の地理を説くの精しからざるを憾み、百方材料を搜索して編述したるもの、中に山海關、保定府等は、著者の脚未だ其地に到らざる所なるも、精確なる資料に據りたれば、自ら大誤なきを信ず。以て戦地の地勢を知るの一助たるを得ば幸甚なり。

著 者 識

北清觀戰記目次

(1)	目	次
	發端	一
	東京發程	二
	別役留守師團長を訪ふ	四
	外國患者慰問	七
	字品解纒	八
	馬關の碇泊	一〇
	長直路の避難	一二
	立花少佐愛馬の負傷	一三
	日本軍馬の缺點	一四
	日本漁船の大膽	一五
	補助輸卒の効用	一六

威海衛の遠望……………一七

太沽の艦船……………一八

太沽の砲臺……………一八

西沽の市街……………二一

白河々中の夜景……………二三

日米兵の親睦……………二四

西沽に於る各國の勢力……………二五

露國管理の鐵道……………二六

天津市街の慘狀……………二八

白河の御用船……………三三

北倉の守備兵……………三六

白河沿岸の慘狀……………三八

楊村の景况……………三九

白河の船中生活……………四三

戦後の通州……………四六

士民の保護願……………五〇

士民の歸順……………五一

露軍の亂暴(其一)……………五三

同 (其二)……………五四

通州北京間の道路……………五六

戦後の朝陽門……………五九

戦後の北京城……………六三

第五師團司令部……………六六

北京皇城縦覽記……………六八

万壽山離宮縦覽記……………八一

肅親王府の新戦場……………九二

師團長及參謀副官撮影……………九七

軍事警務衙門……………九八

日本軍の民政……………一〇〇

東四牌樓街の熱鬧……………一〇二

琉璃廠の書舖骨蒸店……………一〇五

陣中の娼妓……………一〇六

燒毀の正陽門……………一〇九

北京通州間の日本道路……………一一一

野戰電信の困難……………一一三

露西亞兵の掠奪……………一一五

再び白河の船中生活……………一二六

戦後の天津紫竹林……………一二七

日本居留地……………一二八

戦後の天津城……………一二〇

都統衙門の民政……………一二四

東西八強國の連合軍……………一二六

佛伊兩國軍の亂暴……………一二九

北門外の酒樓と藝妓……………一三一

天津停車場の戦場……………一三五

太沽解纜……………一三六

芝罘港の地勢……………一三八

芝罘の市街……………一三九

芝罘の物産……………一四一

芝罘の風俗……………一四四

藝妓と演劇……………一四五

仁川と京城……………一四七

附 録

北清戰地々誌

韓國の三王宮……………一五三

韓國人の風俗……………一六〇

韓國の婦人……………一六二

韓國の遺利……………一六五

歸朝……………一八九

戰地概説……………一九一

太沽及塘沽……………二〇〇

天津城及同居留地……………二〇三

天津北京間の通路……………二二二

白河……………二二三

北倉……………二二三

楊村……………二二八

河西務……………二二九

馬頭張家灣……………二三一

通州……………二三二

北京城……………二三六

天津保定府間……………二三六

保定府……………二三八

保定府より北京間……………二三九

天津北京間の瀛車……………二四二

北塘及蘆台……………二四五

塘沽山海關間の鐵道……………二四八

山海關……………二四九

西安の新都府……………

目次終

北清觀戰記

坪谷善四郎著

發端

北清の野に起りたる義和團の騒亂は、一轉して清國政府自ら世界列強國を敵として戦を開き、日英露米獨佛埃伊八國の連合軍は、先づ太沽の砲臺を陥れ、進んで天津の居留民を救ひ、終に近世稀有の激戦を演じて天津城を撃破し、更に破竹の勢ひを以て北倉楊村の敵を掃蕩し、河西務通州向ふ所前なく、金城湯池の北京城も、三晝夜の激戦を以て守を失ひ、清帝西方に蒙塵して此に戦争の一段落を着く。其間北京に於る各國公使館の二ヶ月に亘る籠城中の大苦戦、若くは滿洲の野に於る新設鐵道の大破壊、偕は北清各地到る所に於る連合軍隊の蹂躪に對する日本軍隊の勇武、節制博愛の行動は、帝國の威望を宇内の表に宣揚して、軍事

上に於る位地は優に列強の上に一頭地を抽んずるを得たりき。然れども是れ僅に戰鬪の行動に於て一段落を告げしに止まり、爾後の外交談判は更に如何の波瀾を湧起するを知る能はず。而して軍事上の名譽は彼れの如く赫々たる帝國も、外交上の手腕果して能く之に伴ひ、北清戰爭の主力たりし功勞に酬ゆるを得るや否、是れ未知の大問題に屬す。實に北清の講和談判は、極東の天に漲りたる戰雲をして、更に世界に瀰蔓せしむるか、將九雨降て土壌始めて固定する俚諺の如く、清風明月の平和を助長するか、風淅冽、雲慘愴、前途の天候未だ容易に測知するを得ず。空論は事に益なし、親しく戰地に臨みて實況を視察し、以て現下の問題を解決する資料に供するに如かず。此に於て終に北清戰地巡察の行を企つ。

東京發程

單身孤劍戰地に向て發す、或は万一の危険あるを憂ひしに、恰も好し衆

議院議員田口卯吉君また戰地巡察に意ありと聞き、訪ふて同行を約し、九月十六日の夕、新橋を發す。汽車中偶然に宇佐川陸軍大佐(一正)稅所砲兵大佐(篤文)辻村陸軍二等監督(楠造)の三氏各官命を以て北清の戰地に赴かるゝに邂逅し、新橋より廣島に至るまで、一晝夜間各種の談を交へ、十七日の夜は廣島に着し、また同じ旅館に投宿す。是より先田口君と余とは日本赤十字社病院船博愛丸の北清に赴くを待ち便乗せんことを請ふて允許を得たりしも、博愛丸の出發は尙ほ數日の後に在りて、宇佐川大佐等の一行は翌十八日御用船仁川丸に乗じ、直ちに宇品を出發せらると聞き、終に請ふて仁川丸に便乗するを得たり。而して同船には別に今回列國聯合軍司令官として赴任する獨逸のワールゼル元帥の參謀官立花陸軍少佐(小一郎)と、曩きに砲兵第十六聯隊の一個大隊を率ゐて出征し、北倉の戰に負傷して一旦廣島豫備病院まで歸朝し、暫らく療養したりし山川砲兵少佐(丈三郎)の平癒して

再び任に北清に赴かるゝもの等皆な乗り込むこととなりたれば船内は恰かも帝國軍の參謀會議の觀あらんとす之に便乘を許されたるは、余等の爲には絶大の愉快を加へたり斯くて船は十八日午後二時宇品解纜と定まりぬ。

別役留守師團長を訪ふ

船の宇品を發する前、半日の閑あり故に其間留守第五師團長別役陸軍少將(成義)を第五師團司令部に訪ふ。當時師團長の談により現に廣島豫備病院中に收容せる外國軍負傷者の治療に關して聞く所頗る耳に新たなる者多し。之を聞く今回聯合軍中傷病者の治療を我國に托したるは、佛蘭西及び埃地利の二國にて、其中埃人は僅に二人なるも、佛人は既に百廿名の多きに上り、其中には士官あり、兵卒あり、殊に清國公使館附武官ツイタール少佐の如きは、夫人と娘と附添ひ來りて看護するなど、戰中には珍らしき負傷者にて、天津の戰爭中銃丸を其胸部に受け、日本

に來りしときは内部に彈丸を留め、傷口は既に癒えたる後にて、我が軍醫は其彈丸を抜き取らんと欲するも、彼れは最初日本人の技倆を疑ひ容易に應ぜず、時に芳賀醫學博士は斷じて五分時間に抜き取るべしと保證し、かば、彼れも始めて意動き、之れに應じ、實際は僅かに四分時間にて抜き取り、疵口をも洗滌して手術を終りたれば、彼れは頗る満足し、爾後口を極めて芳賀博士の技術を賞讃し、具さに其情を本國大統領に報告し、又凡そ同國軍隊中の傷病者は盡く日本に委託し、夫人等と共に十二分の満足を以て平癒の後に天津に歸りたり。而して同少佐の入院中、廣島市民の慰問したるに對し、殊に喜びて名譽と爲し、政府ならば兎も角も、一面識なき國民が、外國人の爲めに、此の好意を表せらるゝは最も感謝に堪へずとて、流石に共和國人丈けに殊に人民を重んじ、其の慰問状は一々本國大統領へ郵送したりと云ふ。

又聞く佛國人の始めて廣島豫備病院に入りしとき、未だ我が日本赤十

宇社救護班の準備整頓せずして、専ら陸軍の看護者にて看護するや、言語の通ぜざる爲めに困難を感ずること多かりしが、頓がて赤十字社看護婦の各一様の制服を着けて到着し、一定の規律の下に看護するや、患者は皆な頗る喜び、其後は一言の苦情も言はず、日本の豫備病院は斯くまで規律正しく整頓せるかと、意想外として感ぜ、爲めに治療も一層効を奏し易かりしとぞ。

此に憫むべきは、屬國の兵なり、佛國の負傷兵中に一の安南土人なる、黒人あり、我が豫備病院にては何れも佛國の兵士なる故、他の兵士と同様に待遇するに、彼の士官は之を制止し、彼れは左様に優待するに及ばずと云ふて之を拒み、其待遇は全く牛馬と同一にて氏名さへ無く、番號を附けて之を呼ぶなり。其兵はまた言語全く不通にて、佛語も解せず、支那語も解せざる故、到着の當初は取扱に最も困難を感ぜし、も慣るゝに従ひ手眞似にて應對し、僅かに意思を通ずるに至れり。幸ひに負傷者なる

故、患部を見たるのみにて治療を施すを得るも、若し病者ならんには容體すら毫も聞に由なく、甚しく困難を感ぜたるならんといふ。以上は皆な別役留守師團長に就て聞く所なり。

外國患者慰問

田口君と余とは更に豫備病院に赴き、松本院長の案内により、患者の病室を一巡す。外國人の病室は、通譯官より一々余等の慰問の事を傳ふ。時に患者は一同舉手して敬禮し、毎室一人の先輩は、御慰問に接して辱く感謝す云々と挨拶す。而して佛國兵には同國海軍大尉レー、モン、マルチニ、氏監督の爲めに隨行して案内す。此人能く日本語を話し、日本語を讀み、余に向ひ、日本語にて、私は博文館の本を澤山買ふて讀んで居ますと語れるには一驚を喫したり。佛國患者百二十人の中、七十餘人は既に平癒して歸り、今殘留するは四十人許にて、其内十數人はまた近日中に歸るを得るといふ。其中に一の剛勇なる兵あり、天津停車場の戦に砲彈

に觸れしとて右手と左脚とを切斷し了りしも元氣甚だ壯んに平氣にて傷口を指さし『天津々々』と語り居れり。又彼の安南の黒奴も未だ幕上に在り頻りに叩頭して慰問を謝するものゝ如くなりし。病室一巡の後、余等は宇品出帆の時期切迫したれば辭して歸りぬ。

(以上第一信九月十八日の夜御用船仁川丸中に記す)

宇品解纜

余等の便乗を許されたる御用船仁川丸は、十八日午後二時宇品を出帆する豫定なり。故に余等は豫備病院の訪問を半ばにして辭し、旅宿に歸りて午餐を喫し、直に車を驅て宇品に向つて發す。而して當時廣島宇品間に於て一事必ず記せざる可らざる事あり、之を水害の状況と爲す。前日風浪の爲に海岸の堤を破り、海潮は恰も海嘯の如く、宇品町を襲ひ、水は家々の軒を没し、田となく畑となく皆水底に入り、家財什具は概ね流失し、死傷また少なからず、僅に生命を全ふせる土民は、皆な堤上の路傍

に假小屋を造りて以て風露を凌ぐのみ。此の風浪の變は廣島宇品間の通路を遮斷したりしかば、宇品より出發する第五師團の出陣に至大の妨害を被むりしことまた察すべし。幸ひに江木廣島縣知事(千之)は、此の焦眉の急に接し、自ら災地に臨み、日夜修繕の工事を督し、余等の通行ししときは、堤の破綻は略ぼ之を塞ぎたる後なりき。斯くして余等は宇品に着し、運輸通信支部長大久保工兵中佐(德明)の斡旋の下に、また仁川丸の船室中に入るを得たり。船室總て四即ち第一室は宇佐川稅所兩大佐、第二室は辻村二等監督、立花少佐、第三室は山川少佐(丈三郎)長谷川陸軍教授(祿三郎)第四室は田口君と余となり。其他同船者には、赤十字社救護醫員石川齊、馬島清治、阪井迪三郎、日本郵船會社太活詰員内田貴一、各國聯合軍用達商平野新八郎等の諸氏ありて、別に一室に入りぬ。仁川丸の纜を宇品港頭に解きしは午後四時にして、此日は天氣清明、風和ぎ浪穏かに、熱ならず冷ならず、氣候最も體に適するとき、風景畫の如き内海を

航行し、晚餐の後には皆な甲板の上に出で、微醺を帯びたる面を海風に拂はせつゝ談ず、壯快言ふ可らず。深更に及びて各船室に入り、一睡覺め來れば、船は既に長州壇の浦の邊に在り。

馬關の碇泊

宇佐川大佐は長人にして、往時長藩が文久年間始めて攘夷を實行し、ときより軍に従ひ、外艦の砲撃より、各國聯合軍の馬關砲撃にも、此邊を守備して應戦したりといふ。一々陸上を指示して當時の戦況を語らる。惟ふに當時長藩の外艦砲撃は、恰かも今回清國義和團の徒が外人掃蕩の擧の如く、列國聯合軍の馬關砲撃は、猶ほ今回の聯合軍の天津北京攻撃と其跡を同くし、當時長藩の一敗して和を請ひしも、また清國現時の事情に酷似す。而して長人の元氣は其時より益ます振ひ、終に幕府の征討軍を引受けて散々に惱まし、進んで對岸の門司を取り、隣郷の濱田をも陥いるゝに至りしも、清國人は今後能く當時の長人が爲しゝ所を爲

し得るや否や、若し此の事變に發奮し、清國人皆な舊來の迷夢を擣破せば禍を轉して幸と爲すこと難からざるべきも、之を清國人に望むは蓋し空想に過ぎざるべし。仁川丸は石炭を積む爲に、門司に碇泊すること約一日なりと云ふ、故に余等は朝食後馬關に上陸して春帆樓に入り、裝を解き浴を取り、終日此に憩ふ。樓は往年李鴻章が二十七八年戦役の終に臨み、自ら來りて媾和條約を議せし所なり。未だ今回の媾和條約の何れの地に於て締結せらるゝを知らざるも、談判の局に當る者は蓋し李鴻章の外無らん。大國存亡の權を一身に荷ふは光榮の極ながら、毎次敗餘の媾和全權たること、李爺の境遇もまた憫むべきなり。余は往年李爺來朝の際、來て此地に在り、往事を追憶して感慨殊に深し。午後春帆樓の背後なる安德帝の廟を拜し、平家一門の墓を吊ひ、船に歸りしは午後五時頃なりしに、偶たま船長來り報じて曰く、氣象臺警報を傳へ、九州近海を警戒す、故に今夕の出帆を延期すと。嗚呼斯くと知らば、今宵馬關に一

泊するも一興なりしならんに惜きとしてけりと悔るもまた詮なし。日暮れてまた甲板に出で、左右の兩岸を望めば、身は關門海峡の中心に在りて往來の船舶織るが如く、正に是れ山陽外史が千帆忽去千帆來るの光景を顧眄し、門司市街の電燈は耀いて白晝の如く、馬關海岸樓その燈影は、連りて銀河に似たり。絃歌の聲は遙かに波を越へて兩岸より傳はり、双眼鏡を撮て望めば、釵影の簾に横はるをも見るべし。熱鬧繁盛の狀、山陽外史を九泉に呼起して更に幾多の竹枝を咏せしむる能はざるを恨事と爲す。

長直路の避難

翌二十日の拂曉、始めて錨を抜て日本の内海を辭す。時に海峡の夜航を危ぶみ、前夜來近海に錨泊したる内外の商船は、舳艫相啣んで入り來るもの七八隻を見る。余等の船は岸柳島を右に、小倉町を左に錨んで進み、六連島の間を過ぎ、玄海灘に出れば、夜來の風は僅に収まるも、波浪未だ

高く船の動搖すること搖籃の中に在るが如し。爲に午餐の食卓には既に列する者稀なりき。頃がて對州近海に及びて、浪は微しく静まりしも、進んで朝鮮沖に出る頃には、再び風激し浪暴れて、海水は斷へず甲板の上を洗ひ、掀翻簸蕩して殆ど進む可らず。此に於て船の進路を轉じ、此夜朝鮮國全羅道内長直路の列島内に碇泊す。長直路は日清戰役の初我が海軍の根據地と爲し、四面島を繞らし、恰かも湖水の如し。陸岸の環繞せざる爲に貿易港には適せざるも、軍艦の一時碇泊するには絶好の地なるが如し。灣の入り口の島上には、當時海軍根據地たりし日に我軍の据附けたる砲臺の址あり。灣内には大阪商船會社の漁船名取川丸、紀陽丸外、四隻來り泊して共に難を避けつゝあり。

立花少佐愛馬の負傷

同船の立花少佐は、今回クローデルゼー元帥の參謀として出征する爲に、愛馬二頭を伴ふ。一は南父と名く、北海道新冠産にて本年七歳、元と長岡

大佐(外史)の畜ふ所、大佐の先頃洋行するに臨み、少佐に譲りしもの、一は笠置と名く、一ノ戸産にて、本年五歳なり。共に甲板上の厩中に繋ぎしに、風浪激して海水の脚を没すること數しばなるや、馬は駭いて騒ぐこと甚だしく、終には頭面四脚の區別なく數ヶ所の傷を負ひ、鮮血淋漓として甲板を染め、終りには疲れて動く能はず。然れども之を救ふに由無く、別當及兵士十數人之を制するも皆な其効無く、殊に新冠は到底生くべしとも見へず、少佐も今はと斷念したりしが、二十一日風和ぐに及びて、馬は漸く元氣を恢復し、爾來食慾も大に進みて、終に幸ひに事無きを得たり。

日本軍馬の缺點

立花少佐の愛馬の負傷と共に、今回北清に於ける日本軍馬の成績に就きて聞く所によれば、外國軍の馬に比して數籌を輸すといふ。其故は、外國馬は幼時より陰囊を除却する故、性質柔順にして牝馬の間に置くも

毫も騒ぐこと無く、船舶及鐵道の輸送も甚だ容易にて、地方より徵發する牝馬に混用して毫も困む所無きも、日本軍隊の馬は盡とく牡馬のみにて、且つ去勢を行はざる故、牝馬を見れば狂騒するのみならず、平時も極めて慄悍にして、運輸に困難なれば、船舶にては外國軍馬百頭を運ぶべき所にも、日本軍馬は五十頭を運ぶ能はざるが如き弊あり。大沽天津間の鐵道にても、日本軍馬の輸送は實際運搬に困難なる爲に甚だしく嫌はれ、實に北清に於ける我軍の精銳は、列國に冠たりしも、特に軍馬のみは列國に對して遜色多かりしといふ。蓋し將來馬制改良の上に好經驗を得しなるべし。

日本漁夫の大膽

仁川丸の長直路に泊するや、二十日の夜より二十二日の朝に及び、二十一日は雨中終日灣内に在り、而して灣内所々に浮ぶ所の漁舟を見れば、盡く日本人にて、朝鮮船は一隻も無し。之に加ふるに日本汽船七隻あり、

宛然日本内海の如く、身の外國に在るを覺へず、晝間漁舟數隻來りて捕魚を賣る、鯛最も多し、潑刺として舟中に躍る、價を聞けば一貫目六十錢なり、事務長は盡く買收す、漁夫等の郷里を聞けば、何れも愛媛縣人にて、本年二月本國を出て、今年十二月まで此邊に漁業を營み、捕魚の一部は朝鮮人に賣りて米鹽に換へ、他の大部分は親船の來るを待ち、鹽藏して佐賀ノ關へ送るといふ、此等漁舟の爲に一日の無聊を慰め、且つ數しは新鮮なる魚肉に饜くを得たり。

補助輸卒の効用

今回の我が軍隊は、前年の戰役に比して軍夫を使用すること甚だ少なきは、一は白河の水運を利用するに由るも、一には補助輸卒を使用する爲なり、此の輸卒は輜重輸卒を徵集するものにて、また義務服役の一種なれば、一定の規律の下に働らき、統一甚だ容易にて、其の必要ある間丈に徵集して兵士の古服等を給し、必要止めば歸郷せしむる故、費用も甚

だ少なきを得るといふ、去れば軍夫を使用せば、彼等は往々亂暴を働らき、爲に我が紀律正しき軍隊の面目をも傷けたること多かりしならんに、其事無きを得たるは、主として補助輸卒の効といふ。

(以上第二信九月二十三日清國山東角沖航行御川船仁川丸中に記す)

威海衛の遠望

御用船仁川丸は、二十二日長直路を發し、終日朝鮮沖を航行し、濟州島を左舷に望みて過ぎ、二十三日快晴午前十時半微かに清國山東岬角を望みしが、午後には曾て二十七八年の役に、我が第一軍の始めて上陸したりと聞く所の榮城灣の前を過ぎ、近く山上の燈臺を望み見つゝ、船は漸く百尺崖所、摩天嶺等の舊戰場の傍を過ぎ、日島より劉公島に沿ふて北進し、威海衛北口の海門を望めば、二本檣四本烟突の大軍艦を首として、數多の英國軍艦衛内に集合するを指顧の間に見る、黄昏の頃再び陸地に遠さかり、四面唯だ海水の天に接するを見るのみ。

太沽の艦船

二十四日また快晴朝來渤海を航行し、此日は愈々太沽に上陸すと聞き
 ホーイに命じて湯を沸かししめ、入浴して装を改むれば、午後二時遙かに
 前方に煤烟の颯るを認む。近づくに随つて帆檣林立し、更に近けば大艦
 小艇海面を掩ふて群がり、其數五十餘隻、軍艦には白きあり、黒きあり、灰
 色なるあり、商船また各國の國旗を翻へし、壯觀言ふ可らず。恰かも軍艦
 の競進會の如し。日本の軍艦は、淺間、高砂、秋津洲の三隻のみにて、別に小
 蒸汽の御用船數隻あり、最も多きは佛國の軍艦と商船にて、船中には多
 く新九に着したる兵士を搭載し、兵は皆赤帽を冠し、赤袴を穿ち、藍色雲
 細地の長きマントルを着て、帽は頗る日本の憲兵に似たり。此等艦船の
 前を過ぎ、太沽砲臺の僅かに見ゆる所に投錨す。(口繪寫真參照)

太沽の砲臺

仁川丸の投錨と同時に、西沽の運輸通信支部よりは御用船千草川丸出

で迎へ、直ちに乗り移りて始めて陸上の消息を開けば、獨逸元帥ワルデ
 ルゼーは今朝太沽に入港し、各國軍艦より祝砲を放ちて敬禮を表せし
 と、露西亞の軍隊は少許の獨逸兵と共に十九日北塘を攻めて之れを取
 り、續いて二十一日蘆臺をも取りしこと、之れを攻むるには日本軍にも
 共同を交渉し來りしも、我軍は之れに應ぜざりしこと等を船中にて聞
 き、漸く進んで白河の河口に到り、先づ露西亞軍の占領する砲臺を左方
 に望み、次に右方に日本國旗を掲ぐる砲臺に近づき、臺下に到て稅所大
 佐、辻村監督は船を下り、砲臺内の事情を視る爲めに上陸す。其他は殘留
 して更らに船を進むれば、河中には我が鳥海愛宕の二艦碇泊し、其間各
 國用船の往來する者縱横旁午、既にして右方に英國旗を掲ぐる砲臺の
 下に到る。是れ開戦の初めに聯合軍の攻撃し、日本海軍陸戦隊が先登第
 一の功を奏したる所、當時攻撃の進路は、河に沿ひ、服部海軍中佐戦死の
 地點、白石海軍大尉登躋の關門、皆な河に面するが故に、甲板の上より望

み見つゝ、西沽運輸通信支部員等の宇佐川大佐に説明するに由て詳かに知るを得たり。西沽は太沽の一部にて河の上流右岸に在り。

(參考) 六月十七日以來十九日まで太沽を發して芝罘に來り發

電したる諸艦艇の報告に曰く

清國政府は塘沽停車場破壊の目的を以て兵を送り且つ白河の口に水雷を沈設し北京太沽間の交通を遮斷せんとしたるより同政府を義和團匪徒に關係ありと認め列國先任將校合議の上太沽砲臺より清兵の撤退を求め十六日夜十二時を限りとし其の決行を直隸總督に申込みたりしに同時刻に及び總督の之に應せさりし爲に列國聯合艦隊は太沽砲臺と各砲火を開き戰鬪は茲に開始し約千二百名の聯合軍陸戰隊(内我兵三百六十名若くは三百七十名)は鐵道停車場に集合し背面より砲臺を攻撃したり日本兵は第一に北方に於ける内面の最も優勢なる砲臺を占領し日本國旗を掲揚したり日本軍にて

は服部海軍中佐及水兵九名戦死し一名重傷其他輕傷を負ひたり露國兵は損害最も重大なるものゝ如く七十名の死傷あり。

西沽の市街

軍艦碇泊地より日本運輸通信支部所在地の西沽までは約八哩といふ、着したるは午後六時なり而して日は尙ほ甚だ高し、怪しんで質せば、宇品と西沽とは時間に一時八分の差違あり、故に此地の六時は宇品の未だ五時に達せざるなりとぞ。因て時計の指針を改ため、運輸通信支部の前に到りて投錨す。而して明朝瀋車にて天津に赴かんとするも、陸上には宿舍の不便を慮かり船中に一泊することゝ爲し、唯だ陸上の景況を視る爲めに、運輸通信部の小蒸氣に便乗して上陸す。其前に山川少佐及外敷氏は明朝の上陸を期し、仁川丸に残り、日本赤十字社の救護醫員及日本郵船會社の内田氏は、太沽に於て其の任務を執る爲めに上陸したれば、宇品以來の同乗者數人を減じ、田口君及長谷川教授と余との三人

は、宇佐川大佐、立花少佐に隨行して先づ通信支部に詣り、刺を通じたるも、大佐等には緊要の用件を談せらるゝものゝ如くなれば、余等三人は別れて、足元暗き所を搜りつゝ、更に日本赤十字社出張所を訪ふ。西沽市街の家屋は泥を以て塗り固め、室狭くして軒低く穴藏に似たる矮屋のみ多きが、中に運輸通信支部と此の赤十字社出張所とは、何れも廣く四方に建て繞らして、中間には瓦を敷き詰め、壁も粗末ながら煉瓦を疊んで上を塗りたるものゝ如く、夜間にて明瞭を缺けども、此地方には屈指の大家なるが如し、婦人は絶て見ざるも、男子の士人は三々五々、此所彼所に群がり、暗中にも尙ほ荷を運び車を曳く者多し。赤十字社出張所にては、内地まで患者を護送したる醫員の歸り來りし爲めに、急に用務の忙はしきが如くなれば、辭して市中を一巡し、所々に日本守備兵の篝火を焚いて闇を照らすを便りとし、一旦通信支部に立寄り、小蒸汽船に送られて千艸川丸に歸る。

白河々中の夜景

白河の河中に碇泊したる千艸川丸の甲板上に床几を据え、麥酒の盃を手にして眺むれば、各國の商船水雷艇等は、闇中を縫ふて斷へず往來し、陸上には各國兵營中の燈光星の如くに輝やき、遙かに海上を望めば、軍艦に點する電燈は白晝の如く、其中の露國軍艦と塘沽停軍場の露軍及砲臺中の露軍との間には、斷へず回光通信を以て信號し、其狀宛かも慧星の如く、三方より交叉して尾を余輩の頭上に曳く、時に天は隈なく霧れて星斗爛干空に滿ち、水陸の燈光と相待て四顧烟火を望むが如く、渤海より送り來る海風は面を吹て冷を覺へず、爽快匹ひ無し。當初は明朝九時塘沽發の汽車に乗る豫定なりしも、午前六時發の汽車ありと聞き、之れに乗るに決し、此夜は結束したるまゝ、船中に睡る。税所大佐、杉村監督は深更に及びて太沽砲臺より歸る。其の談によれば、太沽の砲臺を守備する兵は、日本の外に英露米等の各國軍あり、而して之れを訪問する

ときは外國軍は時としてシヤンパンを襲し、然らざるも咖啡等を襲する由なるも、日本砲臺には残念ながら此等の設備なき故、常に茶を襲するの外無し、而して何れの砲臺にも往て見ることは喜んで之れに應ずと云ふ。之を聞て余等も隨行して一見せざりしを憾とせり。

日米兵の親睦

北清派遣軍は、今は日英米露佛獨埃伊の八ヶ國なるも、其中にて埃伊の二國は其數未だ少なく、其他の六國にて現今北京天津太沽間に在る兵數約七萬人に上る。而して其中自然に日英米と露佛獨の兩派に分れ、兵の相會ふ毎に、日英米は言語通ぜざるも手眞似にて語り、尙ほ不便なるときは地上に國旗の圖を畫きて、日英米の同盟を示す。其中英兵は多く印度兵なる故、左までならぬも、最も親しきは米國兵にて、彼等は恰も日本兵を見ること兄弟の如く、開あれば來往し、言語不通ながら共に飲食し、日本兵の囊中常に甚だ乏きを熟知し、大抵は米兵の響應にて酒を襲

し烟草を贈り、時としては日本の兵舎内に來り、日本食の饗を受けて大いに喜び、また彼れより酒若くは烟草を贈るにも、一小隊の各人に一盃づゝ又は一本づゝにても滿遍なく配りて、我の之れを受けば頗る満足し、彼方は歌へば此方は劍舞し、暇さへあれば米人の馳走にて、日米人大一座の宴會を催ほすこと多しといふ。而して他の露獨等の兵も、日本兵の每戦勇敢なる戦功を見たるものは、何れも尊敬して道路を通り違ふにも歩を譲る程なりしも、近日に至り歐羅巴の各國より、新たに到着する兵士日に加はり、彼等は何れも未だ日本兵の技倆を目撃せざることを、矮少なる日本兵を見ては尊敬の念薄く、近來はまた著しく傲慢なる態度を現すもの多くなりたりといふ。

西沽に於る各國の勢力

西沽の市街は前に説くが如く、白河の河岸に沿ふ所の粗末なる家屋のみ多く、それすら開戦の初より外國兵の爲めに荒らしに荒されて、何れ

の家も家財としては一物も存せざるのみならず、未だ過半は人の住まざる一個の荒村廢落に過ぎざるが如きも、此寒村の中にも驚くべき豪富あり、資産は六億兩を有し、其中二億は太沽に、四億は天津に有して、名を鄭某と云ひ、現今我が西沽の運輸通信支部に充つる所は即ち其家なりといふ。而して事變の當初には外國兵の亂暴と日本軍の勇武との爲に、西沽附近の人家及河上の船舶は、多く日本國旗を掲げたりと聞けども、今は露西亞の國旗なる横に白青赤の三色を染めたる旗を掲ぐる者多く、殊に露國は凡そ價値ある建築物品、及び土地まで、手當り次第に旗を立てたれば、今は露國の國旗著しく目に着く様になれりとぞ。

露國管理の鐵道

塘沽より天津間の鐵道は、各國の共同管理とは云へ、全く露西亞兵の管理に屬し、今は一日四回往復し、二十六七哩の間に三時間を費やす、極めて進行の遅き鐵道なり。余等は午前六時に停車場に到れば、前日大沽に

上陸したる佛國の兵士第四十及第十六の二聯隊一時に乗車したる爲めに雜踏甚だしかりしも、余等の一行は、上等の一室を占め、瀛車は豫期の如く六時に發す。廣軌式にて貨車客車とも十五六輛を繋ぎ、沿道は全く露兵にて守備し、車室内裝飾の鏡、水入、コップ等まで盡く殺ぎ取り、沿道の建物は皆破壊して一も完全なるは無し。途中軍糧城に停車し、天津に着したるは午前九時三十分にして、豫定よりは三十分を遅る。塘沽天津間は沿道殆んど盡く露領とも云ふべく、元來民家は甚だ稀なる上に多く焼かれ、會々存するものは、盡く破壊し、且つ稍々價値あるものは皆露國々旗を樹立し、中にも停車場に、近き東機器局は、烟突の數四十餘ありて、規模の壯大なるは日本の小石川砲兵工廠にも優らんかと思ゆるが、全く露國々旗の下に在り、天津停車場を首とし、附近の大建築は、また皆露國々旗を樹立せり。戰鬪力は左までならざりしと聞けど、占領に於ては露軍の機敏なる愕くべし。

天津市街の慘狀

天津停車場は、事變の初めより、久しく激戦の中心と爲りし所とて、建築物の總ては大砲小銃の彈痕蜂集の如く、附近の市街また盡く兵燹に罹りて、唯だ四壁のみ骨立し、清人無數の財産を烏有となしたるのみならず、我が第十一聯隊の幾多兵勇が死傷したる所、之れを思へば、腥風吹血、濺衣袂の感あり、車を下れば、無數老若の支那人夫は、車中まで入り來りて、苦力々々と稱し、荷物を運搬せんことを求め、貨物多ければ二人にて一輪車を曳き來たり、一人は挽き、一人は押す、余等の荷物は此等の支那人夫を役し、車に積み、焼跡の灰燼堆き中なる道路を過ぎ、白河に架し、俗に佛蘭西橋と稱する舟橋を渡れば、對岸なる紫竹林居留地の河岸は、一帯の楊柳にて、樹心とに彈丸を受けて完膚無く、菅海軍大尉(文三)等も此邊に戦死せしと聞く。斯る我軍苦戦の新戦場を右に見て、三井洋行に達す。天津各國民政廳委員青木砲兵中佐(宣純)兵砦監部長秋山騎兵大

佐(好古)兵砦監部長(仁田)原陸軍中佐(重行)の諸將交はるゝ、訪ひ來たり、皆共に卓を圍みて午餐を喫し、午後余等は宇佐川大佐と共に直ちに支那船を白河に織し、北京に向つて發す。税所大佐、立花少佐、長谷川教授は所用ありて天津に留まる。(口繪寫眞参照)

(參考)

七月六日天津發芝罘經由の公報に曰く

天津の外國居留地は六月十七日より二十三日迄一週間清人に包圍砲撃せられ、就中佛國居留地は一層甚だしく危害を蒙れり。總て居留地の家屋三分の一以上焼拂はれ、諸國の居留民は避難の爲め日本若くは上海へ向け天津を退去し始めたり。本邦居留民は七月四日及五日の兩日を以て本邦へ當港を出發せり。外人居留地の包圍は六月二十三日太沽より到着したる援兵の爲に其一方を解かれ、又天津太沽間の水路復舊したりと雖も、同居居留地は尙天津城及三岔口沿岸に於る水師營砲臺より絶えず砲撃を受け居れり。而して右兩所には多數

の清兵集合し居れり最も激烈の砲撃は今七月六日に在り同日は亦英佛日三國聯合軍の天津城外砲撃あり各國領事と清國地方官との公務上の交通は六月十七日以降全く斷絶せり糧食は日々乏しきを告げ遠からずして陸海軍隊より其供給を仰がざるを得ざるに至るべし。

七月九日天津發芝罘經由山下海軍中佐の報告に曰く

午前三時聯合軍集合運動を始め我陸軍兵一千三百砲六門英國兵九百砲四門露國は援兵として四百を出す我陸戰隊は須廣高砂笠置の各一小隊にして總指揮官以下百四十九名米國兵百名と共に時機を計り土壁の外柵に沿ふて機器局に近つき側面より突進するを約す我陸軍兵梁園門を出て外翼と爲り英國兵は右翼に進み附近村落の拳匪を一掃し急に競馬場に據る所の敵兵を攻撃し砲四門を奪ひ競馬場を略取し午前八時西機器局に對つて我陸戰隊先づ突入し米國

兵我陸軍兵等相繼で進入し敗兵に對して猛火を加ふ猶日英兩國の野砲を以て南門附近の民家并に城内を砲撃す機器局の建物は盡く破壊せられて屋蓋を有せず兵を入るゝ場所無きが爲に之を棄るに決し附近の家屋を燒きて其兵を引揚ぐ此日陸軍歩兵大尉武久三保三郎戰死騎兵少尉二名負傷下士卒の即死負傷若干あり。

七月十一日天津發福島陸軍少將の公報に曰く

本日午前二時より英佛日の聯合兵の守備せる停車場は砲四門及約一千の敵より逆襲を受け激戰約五時間の後第六中隊河内山中尉の勇敢なる突撃に依り之を撃退するを得たり此戰闘間歩兵殊に砲兵火の爲に倒れたるもの最も多く歩兵第十一聯隊第二大隊の將校以下死傷約八十名に達し第六中隊の如きは將校の悉皆及特務曹長も死傷す元來該地は我歩兵一中隊を以て守備せしも事急なるを以て殘餘の三中隊を盡く戰闘に加へたり又該地に在りし佛兵も増加し

四中隊の中約六十名英兵中にも多數の死傷ありと云ふ、此地聯合軍防禦の鎖鑰地にして又守備最も困難なる地なり不日聯合軍協力して此附近の敵を撃攘するに至らん。

七月十四日天津發福島陸軍少將の公報に曰く

日英米佛の連合軍は昨十三日天津城の攻撃を始め午前五時連合軍砲兵は各所より砲戦を開始し午前七時二十分海光門より天津城南門に向ひ前進せり此附近は河川及沼澤地多く適當の方面に展開すること能はず故に歩兵の大部は四列縦隊の隊形を用ひ其の戦鬪部隊を以て城門の南方二百米突の地に達す此間敵の歩砲火頗る激烈なりし爲め非常の死傷を生せり爾後城門を破壊し突進を企てたるも敵火の強盛なる爲め其目的を達せず此交戦中夜に入り各隊とも守地を固守す

今十四日午前四時頃工兵中隊は第一門扉を破壊し一兵は城壁を攀

ち内部より第二門扉を開かしめたり敵は夜間の射撃を加へたる後ち退却し午前七時全く四壁を占領せしも各所の市街戦は尙ほ未だ止まず八時廿分市街戦略ぼ終りしを以て守備隊を殘し他は居留地に引揚げたり

此戦鬪に參與せしは日米英佛兵合して約四千砲二十六門我兵は常に勇敢に働けり又一方に於ては停車場を守備しありし歩兵中隊は敵を逆襲し進んで水師營砲臺及海關迄を占領し分捕砲八十内十六は最新式砲なり又天津城内には多數の兵器彈藥等ありしも他國の占領區域に屬するを以て一も押取せずして各占領國に譲りたり連合軍の死傷約五百内三百は我兵なり

(以上第三信九月二十六日白河の舟中に記す)

白河の御用船

天津より北京の間は陸路二十九里なるも鐵道は天津より楊村に通じ

たるのみにて、楊村北京間は匪徒に破壊せられたる儘修理未だ成らず、且つ天津楊村間とても露國の管理に屬する故、各國の輸送は一切白河の水運に頼る。水路は天津より通州まで四十八里、通州より北京まで陸路約五里なり。假令天津より楊村まで鐵路によるも、其の以北は必ず水路に由らざる可らざる故、諸國は各國とも全く天津通州間を水路に頼るもの多きなり。而して其間を上下する船は日々數百艘にして、其大部分は日本軍にて先づ之れを借り上げ、其數約六百隻に上る。毎船往復約十日を費やし、日々約六十隻づつ、天津を發着し、船は皆日章旗を掲げ、毎船一二人の日本兵之れに乗り、以て暴民の襲撃に備へ兼ねて外國軍の占領を防ぐ。故に一たび天津を發して上流に漕ぎ上れば、船の大部分は日章旗を掲ぐ。曩に塘沽天津間は滿目總て露西亞の國旗なる爲めに、恰も露國領かと疑ひしと同じく、天津の上流白河中は、日本の勢力最も大なるを想見するに足る。余輩は二十五日午前天津に着して、午後一時に天津を發し、宇佐川大佐、仁田原中佐(重行)辻村二等監督等の諸將校及數人の軍吏從卒と共に、三隻の船を雇して發す。船は幅廣くして底淺く、上下平かなる制のシヤンクなり。嘗て故大久保甲東が臺灣征討後の紛議に關し、北京に使用して、五十萬兩の償金を收め、和を議して歸る途上の口吟に、和成初下通州路、閑臥逢窓夢自平の詩は、即ち此白河中の船を稱するなり。河流底淺く汽船を漕ぐ能はず、故に皆此の長方形の底平かなる河船に頼る。近頃岡澤侍從武官長の軍隊慰問として北京に往復せらるゝにも、矢張り此船に乘られたるなり。船に大小の差あるも、其形狀は皆同一なり。而して余等の便乗したるは、其中に於て最も大にして、堅牢なるものといふ。船の上流に遡るには、長く綱を檣頭に着けて數人の人夫河岸を歩しながら歩調を揃えて之れを曳き、船頭は楫を操つり又は帆を上下し、助手一人之れを助け、別に交る々々一人庖厨を掌どり、朝より暮まで漕ぎ上るなり。一日の行程七八里といふ。此等の舟士をも苦力と云

津を發し、宇佐川大佐、仁田原中佐(重行)辻村二等監督等の諸將校及數人の軍吏從卒と共に、三隻の船を雇して發す。船は幅廣くして底淺く、上下平かなる制のシヤンクなり。嘗て故大久保甲東が臺灣征討後の紛議に關し、北京に使用して、五十萬兩の償金を收め、和を議して歸る途上の口吟に、和成初下通州路、閑臥逢窓夢自平の詩は、即ち此白河中の船を稱するなり。河流底淺く汽船を漕ぐ能はず、故に皆此の長方形の底平かなる河船に頼る。近頃岡澤侍從武官長の軍隊慰問として北京に往復せらるゝにも、矢張り此船に乘られたるなり。船に大小の差あるも、其形狀は皆同一なり。而して余等の便乗したるは、其中に於て最も大にして、堅牢なるものといふ。船の上流に遡るには、長く綱を檣頭に着けて數人の人夫河岸を歩しながら歩調を揃えて之れを曳き、船頭は楫を操つり又は帆を上下し、助手一人之れを助け、別に交る々々一人庖厨を掌どり、朝より暮まで漕ぎ上るなり。一日の行程七八里といふ。此等の舟士をも苦力と云

ふ(シヤ)ンクの形は口繪寫眞を參照すべし)

北倉の守備隊

二十六日の朝、北倉に到りて暫時上陸す、北倉は天津の上流二里許の地にして、天清陥落後清兵の據て聯合軍を防ぎし所、八月五日の進撃に日本軍の先登して之れを占領し、當日山川砲兵少佐の負傷したる新戰場なり、市街は白河の左岸に在て、河には舟橋を架し、今は我が守備隊長兼兵站司令官として馬場少尉(續)一小隊の兵を率ゐ、楊柳中に幕營して之れを守備す。

北倉は元來餘り賑かなる所にもあらねど、戰時聯合軍の爲めに焼き掃はれ、今は滿目唯だ、四壁を殘存するのみ、兵站司令部は怪げなる竹又は木片を拾ひ合せて柱と爲し、上をアンペラにて蔽ひ、僅かに雨露の一部分を防ぎ、中にテール形の高き机を四五脚並べ、一切の事務を其中に執る、此の假小屋さへも、近頃此所を通過したる我軍の繩を負へたる駝

馬の病みて輸送する能ざる爲に繩を此地に遺し、物ありしを利用し、僅に構造したるもの、由にて、其前は全く地上の天幕中に起臥したりとぞ、幸ひに酷暑中にも雨季中にも病患者を出すと絶無なりしといふ。營中に二三羽の家鴨を蓄ひ、別に數羽の鶏と、生れて未だ十日計りも經ざりしと覺しき雛鶏の遊ぶを見し故、奇らしと思ふて尋ねしに、此れは近傍の村民等が各國聯合軍の剽掠に困しみ、日本軍の保護を請ひ來たりし故、兵を派して巡邏せしめたるを謝し、前日未明に携へ來りて贈りしもの、由而して晝間携へ來れば途中直ちに外國兵に奪はるゝ故、斯く未明に携へ來りしなりとぞ。

(參考)

八月五日天津發山口師團長の公報

四日夜半より連合軍は白河の兩岸より北倉及火藥局附近に亘る敵を攻撃し、我師團は五日早朝火藥局及韓家樹を略し續いて北倉及び王庄茶棚を占め、目下一部を以て敵を追撃中なり、敵の兵力は二万餘

八方に退却し我死傷將校以下三百餘敵の遺棄したる死骸二百餘、

白河沿岸の慘狀

白河は兩岸に堤防無く、屈曲極めて多く、河流甚だ緩漫にして、水色は黄ばみ濁るも、河水の氾濫するは甚だ稀なる由にて、兩岸は見渡す限り盡く畑として耕され、前日塘沽天津間鐵道の左右に觀望したる不毛の原野とは全く趣を異にし、作物は高粱最も多く、蜀黍之れに次ぎ大豆、小豆、胡麻、棉花、南瓜、胡瓜、茄子等、植ゆるとして、茂らざるは無きも、今は之れを秋收する者なく、唯だ上下の船夫等が日々の食料として掠奪するに任かせ、棉花熟して空しく雪を散じ、大小豆は莢を出て、徒らに地上に飛散するのみ、北倉より楊村までの間の沿岸には、河の左岸に北倉より柴樓村、漢口、北新庄、馬家口等あり、右岸には王庄、桃花口、新庄、下滯口、滯口、漢家庄、灰道等の各村あり、此の右岸は即ち北京天津間の國道とも云ふべき道路通じ、我が軍用電線も之れに沿ふて架設せられつゝある所なが

ら、各村の人家は盡く焼き掃はれ、然らざれば破壊せられ、塗り圍みたる四壁のみ殘存して、屋蓋の存するものは一戸も無く、住民は男女老幼を問はず、一人も見へず、時に瘦狗の河邊に徜徉して漂着したる人馬の死屍を食ぼり喰ふあり、戰敗國の常態とは言へ、慘怛の光景、一見酸鼻に堪えざらしむ、漂着の死屍は近來大いに減じたりと聞くも、尙ほ一日の中に數個を見る、中には昨今居られたる未だ新らしきもあるなり。

(以上第四信九月二十八日白河舟中に記す)

楊村の景況

楊村は天津通州間に第一の繁盛なる地にて、白河を夾みて兩岸に市街あるも、主たる市街は左岸に在り、聯合軍の此地に入りしとき、日本軍の大部隊は右岸より進み、唯だ砲兵のみ各國軍と共に左岸より進みしに、敵の抵抗案外に脆く、各國軍は早くも市街に入りしかば、我が右岸軍は殆んど戰鬪の間に合はざりしと云ふ爲めに、此地の市街は兵燹に罹り

しもの少なく、珍らしくも完全なる家屋多し。此所までは天津より鐵道既に開通し、日々數回往復しつゝあり。然れども各國軍は多く水路より輸送すること前に記するが如し。此所までは水路と鐵道と稍々並行せしも、此所より方向を轉じ、水路は東北に通州に通じ、鐵路は西北に北京に通ずるなり。而して楊村の鐵橋は市街の下流一里計りの地に在て修繕既に成れども、鐵道の修繕未だ成らざる爲めに、露軍は日々其の修繕に従ひ居るといふ。此地の河には舟橋あり、天津より北京への本道は、此所にて左岸より右岸に移るなり。右岸には獨逸、埃地利、伊太利、亞米利加等の各國守備隊在り、左岸には日英露佛の各國兵あり。此地の日本兵站司令部は、市街の一富豪の家に設けられ、司令官は藤村少佐(正彦)副官は岡田中尉(哲藏)にて、中尉は文學士の一年志願兵なり。東京に於て余と相識る。此家は宏大にして屋高し、屋上新たに物見臺を假設したりと聞き導かれて階子を登り、精巧なる屋瓦を踏み占め、八犬傳の芳流閣に似

たる屋の棟に到れば、日本の屋上に見る物干臺の如く、四本の柱を結び着け、三四枚の板を架したる橋を建つ。立て四方を望めば、正に是れ直隸の大原野を一望の中に收むる大パノラマなり。天津に通ずる鐵路は直くして糸の如く、白河の流れは曲折して此に似たり。烟を噴て走る汽車、網に曳かれて遡る河船、偕は市の内外に翻へる各國の軍旗、三々五々往來する各國の兵士、白服の汚れて鼠色に變ずるもあれば、冬服の新たに着して藍色の鮮かなるもあり。米國軍の幕營中には軍樂奏せられ、露軍の營外には軍馬群がり、那勃烈翁帽の額に鏽の徽章着けたる佛國の東京兵は、白色なる大黒帽子の額に日除を着けたる露國兵と手を握りて往來すれば、頭に太く布を捲きたる英國の印度兵は、黃帽黒服の日本兵と手眞似にて談笑するなど、盡く指顧の間に在り。

河に架する舟橋は、佛國兵之を管理し、橋は天津北倉と同じく數隻の舟を横に並べて架し、河心の二隻だけ通船の上下する毎に開いて通過せ

しむるに、船の上下するもの織るが如く、橋上橋下帆檣林立し、苦力の雑踏喧囂甚だし、税所大佐と山川少佐とは天津より鐵路により既に此所に來り待ち、再び舟を同うして發す。

(參考) 八月七日天津發山口師團長の公報

聯合軍は昨六日午前七時楊村に向ひ運動を起し英、米、露、佛、及び我歩砲兵若干は白河の左岸より我師團の殘餘は其右岸より行進せり然るに敵は左岸縱隊の先頭部隊の爲に脆くも撃退せられたるを以て我右岸縱隊は僅に砲兵を以て寶低縣に向ひ退却する敵の大縱隊を砲撃するを得たるのみ又左岸縱隊の行進は道路險惡なるが爲め行進大に遲滞し遅く楊村に達せし爲め全く戰鬥に參與するを得ざりし我兵死傷なし

本日歩騎砲工の一部隊を以て速かに南蔡村を占領する筈なり、八月九日河西務發山口師團長の公報

七日師團の一枝隊は敵を撃退して南蔡村を占領せり師團は八日南蔡村を九日河西務を占領せり敵は多少の抵抗を爲したりしも我前衛の驅逐する所と爲り北方に向ひ退却せり河西務にありし敵は親軍武衛湖南軍武威軍等二十餘營にして馬玉崑、除及聶等は昨夜到着せる李秉衡と共に防禦の軍議中なりしも我が前進の急速なりし爲に狼狽退却したるが如し

白河の船中生活

白河の沿岸は天津以北北倉、楊村、南蔡村、河西務、馬頭等の各地を経て通州に達するまで、陸上には幅廣き道路ありて、實に天津北京間第一の往來繁き道路なるのみならず、白河は南方の各省より水運によりて、北京に百貨を輸送する最必要の線路にて、河を上下する船舶は日々百を以て數ふ。其の船の形は何れも上下平らにして、底深く、長方形にして、胴は稍や膨れ、長さ五六間乃至十間許、幅八尺乃至一丈許にて、船内を數區に

劃し、上に板を敷き、板の下に貨物を積み、又船頭等の寢室とも爲すなり、船上に板を圍みて客室を設けたるは上等なるものにて、普通の船客は遂を以て屋根と爲したる赤壁の圖などにて見る如きものを板の上に設け以て乗客の室と爲す、余等は其の板にて圍めるものに乗れるに、船の長さ十間、洞の幅一丈一尺、船室の長さ五間、幅八尺、高さは中央の高き所にて四尺五寸、周圍は板にて圍み、屋根は遂にて葺き、恰かも甲板の上に一室を設けたると同じく、板下には荷物を藏し、板上にはアンペラを敷きて起臥の室と爲せり、此船には船頭一人、曳船夫の苦力八人なりき。此の如きは甚だ稀にて、大抵は板圍の船室なし、而して其等の船は從來旅客貨物ともに積みども、中に貢米を積む者は、舳に彩色して獅頭の如きものを畫く故、一見して知るを得、之を貢米船と云ふ。此等數千の船舶は、今は皆な各國軍の爲めに占領せられ、一隻も一私人の用に供せらるゝものなし。故に船毎に各國旗を掲げ、朝より夕まで舳艦相啣んで上下

し、頗る壯觀なり。毎船占領國の衛兵二三人乗りて他國兵の占領を防ぎ、積載品の安全を護るなり。船には大小に従ひ五六人乃至七八人の苦力、橋頭より繋ぐ所の長き綱を曳き、河岸を歩いて船を遡らしめ、船頭は帆を操つり、舵を左右し、河の屈曲に従ひ、曳綱を伸縮して進航を便にし、帆の上下左右と曳綱の伸縮とは、數十個の滑車を利用して巧みに之れを運轉す。日本軍隊にて使役する彼等は、一日四五十錢の賃銀の外に、玄米若干を給す。苦力等は之を炊きて自ら食し、一日三回喫食時間の外は、未明より黄昏まで斷へず労働し、其の精勤なること到底日本労働者の比にあらず。また食後の休憩若くは喫烟の爲めに業を休むこと無し。若し行程を急ぐ爲に、更に賃銀を増給すと云へば、夜間も燈を點して舟を曳き、金錢の前には如何なる勞苦をも辭せず。其の食ふものを見れば、玄米を焚たる飯を大なる茶碗に盛り、茄子の油煎り又は南瓜と葱とを秩序無く煮たる物、又は韭と唐辛子の鹽漬など、飯上に載せて立ちながら食し、

時々河岸の畑より蜀黍を分捕り來りて湯煮と爲し働きながら之を食ふ。白河の沿岸は土地肥えて見渡す限り耕され、各種の畑作を種ゆるも、今は住民皆遁れて秋收する者無き故、苦力等が野菜を得るには非常の幸福なるが如し。(白河沿岸日本軍守備隊の口繪参照)

(以上第五信九月三十日白河舟中に記す)

戦後の通州

聯合軍は天津以北北倉にて激戦し、楊村にて小戦したる外は、敵の主力全く失ひ了て、また抵抗力なきが如くなりしかば、恰かも平時の行軍の如く、豫め行進の日割を定めて行進し、通州までは毫も戦争無かりしも、通州は北京の關門にて、水陸運輸の接續する所、天津北京間第一の都會とて、道臺を置き、米倉あり、四方に城壁を繞らしたる要害の地なれば、此所にては多少防戦するならんと信じ、先登に進みたる日本軍は、固く鎖されたる南門に向ひ、工兵は黄色火薬を用ゐ、之れを破壊して進入した

るに、城内には最早一兵無く、奇らしくも市民は一人も立退きたる者無く、家毎に貨物を戸外に積み重ね、日本軍の來るを迎ふること、恰かも籠食壺漿して王師を迎へるとも云ふべき有様なりしかば、我軍は進んで先づ東西の兩米倉を占領し、白米十數万石と、金櫃の馬蹄銀七八万兩を捕獲したり、而して此れだけならば、同市は全く兵燹を免かれ、四民安堵するを得べかりしも、外國軍の入り來るに及びて、俄かに財物を掠奪し、火を放ち婦女を辱しめ、後ちに之を殺ろし、亂暴狼藉を極めれば、市民俄かに全く家財を棄て、遁れ去り、殊に憫むべきは、良家の夫人又は子女にて、既に羞辱を受け、又は將に受けんとするを愧ぢ、庭中の水壺とて、雨水を貯ふる爲めに、中人以上の家には、毎戸必ず備ふる所の高サ四尺、口徑三尺位の水瓶中に身を投じ、自殺したる者夥多しく、其數は日本軍守備隊の調査したる丈けにても、五百七十三人ありしと云ふ。斯る有様にて、通州の西北方は、城の内外を通じて、過半は焼失し、其の未だ焼けざ

る所も家財は一切掠奪せられて一物を留めず、余等は守備隊より附せられたる案内兵に導かれ、市中を一覽し、且つ東西の兩倉庫を見しに、東は十棟、西は六棟にて、毎棟砂山の如くに俵にも入れずして白米を積み、入口にアンペラを以て階段を作りたる外は、四方隈なく高さ九尺許に達し、上層は極粗悪米にて殆んど食ふべからざるも、漸次下層に至るほど上米にて、最下層は親王米とて、皇族の食料に供するものと云ふ。純白雪の如く、日本内地にても見ること稀なるものなり。各倉約八千石を藏するが故に、十六棟を通じて十二三万石ある豫定にて、目下支那人夫を使役して頻りに袋に詰めしめつゝ、検査中にて、北京通州馬頭等に於ける各守備隊の糧食は、今は盡く此米を用ひ、其の粗悪なるは人夫の賃銀に代へて給しつゝあり、而して守備隊のみに之を用ゐて餘りあるときは、廣く發賣して以て今年冬期の饑餓に瀕する土人を救はんとの議もありといふ。また守備隊長佐本少佐壽人の案内にて避難人民の室内を

見しに、家は一戸内に五家族乃至十家族を集め、内は固く鎖して何人をも入らしめず、故に豫め守備隊本部より通達して開門せしめし後、入りて見しに、住民は一同室外の地上に座して叩頭の禮を爲す、其中に容色秀麗なる若き婦人は、故らに顔に墨を塗りて醜を装ひ、人後に隠れて僅かに謁す、其の心事眞に憫れむべきなり。(口繪寫眞參照)

(參考) 八月十一日張家灣發山口師團長の公報

十一日敵は張家灣に據り我を拒止せんとせし、直に前衛の驅逐する所と爲り、其主力は北京方面に一部は通州に向て退却せり、敵の死骸五十餘、我師團即死兵卒二名、負傷下士卒五名、我師團は張家灣の北方を占領し、前衛は通州に近接す、偵察の結果に依れば、通州には敵の大部隊なきが如し

八月十二日通州發山口師團長の公報

師團は今早朝通州を占領す、敵は抵抗すること無く、昨夜半北京方向

に退却したるもの、如し精米約五万石を有する米庫其他兵器等を分捕る

土民の保護願

左の一篇は、北蔡村の人民が、楊村の日本守備隊に來り、保護の下に立たんことを請ふて呈出したる書なり、皆な外國軍の剽掠に困み、白河對岸なる南蔡村に於ける日本軍保護の下に在る人民の漸く歸來して生業に安んずるを見て、共に其惠に浴せんと欲するなり。我軍は之を許し、今は毎日數回兵を派して巡邏せしむ。

具宣、北蔡村鎮運河東岸各村商民人等、稟爲兵船過境擾害商民、伏乞保護事、竊自

大日本國駐兵蔡村以來、張貼安民告示、招集流亡、令商民復業、而至今沿北蔡村一帶民居商戶、寥落如前、情緣各國往來兵船日々下岸、滋擾、各持火鎗、群入民宅、擄掠婦女、戕害善良、衣物牲畜、搜括一空、以致作買賣者

不敢開市、操農業者不敢收秋、遠方貨物無人轉運、近地糧粟坐視拋荒、商民乏食、難以爲生、

大日本國既以仁義爲心、安民爲本、此情此景、當在洞鑒之中、

爲此合辭具稟、伏乞

設法保護、俾運河東岸北蔡村一帶商民、各安生業、不受驚惶、實爲德便上

稟

北蔡村は南蔡村と白河を夾んで兩岸に在り、楊村と河西務との中間なり。

土民の歸順

また聯合軍の始めて楊村に入りし後、附近拾數村の人民は連署して歸順を表し、日本軍隊の前に上りたる書あり、左に記するは即ち是れなり、

歸順降書

具稟、歸順民人村庄等、叩懇
上大國王大人官長先生之臺前、

茲因各國官兵催辨民夫、就有匪人假伴、各國官兵以致搶擄庄民、不辨
真假、只嚇的、哭聲振耳、小男婦女四散奔逃、乞求

上國大人先生賜與各執照救、一方之黎民、免其塗炭、感恩答報、

計庄村 聶家庄 小潘庄 掖指庄 灰鍋口 郝家庄

北王平 小吳庄 鄭家庄 單家封土 張家庄

柳河庄 雷家庄 楊寬庄 辛庄 瓦房庄

鳴徐庄 梁庄 梅廠 陳庄

庚子年七月三十日歸民等公具

此書は各村落の委員とも名くべきもの相率ゐて來り、剽掠を免がれん
が爲めに上つりたるものなるべし。然れども外國軍は過る所火を放ち
市街と無く村落となく概ね焼き拂ふて完きもの無し。

露軍の亂暴 (其一)

在北清の各國軍隊は、亂暴を働らくもの多き中に、露國軍は最も甚だし、
彼等は婦女を姦したる後之を殺し、家財を掠めたる後之を焼き、其軍の
過る所殆ど生艸無しと云ふも可なり、其狀は實地を見ざる者は全く想
像し能はざるものあり。左に記するは在楊村の日本守備隊に呈出した
る土民の請願書なり、以て所謂俄國兵の亂暴の一斑を窺ひ知るべし。

具稟難民

順天府武清縣黃花店居民某等、是五月間、因義和拳起叛、毀焚教堂、移害良
民、身等非教非團、以至玉石同災、冲冲逃匿、至六月間、天國大兵雲集、平定教
匪、上救國難、下安群黎、至八月、楊村縣有英美日德番諸大國、保商護民告
示、身等冉冉移歸、至又八月初、十回其九、現下正在一年辛勤秋收之際、得
見諸大國、安民護商、保護告示、踴躍而歸、不意收刈未始、忽來俄國兵士、結
隊成群、四鄉劫掠、奸淫童女、強沾民婦、不稍如意、即加殺害、一見男兒、開鎗

斃命、一月之内、奸死童女九名、淫亂民婦一百餘人、盡節自亡者十二人、鎗斃男子十餘人、搶掠當舖行口錢店居民牲口衣裳食用首飾項、不計其數、日來數次、未有定限、爲此無奈、上呈苦衷、懇乞大將軍、派隊鎮守黃花店、本庄離楊村、卅六里之遙、共有戶口五百餘家、由楊村至本庄、共有四箇庄村、愿照天津例、一式投捐納貢、目今清國人民共知大將軍、統仁義之師、保懦弱之國、救患難之民、故實呈苦衷、乞請

貴國大將軍、遣派勇兵、彈壓濟民、澤布天地、占仁上呈、

鄙人愚見、此爲上惻、不知伸士意見若何、或有有用字參差、請爲改正、僅此一黃花店村民の被害猶ほ此の如し、通州の婦女五百七十三人の自殺を見るは宜なりと謂ふべし。

露軍の亂暴(其二)

左に記するもまた在楊村日本守備隊本部へ届け出でたる露軍亂暴の

實況なり。斯かる事は太清、天津、北倉、楊村、南蔡村、河西務、通州の各日本守備隊ある所には到る所に之を聞かざる無し、俄國の兵と云へば清民震慄す故無きにあらざるなり。

中國八月十一日早十點鐘時候、楊村河東德姓家、突見俄國軍人二名、各自負銃、騎馬三名、將馬直騎入院、婦女踰牆逃避、小孩俯伏牀下、不敢出聲、德姓迎出、其人下馬、以手比式、索要洋錢、告以無有、手將德姓辮髮扭住、將領按俯地下、以所帶佩刀在脖項、比試所說言語、雖然不懂、大約是有洋錢則生、無洋錢死、後來告說、貧人向無此物、伊用刀將髮辮、齊根割下、其四人在屋內、將所有物件全爲翻出、搶去名人寫畫團扇七把、棉被一床、羊皮馬褂一件、藍洋縐棉袄一件、藍洋縐女棉袄一件、女鞋一双、白布二疋、其餘零星小物不計其數、其不要之物、亦全爲損壞、以手比式、直問有婦女否、告以逃遁、又問有十數歲幼孩否、後來到一陳姓家、將七十餘歲病叟髮辮、亦爲割去、又將某姓家十三歲幼童帶去、迄今四日、尙未放回、

大日本繙譯師石大老耶德鑒

愚弟 德 明 拜 寫

此等届書は土民の記したる草案を得て余等の手に在り、見んと求むる人あれば何人にも之を示すを辭せざるなり。

(以上第六節十月三日の夜、北京師團司令部に記す)

通州北京間の道路

通州西門より北京城外の東直門までは、日本里程約四里、北京城内交民巷の日本公使館までは、優に五里ありといふ。而して其間の道路は、石道にて、長さ六尺幅三尺、厚さ七八寸許の巨石を道幅五間許に敷き詰り、石と石との間は所々鐵の楔にて繋ぎ、堅牢無比なるが如きも、平時通州まで白河の下流より運び來る貨物は、通州北京間の運河に由る外は總べて此の石路に由て運搬し、車馬絡繹として斷へざる爲に、流石に廣大なる磐石もて築きし道路も、車輪馬蹄に磨損せられ、石の四隅は陥没し、凸

凹轆轤車行最も惱む。而して此邊には平時一種の幌馬車あり。幌は蒲鋒形にて高さ四尺前後三尺、左右二尺五寸許にして、乗者は其中に座し、馭者は幌の前に踞し、左手に手綱を繰り、右手に鞭を執り、馬は一頭にて之れを曳くなり。車は日本内地の牛車の如く、車輪大にして車軸太く、如何に動搖するも破損の虞無きも、元來バネなき構造なれば、車上の人は車の動搖する毎に全身震撼し、久しからずして頭痛を起さん。とす。幌馬車口繪寫眞参照故に、聯合軍の北京に入りて後、石道の破損甚だしきに避易し、露西亞軍は先づ石道の南方に沿ふて、畑中に一條の新道を開きし。も、最も多くの兵を出したる日本軍隊は、露國の道路のみに依頼する能はずして、工兵大隊は別に石路の北方に沿ふて、通州城の北門より起り、大和庄、長勞口、塔蓮坡、亮馬廠、石州堂、六軍屯、二里庄の各村を経て、北京城の東直門に至り、更に城外を北に沿ふて安定門外の日本軍旅團本部に達する幅延二間の新道を開きたり。而して日本道も露西亞道も、何れも

舊道に關せず成るべく一直線に高粱圃中を平げて開きたれば其距離は舊道に比して大に短縮せりといふ。余等の一行は通州守備隊本部に請ひ各馬に騎りしも余は性來馬に慣れず殊に破損し易き寫真機を携へたれば幌馬車に乘れり。車内は絹の蒲團を敷き幌の左右は彫刻を施したる小窓を設け、綾の窓掛を垂れたるは蓋し幌馬車中の上等なるものなり。此種の馬車は平生通州北京間には何百輛となく往來し旅客を乗せるものと聞けども今は列國軍隊と之に屬する人夫の外には絶て旅客の往來する無く馬車は盡く列國軍に占領せられ個々所屬の國旗を樹立し護衛の兵を伴ふ。若し之無れば立どころに捕獲せらるゝなり。余は一行の荷物をも車中に積み税所大佐の伴へる騎兵及び我が一行の乗りたる馬匹に屬する從卒と共に先づ露西亞路を行く。道は凹道の制を採りしも降雨少なければ河流と變ずる虞少なきが如し。然れども連日の炎天に乾きたる砂塵は馬蹄に蹴上げて面を襲ひ殊に數しば列

國軍隊の往來する者と行き逢ひ塵砂濛々として目を開く能はざらんとす。方めて車窓の中より望めば此邊りは所々に楊柳茂り時々若き松杉の林を見る。北清に入て松杉を見るは此日を始とす。而して松林の間には概ね煉瓦塼を廻らす近づき見れば皆な墳墓なり。實に清國人の墳墓を裝飾するは遙かに邱園に勝さる。また往々にして石道に近づくとき路傍に高さ二間幅四尺許の石碑を見る。碑は同じ石造の龜を臺として其上に樹つ蓋し石道の工事に關する記事にても記するにやあらんと覺ゆ。通州より二里にして定幅庄と名くる村落あり。人家稍や稠く門構へ嚴かなる巨邸あり。通州道臺衙門なりと云ふ。それより少しく離れて日本軍の糧食縱列本部あり。石道を横ぎつて之に赴き愁ふ。同行騎馬の諸氏も會す。時は尙ほ午前十一時頃なりしも請ふて午餉を喫す。午後も露西亞道を行き二時過る頃北京城の朝陽門に達す。

戰後の朝陽門

朝陽門は通州より北京に入る當面の城門なり。八月十四日聯合軍の先
 登に進みし日本軍は、午前九時より此門を攻撃し、清兵の首力は此
 門と北方に隣る東直門とに集り、必死と爲て防戦したる爲に、午後五時
 に至るまで前後八時間の長き間、我が砲兵は終日城門を砲撃し、夜に入
 て我が工兵隊は彈丸雨飛の下に門樓に近つき、爆裂薬を用ひ、第一門及
 第二門の鐵扉を破壊したるなり。未だ門に入らざる前に前面を望めば、
 高さ十間の城壁は煉瓦を以て築かれ、南北に蜿蜒として山の如くに連
 なり、壁上には櫺の窗の如くに開かれたる銃眼より、今も舊式の砲門と
 列ねて駈べられ、城門は二重と爲り、第一門は城壁外に圓く築き出され、
 上に巍然として城樓聳ゆるも、樓の上半部は空しく碎かれて屋蓋を留
 めず、以て如何に我が軍砲撃の烈しかりしかを察すべく、城門は城壁の
 下に空腔形を爲し、鐵扉を左右より開閉する制なるに、二枚の扉は爆裂
 薬に碎かれ、一枚は飛び、一枚は挫けて傾むきつゝ、尙ほ存す。また以て如

何に爆發の猛烈なりしかを想ふに足る。門を入れれば更に第二門あり。構
 造第一門と同じきも、第一門の陰に在るが故に城樓は破壊を免かれ、當
 時恰かも修繕中なりしが爲に、地上より城壁に沿ひ、遙かに城樓の屋上
 まで足代を設く而して門扉の破壊せる状は、略ほ第一門と髣髴たり。城
 門の内外は多く兵燹に懼り、市街は焦土に歸して四壁空しく骨立し、燼
 灰は砂塵と混じて半空に漲り、左なきだに不潔の市街は、更に一層の汚
 穢を加ふ。聞くが如くんば、陥落の當日は、門の内外死屍堆を爲し、縱横狼
 藉行く可らず。後に集めて盡く焼き棄て、僅に一掃し得たりと云ふ。正に
 是れ燭燼盡是長城卒、日暮砂場飛作灰の句、古人能く這般の光景を賦し
 得たり。(朝陽門附近の光景口繪寫眞参照)

(参考) 八月十七日北京發山口師團長の公報

十四日午前九時より日没まで北京東面の朝陽門及東直門を砲撃し、
 午後八時四十分より九時卅分の間、於て兩門を破壊して進入し、東

面及北面の諸門を占領し一聯隊を皇城の正門守備の爲に派遣し一聯隊を別に公使館守備に派遣せり露軍は東便門より崇文門に進み英兵は殆ど戦はずして午後三時水門より先づ公使館に達せり我聯隊は東便門より崇文門に入り午後七時公使館に達せり公使以下皆無事

十五日早朝より皇城守備の爲め派遣せる我聯隊は終日敗兵と戦ひたり然れども我は砲撃を避る爲に戦決せず十六日皇城正門を占領したり

清國皇室諸大臣は五六日前西安府方向に逃走したりといふ董福祥の兵三千隨へりと

目下北京は秩序紊亂せるを以て之を整理する爲に北京を數區に分ち北半部は日本整備區域とし日露英米佛より各一人の委員を出し整理を分擔することゝ爲り我國よりは柴中佐を出したり

北京城の掃蕩も結了し敵は入旗兵及び義和團過半を占め散亂して退却せり敵の死傷本日まで六百を下らず分捕り大砲クルツ砲五門舊式砲百門大小軍旗無數我死傷將校以下二百餘人師團諸隊は北京城北練兵場附近に宿營し司令部は公使館にあり

戦後の北京城

北京城は内城と外城とに別れ内城は南北に長き長方形を爲し周圍は高さ十間の城壁を繞らし市街は其の城内に在り皇城はまた城内の中央に長方形を爲す外城は内城の南方に横に長方形を爲し一邊は内城の城壁に沿ひ他の三邊は別に城壁を繞らすなり内城には東北西の三方に各二門南方のみは三門なり皇城は南方に面する故南方三門の中央なる正陽門は實に皇城の正門なり其の右方を宣武門左方を崇文門と云ふまた東方の二門は一を朝陽門他を東直門と云ひ北方の二門は安定門及得勝門と爲し西方の二門は西直門及阜成門と爲す日本軍は

通州街道より第一に朝陽門に向ひ、更に一軍を右方に分ちて東直門を攻め、兩門を陥るゝに及び、城壁に沿ふて漸次北西方に迂回し、安定門、得勝門、西直門、阜城門を取り、露西亞軍は朝陽門より左方に轉じ、先づ外城の東便門に入り、右方に轉じ、崇文門より城内に入りたるなり。而して崇文門を入れれば、總理衙門は右方に在り、交民巷と稱する各國公使館所在の市街は左方に在るなり。故に北京城陷落の後、各國の間に占領區を定むるに當り、日本軍は朝陽門より横さまに阜城門まで一直線に劃し、中央の皇城を除きて、其他の北半部を占領地と定め、後に西直門より阜城門に至る市街を、佛蘭西の占領區に讓與す。また朝陽門より左方、崇文門及正陽門に連なる内城南半部の一半は、露西亞の占領地と定む。故に總理衙門も各國公使館も、總て露西亞の占領區内に在り。余等の一行は、朝陽門に入り、暫らく日露兩國占領地の境界なる市街を行くに、右方には所々に日章旗を樹立して、日本兵守衛し、左方は横に劃したる露國の

三色旗を掲げて露國兵の警備するを見る。既にして左方に轉じ、全く露國兵のみの警衛する市街を往くに、到る所未だ住民無く、焼け残りたる家屋は盡とく戸を閉ざし、四億民衆の主權者の棲みし帝都も、今は兵士の外は行人絶へ、頓がて城内を約一里も行きしと覺しき頃には、再び市街皆な焼けて、摧殘の瓦壁のみ零々たる間に、出で、其の焼跡を過ること數町にして、所謂交民巷の公使館通りに出づ。伊太利、埃地利の公使館は、全く焼けて國旗と守備兵の軍旗とにより、僅に其の存在を知り、佛蘭西と獨逸の兩公使館は、相對して半ば焼け、門前の煉瓦塀は横に銃彈の壁を掠めて飛びし無數の痕跡を印し、所々砲彈に貫かれて破壊したる所多く、門内の樹木も、多く彈丸の爲に摧かる。此邊は六十日間の籠城中、東北西の三面より、斷へず大砲小銃の彈丸を雨注せられし所と聞けば、實に左こそと思ひ遣られ、佛國公使館より一戸を隔て、西に隣れるもの、是れ日本公使館なり。今は第五師團司令部をも此に置かる。而して此邊

は背後の北方なる肅親王府が籠城中最苦戦の地なりしも幸ひに防禦線を保持したれば、日本公使館の表門は香港上海銀行と相對して甚だしき破壊を免るゝを得たるものゝ如くなりき。(口繪寫眞參照)

第五師團司令部

日本軍の北京に入るや、其の兵の大部隊は安定門外の蒙古外館なる羅麻寺に舍營し、尙ほ市内所々にも配置したるも、師團司令部は公使と日々種々の交渉を要すること多き爲に、之を日本公使館内に置かれ、乃ち山口師團長は西公使と同く公使館内に住し、其の表門を入て左方の一建築を二室に區劃し一を參謀部一を副官部に充て、公使館に隣れる市民の家屋數戸を以て管理部に充て、公使館書記官若くは通譯官等の官舎と相隣りし、公使館より扉を越て背後なる肅親王府中に焼け残りたる一部の屋舎には、柴中佐、原田參謀等之に住し、司令部附屬の軍馬は、肅親王府の庭中に繋ぐ。余等の一行は先づ參謀部に到着し、副官部の轉旋

の下に管理部内の一室を以て田口君と余との宿舎に供し、附するに當番の輜重兵一人を以てせらる。此に於て始めて行李を解き、衣服を改め、假令其室は清國骨董商の店舗なりしにもせよ、今は數日間此室の主人として、從卒を指揮し、自由に起居する身と爲りぬ。此の諸事不充分なる軍隊中に在ては、實に望外の優待なりき。斯くして先づ師團司令部に山口師團長を訪ひ、余等が東京出發後、全く半月間に於ける局面の動靜を聞くに、情況は依然として變る無く、清帝の西に蒙塵して所在不明なること、露國軍隊は多く北京を撤退し、こと、日本軍も一半を撤退すること等を開き、師團長は恰かも此の對話中に到來したる電報を披見したる後、去る九月二十九日聯合軍は山海關の引渡を清國守備兵に要求し、に、清兵は之を諾し、全く抵抗無く引渡したれば、日本も若干の陸軍を送らんとするの報を示さる。既にして刺を西公使にも通じ、に、公使も出て來り師團長と共に卓を圍んで談ず。公使元來健康ならず、加ふるに

長日時間簡城の爲に、元氣大に銷沈の色あり。然れども力めて外交の現狀を語り、慶親王及李鴻章の全權委員に任せられしこと、慶親王は日本軍之を迎へて現に北京に在るも、李鴻章は露國軍之を擁して未だ天津に駐まること、榮祿も全權中に加へられしも、彼れは前日久しく其兵を以て各國公使を困しめたる爲に、自ら恐れて其身を隱匿し、各國公使も其の全權たるを拒まんとする色ある等の狀況を聞き、余等は辭して宿舎に歸り、庭中に湯を沸して浴す。此夜は葡萄、林檎等の果物を給せられ、鶏肉の羹を喫しつゝ、麥酒を傾くれば、其美味得て言ふべからず、肉と酒とは日本産に異ならざるも、林檎の大にして葡萄の甘味なる、到底日本内地に見るを得ざるなり。(口繪寫眞參照)

(以上第七信北京第五師團司令部内の宿舎にて記す)

北京皇城縱覽記

清國光緒帝の都として四億の民衆を統治し、北京城も、一たび無謀の

戦端を東西列國の間に開きて勝たず、終に列國聯合軍の馬蹄に蹂躪せられ、外國の布衣余の如き者すら、宮院奥深く入て帝坐の側に徘徊するを得るに至りしは、余輩に在ては望外の幸福と謂ふ可し。然れども更に光緒帝の意衷を忖度すれば、牝鶏晨を司りて輔弼其任を盡さず、帝は無謀の開戦の非なるを知るも、親から之を制するに由無く、竟に國都の陷るに及び、勿皇宮中を出て、車駕の準備を爲す暇も無く、僅に庶民の常用とする馬車に召され、皇后及び西太后の御料車を併せて、前後十六輛の一行は、住み馴れし宮城を後ろにし、落ち行く先は白雲の保定、大原、西安と所定めず、西北に蒙塵し給ひしほどなれば、皇城内の裝飾は、御寢所の衾枕までも依然たるを見るに及び、極東同文同人種國の余輩、豈に無限の感慨無きを得んや。

明治庚子十月四日、余は稅所砲兵大佐、辻村二等監督、田口代議士の諸君と共に、皇城に入る。日本公使館の川島通譯官嚮導と爲り、憲兵數騎に護

衛せらる。是より先各國聯合軍は、北京城占領式を行ふ爲に一たび皇城内を通過し、も下士以下の兵を城中に入れしは、實に此時を以て始と爲す。平時は宮門殿に鎖し、豫め守備隊司令官に交照し、承諾を得たる後ならでは、將校とても入るを得ざるなり。余輩の一行は、前日既に其の交照を了せられしなり。此日他の諸氏は多く騎馬、余は寫眞機械を携へ馬車に乗りて之に従へり。

此日交民巷日本公使館内の第五師團司令部を出で、西隣なる西班牙公使館前を過ぎ、左方遙かに玉河と名くる溝渠の下流に前日各國公使館救援の先登第一として印度兵の潜り入りたる城壁下の水門を望みて、石橋を渡り右方の角なる露國公使館の横側を右に折れ、英國公使館の前を過ぎ、玉河を隔て、肅親王府の籠城跡を右方に見つゝ進めば、前面は皇城の外廓なり。地圖によれば、皇城南方の正門は天安門と云ひ、北方の裏門を地安門、東方を東安門、西方を西安門と云ふ。外廓内にまた内廓

あり。周回六里南北は我が六町三十三間餘、東西は我が八町二十四間餘、長方形を爲して全く宮殿を繞らした。四門あり。南方の正門を午門、北方後宮の後門を神武門、東方は東華門、西方は西華門と名け、之を以て内廓外に通ず。牆高サ三丈、雉堞高サ四五寸、壁は皆な紅く塗り、黃瓦を以て之を覆ふ。其の正面の通路は全市を繞らす。城壁の南門なる正陽門より一直線に午門に達するまで、其間大清門、天安門、端門を隔つ。端門を過ぎて午門を入れば、更に大和門あり、之を入れて始めて大和殿と名くる宮殿に達するなり。午門は米國兵之を守り、東華、西華、神武の三門は日本兵之を守るとぞ。余等は天安門を入らずして右方に轉じ、東安門を経て東華門より入る。總て皇城及皇族邸の屋根瓦は、黃渤を施し、遠く望めば日に映じて金色を爲す。東華門に連なる廻廊及び門内に甃を駢ぶる各宮は、屋瓦皆な日に映じ、煌々爛々人目を眩せんとす。未だ宮内に入らずして既に一種の莊嚴を加ふ。

東華門は實に皇城の通用門にて東京の宮城ならば阪下門と相類す。余等の乗る所の馬又は馬車は、此所の門外に繋ぐ。時に清國の宮内官吏は此所に待ち受け、先導と爲て門に入る。門内庭苑の通路は幅五間位の間方形の石を敷き詰め平かなること砥の如し。右折して宮殿正面の大和門より入るに、門内の各宮殿は串字の如く連なる。

大和門の前には銅製の獅子左右に對し、門内には東西兩廡あり、之を入れば太和殿と爲す。殿は元旦冬至及萬壽節に天子親臨して賀を受くる所。殿前に三條の石階あり、何れも幅九尺長三間許にて、左右に寒水石の丈け三尺許りなる石欄を樹て、中央の階には一枚石の寒水石に雲龍を彫はめたり。階の間には十八の鼎と銅龜銅鶴日圭嘉量各二を列す。日圭とは日の長短と東西南北の方位を正す器にて、嘉量とは斗斛を量る升なり。之を皇城の正門に列ぬるは、天下國家を治むる大本として、天の時を慎み地の宜きを正して海内を統一する所以を國民に知らしむる爲

といふ階を昇れば横に長方形を爲す宮殿は、四方に廊下を繞らし、正面に乾隆帝の御筆なる建極綏猷と書したる勅額を掲げ、殿の中央に南面して玉坐は一段高き所に御榻を安んじ、左右の高卓の上には七寶の香爐を置き、殿内は總て毛氈を敷きしも、前日聯合軍通過の際、數千の軍隊は泥靴を以て蹂躪したれば、雲龍彫刻の石階も、此所の毛氈の敷物も、所々に破損を生じて見へぬ。

大和殿の奥に庭を隔て、中和殿あり。また南に面す。構造は畧ほ大和殿と同く、總て中庭の四方は廻廊を以て區劃し、左右には各一個の通用門あり。東道者に聞けば、中和殿の建築は、方檐圓頂金扉にして、瑣牕各二十四あり。南北に各三の階あり、東西に各一の階ありとぞ。此所にも乾隆帝御題の久執厥中と書したる勅額を掲ぐ。此所は天子親から五穀豐饒を祈る所なり。中和殿の奥にまた庭を隔て、保和殿あり。毎歲除夜に天子親ら外藩を召して宴し、また親から進士の試験を行ふ所といふ。殿の廣

さ九間殿前の階は三出三成とて三條にして三段を爲す。此所にも乾隆帝の皇建有極の勅額を掲ぐ。殿後の十餘歩に別陞あり、其の北の東西に門あり、乾清門と云ひ、之より奥は内宮と稱し、別に一區劃を爲す。總て此れまで見し所の各宮殿は、屏障破れ、庭中には荒草茂る。是れ皇帝崇座後既に五旬を過ぎ、其間何人も修理せざることなれば無理ならざるも、屋瓦の上には、灌木の高さ三四尺なるもの往々にして發生し、數年來全たく手を下さざるを證す。不潔を意とせざるは、清國人の常習ながら、宮殿内にも尙ほ此の如くなるには一驚を喫するの外無りき。乾清門の前には階下に金獅子對し、庭上には高サ三尺許の石柱を樹て、一品二品と各官等に隨ひ、陛下に謁見する時に群臣の居るべき席次を定む。各宮殿の廊下は、地上より五六尺の高さある故、前後ともに、皆石階を昇降するにて、群臣は多く陛下なる庭中に立つものゝ如し。また庭の四方にも寒水石の柵を繞らし、所々に高サ九尺計りなる鼎を置き、また庭中に

古銅の水瓶を備ふ。瓶の高さ七八尺、胴の直徑六尺許、中に水を貯へ、水中に金魚を飼ふあり。金魚は頭大にして、眼球突出し、日本内地にて見るものと大に觀を異にす。(口繪中皇城内乾清門前寫眞參照)

乾清門を入れて正面なるを乾清宮と呼ぶ。天子常に政を聽き、また庶僚を引見し、元旦には諸王子に宴を賜ふ所といふ。廣さ九間、縱五間、中に玉坐を設く。宮前は丹陛にて、陛を昇れば左右に七寶の卓上に大なる白銀の香爐を飾り、上段なる御榻は紫檀と覺しく、低くして幅廣く、上に錦茵の如きものを敷き、玉坐の背後には凸字形の五枚より成れる紫檀の屏風を立て、左右の柱には克寬克仁皇建其有極と、惟精惟一、道積于厥躬と書したる聯を懸く。何人の筆なるを知らざるも、或はまた乾隆帝の御筆にはあらざるか。乾清宮の後は交泰殿といふ。天子の御璽を藏する所にて、聞くが如くんば、今回蒙座の際、天子は御璽をも携へずして、匆皇宮中を出で給ひしとぞ。交泰殿の後は坤寧宮といふ。皇后宮なりと聞けど、固く

鎖して入るを得ず。其の後は神武門とて即ち皇城の後門なり。
 内宮の東西なる宮垣の間に各五門ありて、門外は東西ともにまた一廓
 を爲す、其の西方の門は日華門、遊義門等の名あり、遊義門を入れば内に
 は儲秀宮、翊坤宮、養心殿等連なる。養心殿は皇帝の御寢所なり。其の室内
 は是まで見し所に比ぶれば最も壯麗にして、殿内の四面には金銀珠玉
 の裝飾を所狭きまで陳列し、中にも數多の置時計、書冊等は殊に人目を
 曳けり。最も奥なる御室には御榻、御寢床は依然として平時の如く、衾枕
 ともに備はり、床下は石疊にして靴にて歩すべし。中に日本製の粗末な
 る陶器類も雜へ陳列せられしは、唯だ外國産を珍とする爲か、室内に最
 も多く目を牽く者は此所もまた玉製の器物にて、花器、皿、盃、鉢の類一々
 數ふ可らず。勿々通過して一々熟視の暇無し。此所を出て、輿は皇后宮
 にて、更に左方に翊坤門を過ぐれば、西太后の御坐所なる翊坤宮なりと
 聞けど、宮障殿に絨して内を窺ふ能はず。而して外より見たる規模は、構

造略は養心殿と似たり。總て此邊りの各宮内は、金玉綿繡目を眩する計
 りなるも、庭中に一の花木無く、殿中に古書畫の珍とすべきもの無きを
 一奇とす。
 此等宮殿の奥には、尙ほ宮院數百莖を連ね、三千の粉黛は未だ残り留ま
 ると聞けど、今如何の狀を爲すか、何人にも入らしめざれば、窺ふに由無
 し。唯だ陰囊無しといふ官宦の徒が、氣力無げに婦人の如き聲にて語り
 つゝ、皇后宮、翊坤宮等の前に守衛するを見るのみ。余等は一ト通り覽了
 りて西華門を出で、此所に始めて松柏の茂りたる庭苑に入るに、棗子黃
 熟して樹を揺かせば、點々落下し、拾ふて食するに味ひ甚だ美なり。看來
 りて庭樹不知人去盡、春來還發舊時花の感無きを得ず。守吏は苑内の小
 亭前に床几を連ねて待ち、また茶を饗し、かば、普時小憩し、更に塀に沿
 ふて北に歩すれば、左方に大なる池を望む。池は三ありて、皆な大さ東京
 上野の不忍池より大に、北海、中海、南海と呼び、中海は一に太液池とも稱

し、總稱して三海と名け、此邊一帶の苑池を西苑と呼ぶ。北海の中に島あり、瓊島と云ひ、島と陸上との間には幅三間許の欄干ある石橋を架し、も今は破壊して撤去す。此所は一昨年八月以來前後通じて三年間、西太后が皇帝を幽閉したる所、當時帝を島内の宮殿中に移して、橋を撤し、島外の交通を絶ちしものと云ふ。人間を隔つる宮院の奥に、目の邊り皇帝流竄の跡を視、今また遠く西北に蒙塵せられたるを思へば、皇帝たるものまた薄幸の人なる哉。

皇城の背後は景山とて、城の内外滿目平野の間に、前朝の天子が万一の變を慮り、特に煤炭を積みて築きしといふ丘陵にて、上に寺院堂塔あり。登覽すれば皇城及北京全市を望み得ると聞くも、其門は英獨二國の兵士左右に分れて各一側を守り、兩國守備隊長の命無ければ開く能はずと云ふ。其手續を了するには暫く時を費やすべきが故に、登るを止め、唯だ門外の下方より山上を望みしのみにて、更に北海と中海を境する石

橋を渡り、中海を左にして庭苑の間を歩し、儀鸞殿に到る。殿は皇城の離宮にて、平時西太后の居住し、所と云ふ。今は獨逸兵之を守り、門を入れば中庭に大鉢の盆栽を陳列し、殿内には多くの什寶を藏す、其の多きこと皇城に優ると聞きしも、今は概ね守兵の爲に奪ひ去られ、唯だ錦装せる書冊のみ多く地上に散亂す。余は其中より守兵に請ふて御製全韻詩と題するもの一冊を得、表を緞子にて装し、中は毎紙紺紙金泥の縁を繞らし、美麗なる小楷を以て支那歷朝の天子を詠じたるもの、何帝の御製なるや、詳かならざるも、巨彭啓豐敬書とあり、頗る珍とするに足る。

西苑にも此所にも、所々に瓢を培養し、大小累々架上に垂下す。既に實りて蔓を去り、乾燥せられたるものは此の殿中の一隅に蓄へらる。中に寸瓢とて鉢中に養ひ、瓢の太さ寸許なるあり。税所大佐、田口代議士等、各守兵に請ふて數個を得、余も寸瓢三個を得たり。殿内には製造後未だ久しからざる長さ二間、幅一間、高さ五尺許の箱三個あり、板の厚さ各一寸許

の材を用ひ其制は日本の湯屋の湯槽の如し、板の面に元寶銀二百五十万兩云々の文字を大書す、中は全く空虚なり、守兵の爲めに奪はれて然るや否を知らず。

儀鸞殿を出で、來路を歩し、石橋を渡りて左右を望めば、池頭の楊柳半ば葉を散じて、蕭疎たる影を波上に蘸し、太液池の芙蓉も、概ね枯れ果て、轉た悽慘の景を加ふ。橋東に寺院あり、名を逸したるも、規模の壯なる以て見るに足る。此所に奇らしくも、鐵道を敷設し、模造の瀛車を造り、車輛の客室は錦繡にて装ひ、人力を以て押して軌道を走らしむ。平生外出すること無き皇帝、皇后、西太后等の爲に、管に娛樂に供するのみならず、泰西の新事物を知るの料に供するものゝ如し。

此等の宮殿、什寶、苑池は詳かに巡覽するには、數日を要すべきも、余等は午前九時に東安門を入り、午餐をも喫せずして、午後二時過る頃まで巡覽し、景山の後を廻りて再び東安門を出で、匆匆通過して見る所の十分

一をも記憶する能はず、况や余は見聞中數しば寫眞機を用ゐて宮院庭樹を鏡玉の中に收め、同行に後れて路に迷ふもの數次、爲に其詳を盡す能はず。歸り來りて瞑目一想し、僅に腦上浮む所を録し、以て紀念と爲すのみ。

(以上第八信十月四日の夜北京師團司令部内の宿舍に於て記す)

萬壽山離宮縱覽記

日光を見ざる間は結構を語る勿れとは、日本内地に於て久しく聞く所の俚諺、それと同一の談は北京に於ても聞けり。曰く萬壽山を見ざる間は清國建築の美を説く可らずと。是れ其の構造の壯麗にして規模の雄偉なる遙に北京皇城に優るあるを意味するなり。何となれば萬壽山は、清國現時實際の主權者たる西太后が六十一歳の萬壽節祝典を舉行する紀念の爲に、七年餘の歲月を費やし、國費の大部分を傾けて築造したる離宮なればなり。然れども其地は北京城外西直門より西北二十四清

里即ち日本里程四里を隔て、日本公使館よりは僅に五里餘を距るが故に、行て之を見る者少なし況や平時に在て外國人の其内に入るが如きは、固より得て期す可らざることに屬す。其の内部の事情の、日本人に知られざりしは洵に止を得ざりしなり。故に當初聯合軍の北京に進入するや、先登して城の西北方を占領したる日本軍は、一隊の騎兵をして、長驅して萬壽山まで占領せしめたりしも、軍人間には未だ萬壽山の價値此の如く大なるを知る者稀に、且つ之を守備するには約一個大隊許の兵力を具せざる可らず、而して當時北京のみの防備も未だ充實するや否やを詳かにせざるとき、戰略上に必要無き兵力を分つは不可なりと爲し、終に占領を放棄して退去したりしに、後一日を隔て、露西亞兵は之に代り、全く萬壽山を占領し、宮殿内に備へられたる財寶は、概ね剽掠して本營に運び去るの報を得、惜きこととしてけりと悔ゆる者多しと云ふ。

萬壽山の建築は此の如く壯麗に、其宮殿内には、清國現代美術の妙を極むと聞き、假令裝飾品は掠奪し盡さるゝとも、全部の構造を一見せんと欲し、余は師團司令部に請ひ、十月五日税所砲兵大佐阪田第五師團監督部長嚴三田口代議士の諸氏と共に、憲兵下士十數騎に護衛せられ、師團司令部より支那馬を借り、手提寫真機を頸に懸け、覺束無くも手綱を握り、曉色未だ糶糊たる間に玉河の石橋を蹄の音高く踏み鳴らし、得意揚々として出發したり。

北京皇城より萬壽山に到るには、正門を出で、西方西直門より出るを御路と爲す即ち御成街道なり。一帶に巨石を敷き、平坦砥の如しと聞くも、別に北方得勝門より出る間道あり。當時會たま横濱正金銀行副支配人鍋倉直氏また北京に在り、前日より萬壽山參觀の同行を約し、氏は安定門内の某所に寓し、一同會するには得勝門に於てするを便とするが故に、其の門外に集まることとせり。此に於て余等は北京城内北部の一

半なる日本軍占領地を行くに、清國人は言ふまでも無く、諸外國兵まで
 到る所皆道路を避け、歩を停めて恭やしく敬禮するを見ては、戦勝國民
 として一層の得意を加ふと雖も、余は乗馬の疾走すること、頸に懸け
 たる寫真機頻りに動搖し、革紐は今にも斷絶せんかと疑はれ、加之乗り
 慣れぬ馬背に臀を摩擦し、得勝門に達したる時には、行程未だ一里許に
 過ぎざるも、苦痛既に甚だしく、斯くては萬壽山まで到らんこと自ら危
 險を感じ、に恰も好し鍋倉氏は馬車に乗り通譯成田某氏を伴ひ來る。
 成田氏元來御術に長じ、曾て二十七八年の役、騎兵の通譯官たりし人、余
 が困むを見代て馬に騎り、余を鍋倉氏の馬車中に同乗せしむ。此に於て
 余は狭き溝鉾形の幌の外、馭者の後に隣りて始めて心を安んずるを得
 畑中の村落を行くに、此の邊りの土民は、未だ外國軍隊の暴行を受けざ
 れば、或は畑を耕やし、或は穀菜を收め、家に在るものも皆な其業に安ん
 ずるものゝ如く、道を問へば懇ろに指示す。

清國に入てより此日まで未だ曾て近く山を望むこと無かりしが、今は
 西北に進むに隨ひ漸く連山に近接し、其の最も近きものは、透迤として
 低く平野に連なり、臥牛の如き丘陵を爲し、上に樓閣の聳ゆるを發見す。
 雙眼鏡を以て望めば、朱門粉壁輪奐として遠く連り、丹楹碧瓦交錯して、
 煌々輝々日に映ず。馭者曰く萬壽山は彼所なりと、既にして道は御路の
 石道に合し、行くこと少時にして小橋を渡り、稍や稠密なる人家の間を
 過ぎ、華表形の牌樓の下を入れれば、忽ち離宮の門前なり。左右は遠く墻垣
 を繞らし、門は英國兵之を守る。是れ前日來此所を占領したる露國兵は、
 數日前北京守備の同國兵の概ね北京を退去するに及び、また撤去し、英
 國兵之に代はりしものといふ。我等の一行は豫め我が師團司令部より
 守備隊長に宛てたる縱覽請求書を携へし、守兵は一行を門前に待た
 しめ、入て指揮を請ひしものゝ如く、暫時にして出で迎へしかば、車馬は
 門前に繋ぎ始めて内に入る。

門内には松柏枝を交へ、翠緑の間に丹楓紅樞を彩どり、既に北京皇城の花木稀なると遙に趣を異にし、行くこと二丁許にして一宮殿あり、仁壽殿と云ひ、「大圓寶鏡」と書したる額を掲げ、庭中には盆栽を陳列し、室内には玉器、金屬、陶器、彫刻品等を蒐收して頻りに荷造りしつゝあり。蓋し露西亞兵の奪ひ去りたる殘品を、更に英國兵の手に運び去らんとするもの、如く、余等の之を見るを厭ふにやあらん、一士官出で接し、今は守備隊長外に出で、未だ歸らず、故に室内へ入るを拒む、唯だ境内の縦覽は欲する所に任すと云ふ。故に室内に入らずして其の後に出来れば、前面に昆明湖を望む。湖の周圍は二三里なるべく、右方の北岸は丘陵の麓に沿ひ、所々に樓閣を設けて層々相重なり、其間總て廻廊連り、左方の西南岸には近く一宮殿あり、殿の後方は遙かに楊柳の堤を爲し、堤外の平野眼界際涯なし。故に先づ左方の宮殿に赴けば、二層の樓閣は圍して樂壽堂と書し、此所にも英國兵守備す。堂の前湖水に臨みて一亭あり、余等は之

に就て憩ふ。亭外には蓮を植ゑ、敗荷數町の湖面を蔽ふ。花時の壯觀思ふべし。况や湖の對岸を望めば、巖に望みし廻廊の後方なる丘陵には、麓より半腹まで數多の樓閣檐を連ね、丘上には更に壯大なる五層の高樓天を衝て聳え、下方の廻廊と相待て、宛然屋氣樓を湖上に現出したるが如し。况や丘陵の背後に重疊する山岳は、湖水と映帶し、山光水色の美を競はんとす。眺望の壯大にして規模の雄偉なるは、流石に大帝國の離宮として、以て中外に誇稱するに足るべし。湖中には荷葉の茂る外に、小蒸氣船二隻、樓船一隻、小艇數隻を浮ぶ。豪華壯麗之を北京皇城の樸粗なるに比すれば、霄壤の差あるなり。萬壽山を見ざれば、清國建築の美を談する勿れの語、此に至つて空しからざるを知る。此の壯觀を眺め、徘徊去るに忍びず、携ふる所の行厨を亭中に開き、一行皆な午餉を喫す。

午後湖岸の廻廊を傳ふて右方に巡り、先づ玉蘭門を入れれば、廊は水に臨みて、長蛇の如くに連なり、曲折する毎に額を匾し、或は「日月澄輝」或は「丹

樓映日また或は烟雲獻彩など何れも筆跡麗はしく書かれ所々に小室あり欄に倚て湖光を賞すべく巖に見る所の漁船と小艇とは欄外に散在す更に邀月と名くる門を入れば景福來并函海養春など題したる額を掲げたる敷室を過ぎ順がて排雲門に到る門は排雲殿の前に在り殿は離宮の中心にして西太后の常に居る所と云ふ此邊りは正に是れ廊腰緩く回り簷牙高く啄み各地勢を抱いて鉤心闕角し構造壯大にして裝飾の華麗なる五歩に一樓十歩に一閣工匠の妙を極む時に守備隊長少佐ヂユブレー氏歸り來りて此所に待ち我が税所大佐と語り快く縦覽を諾し懇に一人の印度兵をして周ねく各室内を導かしむ余等の一行は始めて殿中に入る。

排雲門を入れば正面に雲輝玉宇と書したる額を掲げ左右には閭闔九天開花迎綵仗と雲霞双闕麗日映朝曦の聯を垂れ前に我が一行の始めて入りしときに見るを拒まれたる仁壽殿も近く其隣りに在り先づ入

て之を一覽し更に此所を守る士官に導かれて庭を隔つる一室に憩ひ一行は水を請ひしに清水に添へてウイスキーの饗を受く此の室中にも貴重品は既に概ね運び去られしも壁間の書畫架上の彫刻物若しくは白玉と珊瑚とより成る造花の類ありまた鳥籠中に機械製の小禽を飼ひ螺旋を捲けば禽は忽ち活動して籠中に飛翔し聲を發して鳴く精巧驚くべし日本内地にて見る所の活人形の比にあらざるなり。

排雲殿の中には古器物什寶の殘存するもの尙ほ多く白玉の基石などは地上に散亂して人の蹈むに任せ正面には萬壽無疆と書したる額を掲げ左右には三辰合慶と垂床惟席との額を匾す流石に西太后の居室とて一切の構造善を盡くし美を盡くす殿後の山腹は碧甍を以て左右より複道を築き高さ二十丈許攀ちて登れば丘上に四層の高樓あり巍峨として半空に聳ゆ之を佛香閣と爲す遠く數里の外より望むを得るは此の樓なり中に一大佛像を安んず元と山下の寺中に在りしを萬壽

節の紀念として此所に移せしといふ。中に「雲外天香」「導養正性」など書したる額を匾し、鑿映、群形潤生萬物、貫穿青瑛縈帶紫房の聯を垂る。此樓に登覽すれば、湖水の全景は盆池の如く、脚下に瑠璃一碧の水光を湛へ、南岸の柳堤は水烟に抹せられて遙かに直隸の大原野と連なり、茫乎として際涯無く、首を回らして背後の西北方を望めば、遠山近嶺は蜿蜒として起伏し、遠く萬里の長城を白夷の中に裏む。樓後には松林あり、下には巨石縦横の傍、野棗叢生す。暫らく石に踞して憩へば、北京に往來する沿道の村落は、指顧の間に在り、芥人豆馬、近く雙眼鏡中に望むべし。佛香閣の下、再び坂路を下れば、チユアレー少佐は排雲殿に在りて我が一行を待ち、紀念の爲に各何物をか一品づゝ携へ去るべしと言ふ。一行は其の好意を謝し、香爐、香合、花瓶の類を得。時に余は我が稅所大佐とチユアレー少佐に請ひ、佛香閣を背にして並び起つての圖を撮影し、且つ御六百二十號と附箋したる宣徳の香爐一個を請ひ得て殿を出で、また湖畔

に下つて廻廊を北西に巡れば、廊の西に盡る所、湖中に蠟石を以て築き、樓船の形に擬する一樓閣あり。樓に登れば、三面に湖水を望み、水を隔て、柳堤に對す宛も湖上に浮かぶが如し。朝晴夕陰、四時の遊賞適せざる無し。此に至りて益ます建築の壯麗と意匠の妙に服す。然れども工事の急成を貪ぼりしか、抑もまた工匠の勞を省きしか、四壁、天井の邊、紙を以て一時を糊塗し、既に剝落の醜態を露はしたる所無きにあらず。以て堅牢と對久とは得て望む可らざるを知りぬ。斯くて再び湖岸に沿ふたる長蛇の如き廻廊を歩し、全く門を出でたるは午後二時過る頃なりき。歸路は再び北京城の得勝門より入らんと欲し、途に俚俗大鐘寺と呼ぶ梵刹を訪ひ、所謂大鐘を見る。寺は雍正十年の勅建にして覺生寺といふ。大鐘の爲に名あり、北京城の西北角より半里許の地に在り、鐘は明の永樂帝の旨を以て製す、高さ一丈五尺あり、表裏とも字の大きさ方八分許りの華嚴經を隙間も無く鑄つけたり。縦横整々、一字亂れず、鑄造の精妙を

極む。觀了て再び車馬を驅り、得勝門に達したるときは、夕陽既に城壁の陰に没す。此に於て余は馬車を辭して鍋倉氏等に分れ、成田氏の乗りし馬に騎し、憲兵諸氏の間に入り、蹄下の昏き夜間の城内を走るに、支那馬の柔順なる、手綱を操縦するの要なく、前者の行くまゝに動き、幸ひに落馬の難を免かれ、午後八時過る頃、師團司令部内の宿舎に到着するを得たりき。(口繪寫眞參照)

(以上第九信十月六日の夜北京師團司令部内の宿舎に於て記す)

肅親王府の新戰場

肅親王府は日本、佛蘭西及西班牙各公使の北に隣りし、西は玉河を隔て、英國公使館と相對し、北は長安街を隔て、皇城の東安門に近接し、東は王府大街に沿ひ、方七八町の巨邸なり、而して日佛西三國公使館の前面は、交民巷の街路を隔て、獨逸公使館あり、館の南方は城壁に接し、崇文門一に哈達門は館の後にあり、伊太利、埃地利の兩公使館は、獨佛兩

公使館の東方、崇文門通りの王府大街を隔て、相對す。別に露國公使館は玉河の西方、交民巷の街路に面して後隣を英國公使館と接し、米國公使館は、露國公使館と路を隔て、相對し、其の背後を城壁に接す。故に義和團の蜂起し、各國公使館を圍むや、交民巷の公使館通りは籠城の中心と爲り、防禦線の南方は城壁に據り、獨逸兵之を守り、東方は伊埃兩公使館を境として、兩國兵之を守備し、北方は肅親王府に據つて、日本海軍陸戦隊及義勇兵之を守り、西方は英露米の三國公使館を境として、三國兵之を守り、清民中の基督教徒は、皆な肅親王府に集りて難を避けたり。後に伊埃兩公使館は守を失ふて燒失し、獨逸兵また其の守備したりし崇文門の守を失ひ、城壁を敵に占領せられたれば、肅親王府は直接に東北の兩面より攻撃を受け、且つ邸内の庭中に丘陵ありて、崇文門の城壁上より砲撃の標的と爲り、守備線最も長く、實に三方攻撃の中心とは爲れり、而して若しも王府陷落せば、忽ち佛日西の三國公使館は、背後より襲

はれ、英國公使は前面より攻撃せられ、各國公使館を擧げて盡とく虐殺を免かれざるの位置に在り、當時此の王府守備隊に長として日本水兵及伊國兵をも指揮し、兼ねて避難教民を督して防禦工事に従はしめたる柴砲兵中佐の苦心察すべきなり。故に余等は柴中佐に請ひ、親しく導れて王府の戦場を視たり。肅親王は清國皇族中慶親王等と共に最も畏敬せらるゝもの、其邸の大なると共に邸内また宮殿廂廡相連なり、邸の四方には堅固なる煉瓦塼を繞らし、邸内は所々に區劃して同じ塼を設け、宛然城廓の状を爲す。亂起るに及び、親王及家族侍臣は皆な亂を避けて外に移りたれば、我兵代て之に入り、尋で避難民をも其の邸中に集め、而して各國公使館内の婦人小兒は皆な英國公使館に移したり。去れば籠城の初には此所が激戦の中心たらんとは豫期せられざりしに、東北の防禦線漸やく破れ、敵は終に此所まで進撃し、日本兵之を防止したれば、偕は戦鬪の中心と爲り、寡兵を以て數十倍の敵に當り、不完全なる武

器を以て精銳なる兵器に抗し、幾たびも防禦線を侵され、退いてはまた次の家屋若くは塼に據り、防禦線を變ずること總て八回に及びしと云ふ。其間彼の宮殿廂廡は漸次焼かれ、終に一棟を留めざるの状は、柴中佐一々現状を指示して之を語る。戦ひ漸く激しく、我に掩堡の敵彈を防ぐもの無きに困しみ、王府の倉庫を開き、中より錦襪緞子の類を手當り次第に引出し、婦人をして砂囊を縫はしめ、之を以て砲臺を築きし所あり。更にまた其の砲臺に敵の砲彈命中して、破裂し、錦の破片は高く飛んで樹上に附着するあり、軒を連ねしと云ふ。宮殿廂廡は盡とく焼けて僅に壁のみ骨立し、碎瓦壘々として尙ほ血痕を帯び、我が義勇兵隊長安藤大尉の戦死し、檜原公使館書記官の負傷したる所など、踏み去て感慨禁ずる能はざらんとす。殊に庭樹は盡とく彈丸に碎けて、完膚無きを見るに及び、如何に戦の劇しかりしかを想見するに足る。幸ひに斯かる苦戦の下に防禦の任を全ふし、各公使館員を万死の中より救ふを得しは、唯り

我國のみならず、列國の爲、また清國の爲に、我が軍隊が其の恩澤を被むらしめたること、廣大無邊と謂ふべし。(口繪寫真參照)

(參考) 北京公使館附武官柴中佐より七月廿二日附を以て天津に發

したる報告の概要

各國公使館は六月十三日より全く敵兵に圍まれ、同月廿日より十數營の支那兵は日々晝夜間斷なく公使館を砲撃し居れり

各國兵は各公使館と結び付けたる線を以て防禦線と爲し、柴中佐は日本兵、伊國兵の全部及び露、佛、埃國兵の若干を以て肅親王府の防禦に當り、今や僅に該府の半を保ち居れり

我兵の戰鬥に當る者は僅かに水兵十一名、義勇兵十四名にして、彈藥は尙各人廿四五發許を除すのみ而して、食糧は今後只六日を支ふるに過ぎず

北京城内に在る支那兵は約三十營にして、外に若干の神機營ありさ

れば、援軍の到着一週間以内にあらざれば、當地は恐らくは支へ難かるべし

安藤大尉、小島外交官補、外六名戰死し、榎原書記官外六名重傷を負へり、其他輕傷卅餘名あれども、皆瘡痍を包んで軍務に服し居れり、外國人の死者六十名あり、

師團長及參謀副官撮影

北京に着きける翌日の朝なりき。余は請ふて東京の寫真師某と共に參謀部の後庭に於て師團長及今回陸軍省より特派せられたる宇佐川稅所、兩大佐並びに師團參謀官及副官諸氏を撮影せり。其位地は山口師團長を中心にして、左方は稅所砲兵大佐(篤文)、永田砲兵大佐(龜)、柴砲兵中佐(五郎)、右方は宇佐川大佐(一正)、仁田原中佐(重行)、原田少佐(輝太郎)の七氏を前列とし、鍋木大尉(理八)、譽田大尉(甚八)、伊藤少佐(瀨平)、石井少佐(忠利)、平田大尉(時九)、中川大尉(幸助)、貝塚中尉(重太郎)の七氏を後列と爲し、余は寫真

機を分捕銀塊を容れたる箱の上に載せて撮影せり。此等各將校中、永田大佐は參謀長代にして、伊藤、原田、石井、中川、譽田の諸氏は、參謀官、平田、鍋木、貝塚の諸君は師團副官なり。當日不幸にして參謀長石橋大佐(健藏)高級副官小原少佐(文平)の二氏、病の爲に列せられざりしを憾とす。此日正午、師團長は近日内地へ凱旋する第九旅團長眞鍋少將(斌)及同旅團將校の爲に送別會を公使館内に開かれ、余等また招待を受けて其席に臨みたり。肅親王府の新戦場を巡覽し、は其日の午後なりき。(口繪參照)

軍事警務衙門

聯合軍の北京に入るや、各國の間に占領區域を定め、各國各異の民政を行ふ。此に於て日本軍は順天府に大日本帝國軍事警務衙門を置き、柴砲兵中佐を以て衙門長官に任ず。順天府は安定門内に任て日本公使館より約一里許を隔て、從來直隸全省を治めたる所、其の沿革を聞くに往時遼の太宗始めて此に都し、南京、折津府と名けて以來、宗朝には燕山府を

置き、金の時代に金主も此所に幸して都を定め、燕京と名け、元の世祖も此に都して大都路と稱し、明の洪武帝の初年、大都路を改めて北平府と稱し、も永樂年中都を此所に移し、始めて順天府と稱し、別に皇城を築き、北京と稱す。清朝順治の初年、また順天に都し、順天府署を内城の東北、安定門内に設け、京畿の治理を掌とらしむ。即ち今の順天府なり。現に通州、昌平州、涿州、霸州、薊州、固安縣、永清縣、東安縣、香河縣、三河縣、武清縣、寶坻縣、寧河縣、順義縣、密雲縣、懷柔縣、房山縣、文安縣、大城縣、保定縣、平谷縣の五州十七縣を管轄したりしが、北京城陥落するに及び、日本軍の占領に歸し、諸は軍事警務衙門を此所に置き、北京内城の殆ど一半を管轄するに至りしなり。警務衙門とは行政、警察、及裁判事務を兼ね、柴長官の部下に陸軍大尉守田利遠、法學士小貫慶治等の諸氏事務を督す。守田小貫の二氏は、皆な籠城中一方に將たりし人なり。余は十月三日、民政の實況を聞かんと欲して、衙門を訪ふ。北京内城の東半部に南北を縦貫する大

街二あり、一は南方の城壁より肅親王府に沿て北方の安定門に達するもの、一は北方の城壁より南方の崇文門に達するものにて一里餘の間殆ど平行す。而して余は日本公使館を出で、東方に佛獨兩公使館を左右に見て左折し、王府大街の焼跡を一直線に北に行き、二十町許りにして前方に安定門、右方に東直門、左方に皇城地安門外の鼓樓を望む、十字街頭に達し、更に左に曲れば、右方に一町許りを去て一大日章旗を立てるもの、即ち順天府なり。此邊には街々衢々に日本兵徘徊して守備し、また憲兵は警察の職を執るが故に、不知の市街も道に迷ふの虞無く、所々に清民中の下等社會は、群集して貨物古道具の類を路頭に鬻ぎ、また市街の目に觸れ易き所には、幅二尺縦三尺計の大なる紙を貼り、大日本軍事警務衙門長官柴なる名を以て、保民護商の告諭を掲示するもの多し。

日本軍の民政

順天府の周圍は堅牢の煉瓦塼にて繞らし、構内濶くして樹木茂り、門は

數重に區劃して警備に供し、所々に日本兵守備す。門内には稍や美裝したる清人數人起て何事をか協議しつゝあり、刺を通じて最も奥まりたる事務室に導かれ、柴長官不在なりし爲に小貫氏に就き民治の景况を聞くに、北京の全市中、内外二城を通じ、人口約八十万あり、其の一半は遠く市外に逃れ、殘餘の一半は概ね日本占領區中に移住す、故に面積より言へば日本の占領區は全市の五分の一許なるも、人口は全市の二分の一を集められたれば、一家の中に五六家族の群棲する者多し、足下若し歸路東四牌樓通りに到つて市中雜沓の状を目撃せば、以て其の然るを悟るを得んと。即ち占領區域の地圖を示して細かに之を説明せらる。順がて衙門を辭し、去て門を出れば、忽ち見る門前には數百の清民街衢を填め、其中に高く傘に似たる竿數本を立て、竿頭無數の紙片を結び着け、恰も防火夫の繩の如く、之を中央に圍みて衙門に群集し來る者あり、余は驚いて之を守門の兵に質せば、是れ土民等より柴長官に對し、其の徳政の

爲に業に安んずるを得るを謝せんと欲し、彼れの如く參集し、其の擁する所の竿頭に附するは各戸主の名を署するものにて、之を万民傘と稱し、實に士民の頌徳表捧呈なり、此の如きと既に數々なりと語る。余は此に於て清民の日本軍を敬慕するの厚きに感じ、尙ほ或は彼等清民が一時の諂諛ならんも知るべからずと疑ひ、更に衙門にて聞く所の東西牌樓通りに赴く。

東四牌樓街の熱鬧

日本にて何某横町とも云ふべきを清國にては何胡同と稱し、即ち順天府を去て安定門街を東に横ぎり、小二條胡同、大三條胡同などの間を過ぎ、崇文門街に出づ、此の南北に平行して縦に廣潤なる兩大街に對し、更に東西に横ざる兩大衢あり、一は東直門通り、一は朝陽門通りとす。東直門通りを崇文門街と縦横に交叉する十字街を北新橋と稱し、朝陽門通りの同街と交叉する十字街を東四牌樓と呼ぶ。是れ清國の都市には、各

市街中、所々道路に跨がりて華表の如きものを樹て、上に額を掲げ、之を牌樓と云ひ、其の一個なるを單牌樓と稱し、而して崇文門街と朝陽門街の交叉點には、街の四方に各一個の牌樓を樹つる故、俗は之を四牌樓と稱するなり。皇城の西方にもまた市街の形狀全たく同一にして、宣武門街と阜城門通りの交叉點に四牌樓あり、故に東西の字を冠して之を區別す。實に東西の兩四牌樓街は、内城中平時最も賑ふ所といふ。余は順天府より北新橋に出で東四牌樓に向つて歩するに、此の市街は幅延十間計りの通路を三條に分ち、中通りは一段高くして車馬輻輳し、左右の通りは低くして人道に供するもの、如く、其の人道には菓物店、煮賣屋、古着舗、骨董店等空地なきまでに陳列す、其間を行く者絡繹として肩摩腕摺し、各國の軍人あり、清國の男女老少あり、立ちながら菓物を食ふ者、屈んで古着を檢閲する者、其間には種々の藝人の場を開き、机に對して辻講釋を爲す者、胡弓を彈て歌ふ者、竹を掌裡に鳴らして踊る者、此等の戲

を觀んとして群り圍む者、雜踏熱鬧、喧々囂々、縁日の如く、祭禮の如く、歩を進むること難し。而して道路は皆な土にして、久しく降雨なく、塵埃空に漲り、遠く望めば濛々として見る可らず、其間に陳列する骨董、古着の類は、各國兵の分捕品を清國商人の手に買ひ、彼等は未だ商店を開く能はざる故、各此に運び來つて街頭に陳列す。故に其品類には頗る貴重なるもの多く、貴紳用裏毛皮の外套、貴婦人用金銀寶玉入りの耳飾りなど、平時には得易からざる物も、今は其代價甚だ廉に買ひ得るといふ。故に之を買ひ若くは見んと欲して群集する者幾千人といふ數を知らず、實に北新橋より東四牌樓まで、十町許の大街は立錐の地なきまで人を以て填む。四牌樓は南北に日本と露西亞の占領區を劃し、彼の雜踏せる大街も一步を露西亞占領地に移せば、途上行人絶へ、闕として人聲無く、唯だ白帽子の下に回みたる眼光を耀かす露國兵の所々に徘徊するを見るのみ。實に日本兵の守備する所は、規律嚴肅、秋毫犯さず、之に反して外

國軍隊は、掠奪、放火、姦淫、虐殺、あらゆる蠻行を働らきて憚らず、中にも露西亞及佛蘭西の兩軍最も甚だし。故に清民は皆な他國占領地を避け相率ゐて日本占領地に赴くなり。此に於て清民の日本行政に謳歌し、群集して頌徳表を上つるに至るもの偶然ならざるを知らぬ。皇城內及儀鸞殿を巡覽し、は其翌四日にて、萬壽山の離宮を巡覽し、は、また其の翌る五日なりき。

瑠璃廠の書舖骨董店

瑠璃廠とは外城中正陽門外に在て、書籍商骨董商等の櫛を列ぬる一廓なり。正陽門外は北京全市を通じて最も繁昌なる所なりしも、曩に義和團の爲に焼かれ、滿目唯だ頽壁敗瓦の累々たるのみなるも、其の燒跡を漕ぎ分け、五六丁許西に行けば、幸ひに焼け残りたる一廓は、即ち瑠璃廠にて、狹き市街ながら壯大の書肆多く、中にも上海の博文齋支舖の如きは、最も盛んなる店の一なり。店頭は何れも未だ戸を閉るも、中に入れば

書籍は常の如く陳列す。他の商店にては、外國兵の爲に商品を掠奪せられ、一掃して空きに反し、此所の商品のみは、緑眼兒の爲には所謂猫に小判を示すが如く、何の趣味をも解せざれば、幸ひに剽掠を免る。然れども戦亂後は圖書の購客全く跡を絶ちし故、余等の來り臨むを見て、一帙にても多く賣らんと欲し、呼價はさまでならぬも、之を直切れば著しく減じ、平時に比すれば甚だ廉なり。骨董店もまた然り。書畫幅文房具の類、偕は玉製の花瓶、筆洗、研屏、筆架、或は端溪の硯、松烟の墨など、空しく塵埃堆裡に列べられ、余は半兩、五銖等の古錢若干種を買ひしに、其の呼價は甚だ高きも、實際に呼價の半額若くは三分一に減じ、恰かも縁日の買物の如くなりき。

陣 娼妓

琉璃廠の書籍店、骨董舖の市街と連なり、其の東南に遊廓あり、妙齡の少女店頭に駢んで列國聯合の軍隊を迎へつゝありと聞き、之を見るも又

一興と、一夕憲兵に護衛せられ、支那人の通譯一人を案内とし、馬車に乗て素見の爲に赴く。元來正陽門外の市街は、獨逸の占領區にして、獨國兵の規律は、他の露佛兵若くは英の印度兵に比すれば、暴行少なきも、夜間遊廓に入り、殊に各國兵の酔を帯びて來り遊ぶ者多しと聞き、仕込杖を携へ、拳銃を腰にし、憲兵の護衛まで伴ひしは、自から顧りみるも、一笑の價ありき。遊廓の入口には、兩三戸の極めて劣等なる飲食店らしき者、櫛に小なる提灯を掲げて客を迎ふるあるも、其他は皆な固く門を鎖す。案内の支那人は近きて門を叩けば、中より應じて開く家もあり、また開かざるもあり。此等の家は、皆な娼寮にて、門を開かざるは中に客あるか然らざれば、朝來既に多くの客を迎へ、夜間は物騒なる爲に客を謝するなり。其の門を開く所に入れば、頗る汚穢なる小室に、二三の男子ありて門を守り、奥より更に二三の老婆出で迎ひ、高く聲を擧げて呼べば、數人の少女出で來る。少女は概ね纏足にして、歩に堪へざるが如く、面に白粉を

粧ひ、髪は鬘を結ぶあり、或は男子の如く編みて後に垂るゝあり。余等の手を執り奥に伴ふ。誘はるゝ儘に進めば、正面に前の老婆等の腰かくる所ありて、其傍の暖簾を排して入れば、九尺に二間位の小室中、正面に寢臺あり、反對の側に五六脚の椅子あり、先づ客をして踞せしめ、少女等は側に侍して宿せんことを勸む。言語は通ぜずと雖も、其情は舉動を以て察するに足る。余等元來戯れに之を觀んとするもの試みに、藝人の技を奏するなきかと問ひしに、會たま一人の男、蛇皮線を敷して室外に来る。呼び迎へて、敷せしむれば、男も唄ひ、少女等もまた唄ひ、娼妓としては甚だ重寶なり。其の年齢を問へば、十四五歳より十七八歳まで、二十歳以上なるは無し。然れども室内は不潔にして、日本内地の宿場女郎屋にも劣るが如し。勸むるまゝに茶を喫し、少女と藝人には各若干の錢を與へて去り、續いて他の五六軒の舗を見る。皆な大同小異なり。外國軍人中の最好顧客は米國兵といふ。彼等米兵は、日本兵と共に最も規律嚴に、民屋を

燒毀の正陽門

剽掠するが如きは絶無なるも、其の俸給は各國中最も豊かにして、毎週少くも五弗を得、故に酒舗に飲み、娼閣に遊び、最も多く金を散ずといふ。

琉璃廠往復に數回通過せる正陽門は、一に前門と稱し、皇城の正南に當る正門にして、内門及外門に分れ、所謂外門は内門の外に二重に圓形の城壁を繞らし、第一門の防禦破るゝも、尙ほ第二門にて防ぎ、且つ兩門の間に入る者は、城壁の上より瞰視して立どころに壓殺することを得べき構造にして、城壁は何れも高さ十間、壁上の幅延八間、左右の兩側には各々厚さ六尺許の石垣を築きて銃眼を設け、城樓は壁上更に三層樓を建て、城門は城壁の下に穹窿形の隧道を爲し、鐵扉之を閉さすこと他の朝陽門得勝門等と其制を同くするも、皇城の前門だけに、殊に堅牢なるを覺ゆ。眞に一夫之を守れば萬夫も入る能はざる要害なり。而して團匪の暴發するや、火を市内の諸方に放ち、正陽門外の繁盛なる市街も、一炬

の下に焼かれ、火は飛で正陽門の城樓に移り、内外兩門ともに焼けて屋蓋なく、唯だ四壁のみ巍然として半空に屹立す。内門の左右は、内より斜に城壁の半腹に阪路を備ふるが故に、攀ちて登れば、北京全市は双眸の下に在り。城樓の焼煉瓦、粟々として山の如き上に立てば、北方の皇城は近く、大清門、端門、午門より大和門まで、各門の黄色なる屋瓦日に映じて金色を呈し、大和殿、中和殿、保和殿より、乾清宮、交泰宮、坤寧宮まで、一直線に連なりて、背後の景山まで一望の中に在り。東方は崇文門、西方は宣武門の各城樓、兵燹を免がれて、城壁の上に聳え、遠く西北には、萬里の長城ある。連山は、蜿蜒として雲に接するを望む、更に身を轉じて南方を望めば、外城の全景略ぼ下瞰し得べく、實に内外城を通する中央に在て、全都を一覽するには、最好の地なり。城の内外各街衢を往來する者、概ね此の門の隧道を通するが爲に、門内の碁盤街と名くる所は、車馬輻輳して、蟻の群がるが如く、軍旗を掲げて隊伍を爲す軍隊あり、馬車を驅て、烟塵

を漲らす大官あり、紅紫絢爛たる分捕織物を行人に賣る印度兵あり、豆人寸馬往來絡繹として織るが如し。余は寫真機を碎瓦の上に置き、幾たびか此等の景を撮影し、俯仰顧望、暫らく降るに忍びず。既にして日は直隸大原野の地平線下に没せんとするに驚るき、再び城壁半腹の阪路に由て下界に降り、仰で壁上を望めば、半輪の月は摧殘せる城樓の肩に懸り、回顧すれば、城壁碎瓦の間に、守備の露國兵は銃を擔ふて徘徊し、瘦狗は地を穿ちて何物をか捜し、人を見て驚き吠えながら走る等、配合して殊に戦後凄慘の景を増せり。(口繪寫真参照)

(以上第十信十月八日白河舟中にて記す)

北京通州間の日本道路

十月七日拂曉、余等は北京を辭して歸路に上る。行を同くせる税所大佐、辻村監督、田口代議士の諸氏は、例によりて馬に騎りしも、余は馬車にて石田輜重兵軍曹に送られ、崇文門の下にて馬車を先へ廻はし、軍曹に導

かれて門より城壁の上に登り、壁上を歩して東南隅の城樓にも入り、更に左折して壁上なる觀象臺をも見、途上所々に清兵の遺棄せる銃砲臺、槍散彈折劍の狼藉たる間を過ぎ、朝陽門に至りて城壁を下り、軍曹に別れて馬車に乗る。北京通州の道路は、在來の石道の外に、日露兩國軍隊にて各一條の新道を開きしことは前に記せり。而して前日は露國道路によりて通州より北京に入りしも、歸路また同一の路によるも本意ならねば、朝陽門を出て當違坡までは露路を行きしも、此所より石道を横ぎり、日本守備隊大隊本部の前を過ぎ、高粱圍の間を平げて一直線に開きたる日本新道に出で、長勞口、大和庄の諸村落を経て通州に達し、西門を入らずして直ちに河岸に出で、日本軍兵站部出張所の前に到りて馬車を下り、行李を衛兵に托し、東門より城内に入り、守備隊本部に佐本大隊長を訪ふ。前日懇待を受けたるを謝せんと欲し、なり。刺を通ずれば守備隊長出で、接す。井上少佐と云ふ、未だ面識なき人なり、怪みて佐本少

佐の事を問へば、佐本大隊は前日既に北京に轉じ、井上少佐の大隊代りて守備すとなり。故に辭して河岸に歸れば、騎馬にて北京を發したる税所大佐、辻村監督、田口代議士諸氏もまた着す。因て兵站部に請ひシヤンク船一隻を準備し、即ち之に乗る。

野戰電信の困難

之より先、税所大佐の一行は、前日北京より電報を通州の兵站司令部に發し、明日午後天津に下るべき船一隻の準備を求めたりしが、此日通州に來れば電報は未だ兵站司令部に達せず、故に船の準備無く、且つ河岸に在る所の日本附屬シヤンクは皆な蓬を以て屋蓋と爲せる普通船のみにて、板を以て上部と周圍を繞らせるものは僅に一隻あるのみ。其一隻もまた明日海軍陸戰隊の用に充てたるものと聞くも、特に請ふて之に乗ることゝ爲れり。斯かる準備の間に昨日發したる電報僅に達す。五里の距離に送る電報に二十餘時間を費やし、は、頗る怪むべきが如き

も、是れ一に野戰電信の不完全に基くなり。當初聯合軍の天津より北京に進むや、日露英獨の各國皆な沿道に野戰電線を架す。當時我軍の架線材料甚だ乏しく、竹竿を樹て、柱と爲し、麥酒空瓶の頸を切て、磚子と爲し、電線を之に纏ふて以て急を充たし、僅に北京まで達するを得たり。故に其の柱低く、沿道に茂る高粱の風に動搖するときは、忽ち我が電柱に觸れて柱を倒し、然らざるも外國兵中には戯れにステッキを以て電線を打倒す者あり。電線の構造不完全なる上に、妨害此の如く多く、殊に其の技手には技術未だ熟せざる電信隊の兵を用ひし爲に、往々誤謬多く、爲に北京天津間に十日も費やし、ことあり、東京との通信には意義を解せざることも多かりしも、畢竟材料の欠乏は其の主因なりと。之に由て北京通州間に一晝夜を費し、所以を知りぬ。然れども今は遞信省より専門の技手をも呼び、沿道にも守備兵を配置し、電柱も漸次に改むると聞けば、其の不便も遠からずして排除することを得るや必せり。

露西亞兵の掠奪

(115) 露西亞兵の掠奪

船の準備の爲に暫らく河岸に憩ふて待つ間に、圖らずも露西亞兵が白晝群集の中に公然掠奪を爲すの活劇を見たり。河岸は列國の占領區域一帯に船を以て填め、水陸運輸接續の爲に兵士の舟に上下する者織るが如く、其の貨物を運ぶ所の支那人は、數千群を爲し、河岸を七八間離れる隄上には、我が大倉組の酒舗と、之に隣る日本郵便局の前など、最も雜沓する中に、一人の露國騎兵は銃を負ひて馬を走らせ來りしが、會ま大倉組酒舗の前に佇立したる服装卑しからざる支那人が、青色の上衣を手に持ちしに近寄り、手を伸べて其の上着を奪ひ、鎧踏み張て其支那人を蹴斃し、直ちに馬を走らせて去れり。それさへ亂暴の甚だしと見しに、暫時にして再び群集中へ馬を走せて來りしかば、支那人は皆な互に叫び報じ、右往左往に遁げ騒ぐに、今回は何物をも奪はずして去れり。其の傍若無人なる、眞に言語に絶す。

再び白河の舟中生活

舟の準備成りて纜を解き、苦力は流れに棹さして下るに、前日の上流に遡るに反して、舟行甚だ速く、即日馬頭の上流に泊す。翌八日午前馬頭の下流にて、美装せるジャンク一隻、露兵を載せたる多くのジャンクに前後を護衛せられて上流に遡るに會ひしも、此日は奇らしくも朝來雨降り、蓬窓を鎖して閑に將基を闕はしつゝあつて、深く注視せざりしが、河西務に下りて聞けば、前の美装せる舟は、近頃新たに構和全權委員に拜したる李鴻章が、天津より北京に赴くなりけり。北滯に入て既に二旬雨に會へるは此日のみなり。此夜は河西務の下流に泊す。夜に入り雨止み、空は全く霽れ時恰かも陰曆八月望なり。深更蓬窓を出れば、明月高く懸つて江心金を碎き、烟霞搖曳として岸上の艸葉は霜を帯るかと思はれ、壯觀匹無し。然れども冷氣肌膚を冒し、久しく舷頭に立つ可らず、終に入て寢に就く。翌九日は再び揚村に上陸して守備隊を訪ひ、午後十時天津

三井物産會社前の河岸に着き、其夜は尙ほ船中に泊しぬ。

戦後の天津紫竹林

天津の市街は白河の南岸に沿ひ、直隸總督衙門の在る所、人口四十万の大都會、海關道、水師營、武備學堂、北洋大學堂等を置かれ、紫竹林の各國居留地は、高樓大厦軒を連ね、其の繁昌は北京にも勝さり、文明の新事物の輸入せらるゝこと、遙かに帝都の上にて在り、實に北清第一の開港場なり。其の港は白河を上下するジャンク船の外は、僅に小蒸汽船の下流に往來するに過ぎざるも、ジャンクの出入は日に千を以て數へ、直隸全省の大疆域に吐吞する百貨は、一に此所に集散し、雜沓熱鬪言はんばかり無し。遂に義和團匪の亂起りしより、紫竹林の居留地は、三旬日間包圍せられ、停車場より居留地の河岸まで、列國將卒の命を損傷すること數百人、佛國を最西とし、英獨居留地之に隣るも、多く兵燹に罹りしに、各國領事館は幸ひに事無きを得、中にも英租界のヴァイクトリアロードの最も繁

華なる邊は、兵燹を免かれて、既に毎夕歐米人の數多夫人の手を曳て散步に出る者を見る。况して各國軍隊は、最も多く此所に駐屯し、市街は常に兵を以て填め、日本領事館に隣りてアストルハウスと名くるホテルは、戦後の居留地に唯一の旅館なれば、田口君と余とは之に投ずる心算なりしに、露獨兩國將校を以て各室を滿たし、宿泊を謝絶せられ、止を得ずしてまた税所、辻村諸君と共に兵站部の一室内に寓することゝ爲りぬ。

日本居留地

我が天津兵站司令部は、日本領事館に近く、共に獨逸居留地の中に在りて、支那人某の屋舎なり。武備學堂の對岸に在り。戰爭中露國軍は學堂を占領し、此所に舟橋を架す。屋舎を我が兵站司令部に充てられし清人は、日本軍保護の下に在る爲に安心し、今は難を長崎に逃れ居るといふ。屋内廣濶、樓上樓下に巨室多し。余等は其中に在て起居に不自由無きを得。

而して司令部の前は太沽街道にて、附隨の市街は多く焼かれしも、其の焼け跡の兩側には既に六七十戸の日本市街成れり。此等の商人は、多く酒舖として渡航し、今は假小屋を建て、店舖に充て、汁粉屋の店に麥酒をも賣り、烟艸屋にて手拭と鼻紙等をも賣る者なるも、日本軍の武勇と其の規律の嚴肅なるには、支那人は勿論、列國軍隊にも頗る尊敬せらるゝが故に、漸やく規模の擴張せらるべきや必せり。從來天津には日本商人少なく、僅に三井物産會社支店と横濱正金銀行支店及大阪の商人武齊號等の兩三舖あるに過ぎずして、曩に馬關條約により佛租界の西に接して三十万坪許の專管居留地を定めしも、白河の岸に臨む所は甚だ狭ましく、日本人の店舖を設くる者絶無なりしが、今回兵燹の爲に支那街の焼けたる部分を加へ、總て六十万坪を專管居留地と爲し、遠く天津城の南門まで其の區域中に入れんとすと聞けば、我が商人の將來商權を擴張するには、其の便益頗る大なるべし。况や城内より居留地の東端ま

て約三哩間に電氣鐵道を敷設する権利も、戦争前より我國に得しが故に、之を實行せば必ず利益多きを疑はざるなり。(口繪寫真參照)

戦後の天津城

一日天津城の戰場を觀んと欲し、例により稅所辻村田口の諸君と共に、守備隊本部の騎兵上等兵を東道と爲し、將校は騎馬、田口君と余とは人力車にて居留地を出て、先づ海光寺器機局に赴く。器機局は一たび日本軍之を占領し、後に之を棄てしも、總攻撃の日に再び日本軍にて占領し、今尙ほ之を守備す、然れども機械工場皆な破壊せられ、僅かに數本の烟突と四方の壁を殘すのみ、露西亞軍の占領したる器機局は、小銃及彈藥の製造所にて、此所は大砲の製造所なり。故に一に西器機局と呼べども、東に比ぶれば規模甚だ小なり。頽垣壞壁の間、庭中に巨石の碑を存す。其面には

重鎮海疆守、今來况始過、因之觀素習、可說不揚波、結隊明組練、伸行列鶴

鶴、巡方應詰武、行賞意猶多、

關 武 作

乾隆丁亥暮春上澣御筆

と書す。因て思ふに此所には乾隆の頃より兵營を置きし所なるべし。海光寺器機局の門外に小川あり、橋を架す。橋を渡りて二丁許を隔て海光門あり。天津城より城外の市街及各國居留地を圍み、方四五里の間に土塼を繞らし、海光門は其の土塼に設けたる門にして、天津城南門の爲に外廓を爲す。案内せる騎兵の談によれば、七月十三日天津城總攻撃の際、我が軍主力と爲り、英米佛の兵を合せて四國の軍は此海光門より進撃し、門を破つて入れば、此所より南門までは尙ほ一哩許を隔て、眼前の器機局前に道路を挿んで少許の人家あり、敵兵潛伏し、驅逐して小川に架せる橋を渡れば、南門に至る一條の路傍は盡とく沼澤にて軍を進むるには最も困難を感ぜざるを得ず。此朝、海光門を取りし我軍は、終日激

戦しつゝ未だ南門に達する能はず、其夜は敵彈雨下する道路と沼澤中に露宿し、翌十四日の未明に城門を破壊し、始めて城内に入れるなり、當時我軍の死傷四百人許にて、大隊長服部少佐の戦死し、は其所の小川の橋畔なりと、詳かに指示す、雙眼鏡にて南門を望めば、破壊せられたる城樓は唯だ壁を存するのみ、更に身を轉じて海光門外に遠く競馬場を指示せらるゝを望めば、此日は聯合軍總指令官ワードルゼー元師が各國兵の操練を見る爲に、數千の軍隊は蟻の如くに群がり、縦横集散の状、指顧の間に在り。

海光門を下り、絲の如き一條の細路を行き南門に到るに、城壁城門とも北京に比れば規模甚だ小なるも、通州に較ぶれば遙かに其上に在り、南門は二重に築かれ、第一門破るゝとも第二門に防ぎ、敵を兩門の間に壓殺するを得るの制なると北京の各城門と同一なり、攻撃の朝、我が工兵は綿火薬を用ひて第一門を破壊し、第二門は城壁を攀ぢ登りて内に入

り、中より門扉を開きたりと云ふ、試みに城壁の上に登覽するに、城樓は粉蓋せられて僅に残れる四壁に無数の彈痕を印し、以て當日激戦の状を察するに餘りあり、此所より城内を望めば、盡く雙眸中に入る。

天津城は方形なる市街の周圍に、城壁を繞らすこと、北京通州と同じく、城内の中央に鼓樓あり、之を中心として、十文字に街路を四方に通じ、東西南北の四門に達す、其の街路は狹隘ながら、總べて巨石を敷き、市街は概ね兵燹を免かる、故に十文字の街路を以て、城内の全市を日英米佛の四國間に區劃し、日本は戦鬪の主力たりし故に、北門より東門までの最も繁昌なる所を占領し、北門外の市街も皆な我が守備區に屬しぬ、此等の市街に於ける民政は、日英露の三國より委員を選任し、民政廳を都統衙門と稱し、舊直隸總督府に置き、市街には巡捕と名くる警察小吏を清人中より任命して、巡邏せしむ、巡捕は淺黄色の制服の腹に、白地の圓中に都統衙門巡捕と書したるを着、刀を帯びずして、唯だ手に竹杖を持ち、

市中を巡回し、余等を見れば皆な恭しく敬禮せり。余等は日本守備隊なる第四十二聯隊第二大隊本部に到り、請ふて午餉を喫し、午後税所大佐と余とのみ分れて都統衙門を訪ふ。(口繪寫真參照)

都統衙門の民政

都統衙門は警察、衛生、司法及課税等の事務を掌理し、課税は關稅及釐金税を徵收し、警察は城の内外に各二所の巡捕分局を置き、巡捕をして市中を巡邏せしむるなり。衙門の組織は三頭政治にて、日英露の三國より選出せる委員は、都統と稱し、日本は青木砲兵中佐(宣純)、英國はダチロル中佐、露國はチーガツク少將を各都統と爲し、も、チーガツク少將は、當時日本へ旅行中なるが故に、フーローフ大佐之に代はる。余等の衙門を訪へるとき、三國委員は余等に對し、先づ奇なるものを示すべしとて、奥まりたる一室に伴ひ、二少女を指示す。聞く是れ義和團徒が神として崇め直隸總督裕祿の如きも其前に拜伏したるなりと。一人は十六歳、一人

は十九歳なり、各自ら神と稱し、を數日前密告者ありて生擒し來りしにて、未だ一語をも發せずといふ。二人とも一室の左右に踞して相對し、人品は北京にて見たる娼妓と略ぼ伯仲し、毫も神らしき點を見ず。余は其の室外に於て三國委員及税所大佐を撮影し、更に導かれて委員室に入れば、壁上に西太后親から裕祿の六十一歳の賀の爲に書きて與へたる壽の字の大幅を掲ぐ、筆力雄健にして婦人の手に成れりとは見る可らざるが如し。要するに后もまた一人傑なるべし。卓上には書類を堆積し、壁側には青龍刀、臺槍等の武器を陳列す。其他に吏員は書記官長米人、デンビー、土人事務取扱書記を兼ね、警察部長は英國大尉モクラ、埃國中尉バー、同書記は英人ポーン、巡捕長は英人スチユワード、司法部判事は米人イーマンス、出納は獨國人サンマー、及ボアーにて、ダオロル中佐の秘書官はリード、青木中佐秘書官は小村俊三郎、警察事務官は伊藤次郎の諸氏、各其任に當り、事務は簡易にして進行甚だ敏活なるもの、如

都統衙門を辭して白河の岸に出で、對岸なる水師營を望み、河に沿ふて暫らく市街の燒跡を過れば、支那人町と居留地の境に牌樓あり、區して路隘人多不許馳馬と書す。實に此邊は太沽より天津を経て北京に通ずる本道にて、日夜往來絡繹たる所、今は此所に電氣鐵道敷設の權を日本人にて得たるなれば、速かに其の權利の實行を望まざる可らず。斯くて此日は黄昏に宿舍に歸る。

(以上第十一信十月十一日天津兵船司令部にて記す)

東西八強國の連合軍

日露英獨佛米埃伊八強國の軍隊、今は盡とく天津に屯集し、其數は北京よりも多く、殊に獨逸元帥ワルデルゼーは獨逸領事館に居り、毎夕各國參謀官と晚餐を偕にして軍務を協議し、元帥の率るたる獨逸の軍隊は、多く此所に舍營し、佛國兵も近頃新たに本國より到着したる者多く、露

國兵は、公使と共に北京を去りて多く此所に在り、故に連合軍の真相を知るは方今天津を以て最も便と爲す。某將校の談によれば、各國軍事上の視察を爲すには、平時歐米各國を巡廻して一年を費やすよりも、現時一週間天津に駐在するを遙かに便と爲すといふ。蓋し然らん而して各國兵中最も規律無く、人道の上より怒すべからざる蠻行を演ずる者は露國兵にして、其の兵卒は年齢體格ともに一定せず、一見して無賴漢の集團なるが如し。露兵に次で亂暴を働らく者は佛國兵にして、兩國兵は何れも支那人を見て人間の待遇を爲さず、財物を掠奪し、婦女を強姦し、老幼を虐殺し、家屋に放火して憚からず、英の印度兵また財物を掠奪するもの多きも、露佛の如く將校の默許し若くは自ら之に加つて共に蠻行を働くが如きこと無し。獨逸兵中新たに本國より來りしものは、外見頗る規律嚴に隊伍は常に整々たるものゝ如し。埃伊の二國兵は其兵少なきが故に、亂暴もまた少なし。其の戰鬪に臨めば最も勇敢に、平時の規

律は最も嚴肅に秋毫犯さず、各國軍の皆な憚り、清國人の因て以て僅かに安を保つを得るものは日本軍なること、一たび其地に臨む者の何人も異言を挿む能はざる所なり。而して軍紀の正しきを以て日本と並び稱せらるゝは米國兵と爲す。故に日米兩國の兵は最も親しく、言語通ぜざるも互に往來し、兩々手を携へて散歩し、米兵は屢しば日本兵を酒舗に伴ふて饗應するを見る。聞く所によれば米兵一週間の俸給は約五弗にして、日本兵は一日僅に五六錢に過ぎず、故に米兵は殊に同情を表し、酒舗の共同飲食費の如きは多く自ら負擔するなるも、此れにはまた別に一理由あり、酒舗は多く日本人にて、外國兵には麥酒一瓶を普通に一圓づゝに賣るも、日本兵には特に五十錢づゝにて賣る故、米國兵は日本兵を伴ふて買はしむるときは、饗應を爲すも尙ほ利益あるに由る。然れども啻に酒食に於てのみならず、平生營外に遊ぶとき、日米及印度の三國兵は一所に會し、露佛獨の三國兵は他所に會して遊戯し、宛然三國

同盟の對峙する觀あるは、唯り天津のみならず、北清各地到る所皆な然り。而して近來獨逸兵は露兵の暴行甚だしきに困しみ、稍や阻隔の色ありといふも果して然るや否を知らず。

佛伊兩國軍の亂暴

我が軍の勇武は實に列國に冠たるも、我が北清に於る外交機關は、軍隊の行動と一致せず、爲に當有の權利をも主張する能はざるの嫌多きを憾とす。其の一例は開戦前に在天津の三井物産會社支店にて、人を天津の上流五里許の濁流と名くる地方に派し、綿花を買ひ集め、白河の岸まで運び來りしに、會たま戰亂生じ、之を收むる能はずして時日を経過し、天津の戰亂平定後、伊太利軍隊より天津市中に三井洋行の記號ある綿花を發賣するもの多し、此に於て三井物産會社は我領事に請ひ、伊國領事に交渉し、局外國民の財産を掠奪するの不當を論じて返却を求めし、伊太利軍司令官大佐ガリヲニの名を以て之を拒絶して曰く、彼

品は正當の手段を以て捕獲し、聯合軍司令官の承諾を得、上流より天津まで運び來りしもの、若し伊軍にして捕獲せざれば兵燹の爲に焼失せしも知る可らざるなり、故に之を返附するを得ずと。此の没理の口實の下に掠奪せられたる物も、終に之を回復する能はず、結局三井物産會社は自己の商品を再び自ら買収したりといふ、外交の不振は概ね此類なり。三井物産會社支店は、佛租界の中に在り、今は我が海軍陸戰隊及陸軍兵站監部を置くも、周圍は新着の佛國兵を以て充滿し、其兵は未だ日本軍の勇武を實見せざる爲に、數しば日本人に對しても暴行を加ふることあり。一夕余等は同勢七八人にて北門外の酒樓に飲まん、と欲し、清人の人力車に日本國旗を立てたるを連れ、三井物産會社支店を訪ふて車を門前に待たしむる間に、人力車三臺は車夫と共に紛失したり。人力車は各國軍にて發見するまに、捕獲する故、衛兵無れば途上に空車を曳く者無く、余等は新たに備ふに由無く、前程一里餘を隔つる不知案内

の地に赴く爲に、車を失ふて頗る困むとき、一人の日本水兵來り告げて曰く、余は今河岸にて佛國兵と喧嘩せり。彼れ佛兵は日本國旗を立てたる人力車を強迫し、強て乗らんとして、車夫の拒みしかば、彼れは其の車夫を毆打して追ひ退け、燐寸を以て車上に火を放つ。余は其の亂暴甚だしきを見るに忍びず、之を制止し、忽ち余に向つて車上の蒲團を擲つ。余また之を投げ返すや、彼れは蹴て車を河中に投じ了せり。思ふに諸君の失へる車の運命は、皆な當に此の如くして佛國兵に奪はれたるならんと。余等は始めて其の紛失せる所以を解し、終に一車に二客を積み、北門外まで行けり。佛國兵の亂暴は日本人に對するも尙ほ此の如し、其の清國人に對するや知るべきなり。

北門外の酒樓と藝妓

天津城の北門外は、從來酒樓藝妓屋多く、中にも侯家後歸買胡同なる義和成など、酒樓の巨擘と稱せらる。余等は一夕其の義和成酒館に飲む。館

は隘巷の間に在り、門前は暗くして時に誤つて人糞を踏むの虞あり、實に清民の俗途上に脱糞するを意とせざるなり。此の狹隘の巷、左右は皆な藝妓の家といふ。古來花柳街を狹斜巷といふより見れば、支那の習俗古來皆な然りしもの、如し此の隘巷を酒館の内に入れれば、邸の四面は煉瓦塀を繞らし、邸内は數區に劃し、客室數多く、數人の壯丁は門内に迎へて一齊に好來と叫び、導いて奥の一室に伴ふ。余等は豫め事情に慣れたる人に囑して準備せしめられたれば、酒館には室を清め、膳差を調べ、男女の藝妓をも聘して待てり。室の中央に卓子を圍み、客數に應ずる椅子を配置し、卓上には十數種の菓物、菓子及其他の小菜を陳列す。此等小菜の種類に山り、後に出す料理の精粗を判し得るといふ。順がて交はる々々々提出するもの、燕巢、鱈、鯉又は鴨の全身を煮れるもの、羊肉又は雞肉の油に揚げたるもの、鰻又は蟹を精酒に漬けたるもの、或は雞卵の石灰に漬けたる、或は木耳の醋に浸したるなど、其數三四十種、殆ど前後應接

に違わらず、味は甚だ美なるも、器物は清潔ならず、長き黒色の箸にて各自器物より摘みて喫し、液は匙にて掬ひ飲み、了れば其匙を卓上に置く、卓上に上被なく、食に膳無し、口中飲下し能はざるものは、皆な卓下に吐出す。潔癖の日本人には異様に感せざるを得ず。妓の杯酌に侍する者、六七人、髪と耳とに珠玉を飾り、衣裳は綾羅を纏ふて、其の酒館に往來するに、轎に駕し、酒席にも各一人の侍女を伴ひ、客傍の隅に踞し、敷しは起て、經足の歩を軽く運び、周ねく客に酒を侷め、また勸めらるゝまゝに自ら飲み、言語通ぜざるも、能く手を以て語り、眼を以て談じ、頗る慧敏なり。其年齡を問へば、十五六歳より十七八歳まで、二十歳に滿るは無し。其名を問へば、金華、金寶玉、吳金珍、王秀珍、翠香、翠玉など、同じ様なる名多し、其顔は皆な圓く、性來長き面は、故さらに前髪を切り下げて巧みに額上に陳し、以て額の圓を裝ふ。鼻は概して高からざるも、頬豊かにして嬌靨を印し、髪は編みて後ろに垂るゝ者と、束ねて後ろに結ぶ者の二様あり。簪は金

玉若くは生花を束ね、中には桂花を連ねて香氣馥郁たるあり。酒を侑むるの間拳を鬪はす、拳は兩人出す所の指數を合算し、其數を呼び當てたるを勝とし、其の拳を開くとき、滿福壽々々と叫び、敗したるとき酒を飲む。妓また皆な能く飲み、鬚眉男子を避易せしむ。酒は日本酒に比して味淡く、之を飲むも酔ふこと少なし。妓は踊らず、また鼓せず、唯だ歌ふのみ、別に相公と稱し、男藝者二人席に侍せり。能く歌ふ。一人は年齢十四、他の一人は十六、嬌容女子の如く、客の膝に倚り、或は酒を侑む、相公の名は龍陽の意と聞く、客の枕席にも侍するなり。別に樂人あり、専ら樂を奏す、胡弓、蛇尾線の類を鼓す、男女とも歌ふときは、樂人と對して和し、背を客に向けて起つ。歌は多く、演劇中の科白といふ。妓の侍女は席の四隅に坐し、妓の用を奉じ、客の命あれば酒をも侑む、皆な年増なり。容貌美ならずと雖も世故に暗練し、ともに興を幫く。宴散するとき、妓は客を自己の家に伴ふことを勸む、之を諾すれば、妓はまた輜に乗じて先に歸り、裝を

改めて家に待つ。妓の家は近く酒館門前の陋巷に在り。侍女に導かれ、門を排して入れば、門内に數室あり、室内には寢臺あり、數個の椅子は卓を挿んで在り、卓上に麥酒及菓物等を供ふ。數客集りて一室に飲み、後に各別房に眠るものゝ如し。然れども余等は一酌して後に辭し去り、其後の状況を説くに由無し。(口繪寫眞參照)

天津停車場の戰場

十月十二日眞鍋第九旅團長は天津を發して本國に凱旋す。宇佐川大佐また其の行を共にす。田口君と余とも同日天津を發し、塘沽まで行を同くす。此日午前十時天津停車場を發するに、在天津の我が文武官は皆な見送る。露國の鐵道管理者は、旅團長の爲に特に清めたる一車を最後に繋ぐ。余等また隨ふて同室に入る。第十一聯隊長栗屋大佐また同室に在り。旅團長は室外に立ちて停車場に於る當日の戦況を問ひ、江口大隊長はプラットフォームの燒跡に立て詳かに地勢を指示し、清兵は水師營

砲臺より此所を砲撃して最も我軍を困しめ、また白河の左岸よりも近く停車場に進撃し來り、我が第十一聯隊にては、爲に一中隊の將校盡とく死傷したる苦戰地は此所なりとて、自から其地に就て、當時の戦況を語る。既にして一聲の漁笛に別を告げ、二時間にして、塘沽に着す。途中の車中にて露兵の給仕する者に若干の金を與へしに、彼れは他の同僚に見らるゝを恐れ、忽ちポケットに収めて知らざる爲し、而かも茶を供し、咖啡を進むるなど頗る恭やし、其將校の談によれば、錢を與へて使役せば、外國兵中露兵ほど柔順なるは無しと、實に其の然るを知りぬ。

(以上第十二信十月十三日汽船公平號中に記す)

太沽解纜

塘沽にて余等は旅團長の一行に暇を告げ、豫て天津にて乗船券を買へる招商局漁船公平號に乗る。此所にも露佛兩國兵は、掠奪品を河岸にて販き、日本の酒舖などは其所に集まり、朔風に吹れながら河岸に系圖買

の市場を開始するあり。余等は船の解纜まで二晝夜間此所に滞泊し、其間數しば上陸して所謂系圖買の市場に臨む。公平號は清國招商局附屬なるも今は三井物産會社所屬に改む。船小にして上等船客室は二室のみなるも、久しく定期船無りしが爲に、船客輻輳し、今は各國の上等客二十一人を乗す。而して日本船客八人ありし内、四人は皆な客室に入れ、余等は食堂中に臥し、歐米人は多く甲板上に起臥せしむ。斯く日本人に對し外國人の歩を譲りしは、一に戰勝の賜ものと謂ふべし。斯くして十四日の午後太沽を出帆したり。斯くて西沽の日本運輸通信支部の前を過ぎ、白河々口砲臺の前を過る頃、日は既に暮れ、太沽沖の列國艦隊の側を過るときには、各艦上に輝やく燈光は花の如く、恰も屋氣樓の海上に浮びしかと疑はれ、壯觀匹ひ無し。此所を過ぎて後は、食堂中のテーブルの上には横はるに、既に前日來連夜經驗を重ね、卓上より轉げ落つるの虞も無く、翌十五日の午後二時過に清國山東省なる芝罘港に到着せり。

芝罘港の地勢

芝罘は北清の各開港場中今は天津に次で最も緊要の地勢を占む。威海衛と膠州灣を左にして、旅順と大連灣を前にし、各地とも一夜の航海を以て達すべく、太沽、山海關、牛莊の各地へは、一晝夜にして達すべく、東方は韓國の仁川、西方は上海まで、また何れも一晝夜にして達すべく、其の海灣は烟臺の丘陵を繞り、浪穩かにして、三面は山を繞らし、税關及び各國領事館は丘上にあり、外國人の商館ホテル等は丘の半腹に在り、支那人の市街は丘下より西方に連なる、最西端にはまた一丘陵ありて、玉皇廟を安んじ、道士之を奉ず。廟の西方は群山逶迤として連なり、烟臺の東方も起伏する山脈に續き、海灣を隔て、芝罘の村落と相對す。元來芝罘とは其の對岸村落の稱にして、方今の所謂芝罘は、支那人の稱して、烟臺と呼ぶ所なり。其故は此地元と渤海灣の咽喉に位するが故に、海岸の丘上に烽火臺を設け、外寇又は内亂あるの日、烟を揚げて變を報ずる所なり。

り。烟臺の名之より起る。故に今回北清の變起り、天津と日本國との間の電信切斷せらるゝや、我が派遣軍は芝罘を以て電信の發着所と爲し、其の丘上なる日本領事館の背後に信號臺を設け、信號兵は晝夜此に詰り、切り、信號旗又は信號燈を以て海上の艦船と通信し、北京天津の各地に一事變ある毎に、水雷艇は太沽より其所まで波を蹴て疾走し來り、其の舷頭より信號を示せば、陸上にては直ちに之に應じて、電報を本國へ發し、また本國より着したる電報の急切なるものは、先づ信號を以て之を船中に報じたり。而して此所は山東省の東端にして、義和團の蜂起せる地を距ること遠からざれば、彼等暴民の何時襲來せんも知る能はざりし爲に、晝夜警戒を嚴にし、一時は此地もまた戰亂地と同一の形勢中に在りしといふ。(口繪寫眞參照)

芝罘の市街

芝罘に來りて先づ目を樂ましむるものは風景の勝なり。天津北京の各

地には、山光水色の眺望絶無なるに反し、此所にては海水澄明にしてまた黄海の濁浪に似ず、瑠璃一碧澄みて鏡の如く、三方を繞らす諸山は樹木多からざるも、他の満目平原なる直隸の廣野に比すれば同日の談にあらず。市街は烟臺を頭として玉皇廟を尾と爲す長蛇の蟠まるが如く、家々の屋瓦は恰かも其の鱗かど疑はれ、所々の松林は風に嘯きて龍吟を聞くが如し。往昔秦の始皇も此所に遊びしことありしといふは蓋し其の勝を賞したるなるべし。宜べなり現時威海衛に在る英國陸海軍の士官等は、夏時には暑を此地に避け、海水に浴して滯留する者多く、シーヒウとピーチの兩ホテルは、各室立錐の地なく、多く客を謝絶すと云ふ。田口君と余とは其の眺海ホテルに投宿す。ホテルは支那人の業にして、粗造の洋館なり。二面は海に臨み、二面は山に對し、館は三棟にして客は盡く西洋人なり。上陸後田口君微に病み、余一人食堂に出るに、四方皆な歐客にして頗る窮屈を感じたりき。

方今日本人の此地に在る者は未だ甚だ少なく、領事館員と郵便局員の外は獨立して門戸を張る者二三人に過ぎず。其中に高橋洋行とて既に此地に二十餘年間居住すといふ高橋某氏が、運送業と諸外國商人の代理店を兼ね、其の所有漁船は隔日に旅順口へ往來するあり。實に日本商人の巨擘なり。領事田結鈿三郎氏は備中高梁の人、郵便局長高垣徳次氏は秋田の人、其他醫士、寫眞師等を合せ、官民總て五十人許に過ぎず。然れども其の地勢の北清貿易上樞要の地位を占むるが爲に、將來漸く發達の望あり。故に第百銀行にては此地に代理店を設けんと欲し、現に高等商業學校卒業生を派遣しつゝあり。日本郵船會社、横濱正金銀行等にては、方今歐洲商人に代理店を委ね置くも、將來此地と日本との關係密なるに隨ひ、支店若くは代理店を置くに至るべきなり。

芝罘の物産

芝罘の物産は、繭、紬、豆粕、桐材等の外に、野菜には日本内地に所謂山東菜

の本場にして、日本料理に用ふる菜漬の味の美なるは到底内地にて舌に上すを得べからず。また菓物に富み、中にも萊陽梨と名くる梨子は清國にては、梨子の王と推賞するものと謂ふ。其の産地は山東省中の萊陽にして、其味は林檎に似て、滋味は林檎よりも多く、之を噛んで毫も口中に滓を留めざるは、真に梨中の王たる名に耻ぢず。其他柿及葡萄等また甚だ多く、余等は田結領事の晩餐會と高垣局長の午餐に招がれ、何れも日本料理の饗を受け、久々にて小鯛の鹽焼や鳥鍋に箸を下し、舌を敏して美味を感じ、其の魚鳥の肉類もまた甚だ富むといふ。而して其間豆を以て製せる素麪を饗せらる。内地の素麪に比すれば味ひ美にして且つ保存に便なり。將來日本に輸入せば、内地の素麵餛飩等の爲には競争の勁敵たらんとす。余はまた此地産の豆粕の近來多く日本へ輸入せらるゝを聞き、其の製造所を見たり。所謂豆粕は、豆を以て油を製したる其の糟粕なり。油を製するには先づ豆を壓し潰す爲に、直徑三間許の輪

状を爲せる幅廣き軌道の中へ一の車輪を箝め、一頭の馬をして其の車を牽きつゝ、軌道の中を循環し、而して人は軌道の外に在て斷へず適宜の量なる豆を軌道中に投入し、車輪を以て壓して潰さしめ、其の潰れたる豆は移して他の底淺き釜に投ず。釜中には水無く、唯だ藁を濡して一方を束ね、他方を開きたるを置き、潰したる豆は藁の上に廣げて釜の下より火を焚けば、豆は藁の濕潤せる爲に蒸さるゝなり。而して其の稍や蒸されたるを俟ち、直ちに下なる濡藁を以て包み、圓く束ねて數個を重ね、之を壓搾臺上に上せ、楔子を打ち固めて固く壓搾し、斯くして搾り取る所の油は食料及自餘數多の用途に供し、其の油を搾りたる糟粕は、豆粕として日本に輸出せられ、日本にては長野福島等各縣の養蠶地には桑樹の爲に無上の肥料と爲るなり。桑樹は芝罘附近の野にも多く培養せらる。故に此地には絹をも産す。然れども古來山繭を以て織る所の繭紬は、此地の持産として稱せらる。

芝罘の風俗

直隸省にては彼れの如く列國連合軍に蹂躪せられ天子は外に蒙塵し國民皆な生命財産の安を保つ者無きも其の隣りなる山東省に來れば戦争の状況は殆ど全たく之を知らず余等に向つて北京の戦況を問ふ者多し。天子蒙塵の事の如き之を語るも深く意に介せず實に此國の人民には到底勤王心愛國心などは望む可らざるが如し余等は市中を巡覽し市街西端の高丘なる玉皇廟に詣りしに廟は東端の烟臺と相對して全市を雙眸中に望むを得たり。廟後の山上に會たま芝罘守備の支那兵二十人計り集り露臥して煖を食ぼるあり余等は近つきて之と語り紙卷烟艸一本づゝを彼等に與へて其の兵器を見るに器は新式なるも兵は甚だ規律無きものゝ如し然れども彼等は袁世凱部下の兵にて山東の精兵なりといふ。彼等また余が携ふる仕込杖を抜き其の刃の晃々たるを見て一驚を喫したるが如し余等は玉皇廟の歸路山下の墓畔に

藝妓と演劇

一古墳を擁して四十歳許と二十歳許の兩個の婦人が聲を擧げて慟哭するを見之を東道せる人に質せば是れ亡夫又は亡父母等の未亡人又は子女にて彼等は死者の命日には斯く毎年來りて終日其墓畔に泣くを禮と爲す是れ眞に泣くにあらずして唯だ泣く爲を爲すなりと嗚呼虚禮もまた甚だしと云ふべし。

余はまた市中の巖海樓と呼ぶ所にて午餉を喫し慶興樓と呼ぶ家にて晚酌を試み晚酌には一人の藝妓を招きたり。料理は何時にも肉の油膩又は煮たるものにて天津にて喫したると大差なきも酒樓の構造室内の器具偕は料理の種類まで田舎と都會ほどの差違あり來りし藝妓は長春と呼び容姿も服装も天津のに比すれば劣ること數等なり。然れども妓の歌ふとき起て客に背くこと樂器は妓の外に樂人ありて之れに和すること妓の能く飲むこと好んで拳を闘はすを勧むること等は同

一なり而して其の拊戰を闘はすとき、天津にては万福壽々々々と叫ぶに、此所にては長福壽々々々と叫ぶが如くに覺へたり。妓は隣席の客に聘せられたる他の妓と互に往來し、中間を隔つる屏障を開きて互に覗き見るが如きは、毫も無禮と爲さるるが如し。余はまた一夕演劇を觀たり。戯題は三國誌の時代物と、拾金といふ世話物にて、時代物の俳優は何れも金装燦然たる衣服を着け、鼓笛喧囂の間に蠢動するは、恰も日本に見る二十五坐の神樂に髣髴たり。拾金とは或る人巨額の金を遺失せりと聞き、之を拾はんとて搜索に出で、道すがら其金を拾はし如何に處分せんかと種々の希望を獨語する滑稽劇、其舉動は優に觀客をして笑はしむるに足る。然ども總して花道廻り舞臺引幕揚幕の類、毫も無し。唯だジャカジャン、ジャカジャンと騒ぎ廻るのみ。技術は極めて幼稚なるが如きも、清國の演劇は皆な此の如きに過ぎずといふ。

斯くて芝罘の觀察も略ぼ了したれば、余等は日本郵船會社瀛船玄海丸

に乗り、十月十八日の朝芝罘を解纜して朝鮮に向ひぬ。

(以上第十三信十月十八日瀛船玄海丸中に記す)

仁川と京城

日本人の海外に出るもの、近年々々其數を増ししも、多くは他國人の爲に驅使せらるゝ労働者にあらされは、同胞の体面を傷つくる醜業婦の徒にして、自家の資本を以て事業を海外に營み、能く一大勢力を爲すものは、寥々として晨星の觀を免かれさる中に、今は韓國京城仁川間に於て日本人の手を以て京仁鐵道を敷設し、我國人海外企業の嚆矢たるのみならず、先づ邦人が足を大陸に伸ばす第一歩を此に定めたるは、京仁鐵道の爲に祝すると同時に、我が國光宣揚の爲に最も賀せざる可らず。惟ふに世界の交通は最早水運によつて往來するに満足せず、専ら鐵道に由らんと欲し、西比利亞鐵道の落成はまた印度洋の航行と蘇西運河の通過を要せず、歐米の二大陸を縦貫し、瀛車は貨客を載せて走らんと

す。是の時に當りて亞細亞の最東極端の京仁鐵道は、歐洲及西比利亞地方より呑み來りて太平洋岸に吐き出す貨客、若くは太平洋岸より呑み去て歐亞兩大陸に輸送すへき貨客の爲めには、必ず通過せざる可らざる咽喉たるべし。蓋し將來韓國の鐵道は京城より義州に至り、滿州に入て露國の滿州鐵道に連なり、一面には西比利亞鐵道に接續して歐羅巴諸洲に連絡し、他の一面には山海關より太沽、天津、北京の既成鐵道に接續して支那内地に連絡せんこと必然の勢ひなり。果して然らば方今落成したる京仁間二十六哩の短距離線も、我國が大陸に於る交通權を占領したる第一着手にして、實に帝國の爲に無上の立脚地を固めたるものとて喜ばざる可らず。豈唯だ邦人の成功したる事業なりと云ふのみに止まらんや。

仁川の地は今こそ京城の關門として、京畿、忠清、黃海、平安各道の貿易の爲に咽喉の互市場たれども、今より二十年前は唯だ荻蘆茂る間に數戸

の漁家を見る所の一寒村に過ぎさりしと云ふ。而して方今人口一萬五千餘の中に、日本居留民は四千人に上り、市街の要部は總て日本人を以て占領し、領事館、居留民役場、警察署、郵便局、小學校、公園等、公共の機關は盡く備はり、金融の爲には第一、第十八、第五十八の三銀行支店あり、交通の爲には日本郵船會社、大阪商船會社の各支店あり、商品取引の爲には米穀取引所あり、商人の團體には商業會議所あり、社會の事情を知るには邦文日刊の朝鮮新報あり、和洋各種の旅館、日本風の料理店、皆は藝妓屋待合業まで、具さに備はり、此地に在てはまた身の海外に在るを覺へさらんとす。彼の二十年前荻蘆叢生中の蟹村漁落をして、此の繁昌衢たらしめしは、實に明治十五年四月四日政府より此地を互市場と爲さんことを韓廷に求め、翌十六年一月始めて開港地と爲し、に始まるが故に、方今殆ど其の主たる權力を日本人に握れるものは偶然にあらざるなり。

之を統計に徴するに、明治十六年仁川港の始めて開かれたる年の終に於て、日本居留民の全數は三百四十八人なりしに、廿一年には一千三百五十九人に増し、廿七年には一躍して四千四百九十九人の多きに至りしも、當時は日清戰役中にして、居留民中には永久の居住を定めざる者も多かりしが、其後全く此地に定住する居留民の數は三十年の終に三千九百四十九人と爲り、今は四千二百人に近しといふ。而して他の布哇北米若くは香港、新嘉坡邊に在る本邦人は、概ね外國人の使役を受くる者若しくは同胞の面目を傷くる醜業婦なるに反し、仁川、京城及釜山等の韓國各地に於る我が居留民は、皆な獨立の商人にして、韓人を使役こそすれ外國人の爲に使役せらるる者無く、また専ら醜業を營む者なしといふを聞かば、誰か案を拍て快を呼ばざらんや。

余等は十月十八日の夕日本郵船會社瀛船玄海丸に乗て芝罘を解纜し十九日の午前仁川に達すれば、舊友なる朝鮮新報社主筆中村忠吉氏を

首とし、數多の知人來りて船中に迎へ、伴はれて上陸し、旅館稻田に小憩し、久しく渴したる日本料理の午餐を喫し、入韓劈頭の第一快事と爲し、食後直ちに旅館の門前より京仁鐵道に乗れば、日本内地にては未だ見る能はざる廣軌式の大規模を以て、瀛笛勇ましく亞細亞大陸の一端を走るを第二快事と爲し、また韓國の内地には未だ日本人の雜居を許さざるも、鐵道線に沿ふ各停車場附近には到る所に日本人の居住するを得べき餘地ありて、既に二三戸づゝの社宅を設けられしは、將來日本村落の發芽たるを信じて第三快事と爲し、進んで其京城南大門外に下車し、泥岷の日本居留地に至れば、此所にも居留民は二千人餘に上り、軒を並ぶる商戸は盡く日本人なるを見て第四快事を感じ、更に南山の山腹なる和將臺に上れば、此所は二十七八年の役に久しく大島混成旅團の幕營したる所、韓國王宮を首として京城全市を下瞰し、而かも其地は今後日本公使館建設地と定まりしと聞きて第五の快心事とし

て叫びたりき。實に京城は四五百年來李氏の王朝の都し、所其の國運の振はさると共に、漸く市街の美觀を減し、が如きも、南に南山北に北漢山聳え、四方山を繞らし、中央には漢江の長江流れて、京城の市街は其の南岸に在り。古來の王宮なる昌德宮と、往年大院君の創建したる慶福宮の外に、前年閔王妃の遭害後、國王の思みて移りまし、現時の慶運宮と、もに、一都市の中に三個の王宮鼎足のごとく、對立し、其の舊王宮の壯觀は以て舊時國勢の隆昌なりしを察すべき者多し、都城の四方は東西南北の四大門を以て出入を監視し、十萬の人口其の中に住し、市の中央なる鐘路の繁昌は、流石に鷄林十三道を統治する主權者の君臨する所として見るに足る。而して其の市街の要路と閔王妃の墳墓まで、電氣鐵道を敷設し、之に伴ふて電燈も煌やくは、稍や滑轆にして、宛かも田舎老嫗の頭上に都様の高島田鬮を結びたるが如き觀あるも、既に京仁鐵道成り、また京

釜鐵道も着手せられ、更に元山、義州の兩方面に向ふ鐵道も敷設せらるゝに及ばば、電氣の利用も決して急進に失せざるを悟るに至るべし。

韓國の三王宮

玉樓傾側粉牆空、重疊青山邊、故宮と、唐の王建が漢の武帝の綺岫宮を詠じけん景を、余は今眼のあたり韓國の舊王宮に於て見、轉た古人の詩の巧なるに服しぬ。韓國京城には現に三王宮あり、其一は古來の王宮たりし北漢山の麓なる昌德宮、其二は現時の皇帝の生父大院君が往年國力の大部を傾けて築きしといふ白岳の麓なる慶福宮、其三は現今皇帝の住はせらるゝ慶運宮なり。財政裕かならざる韓國に於て、一都府中に三個の王宮を存す、其事怪むべくして抑も由來あり。李氏の王統續くこと既に三百年古來昌德宮の中に住ひしに、大院君李是應不世出の英才を以て多く政治の改革を行ひ、人心を新たにするに及び、舊來王宮の規模を小と爲し、偕は新たに慶福宮を造り、建築の莊嚴なる、朝鮮國に在ては